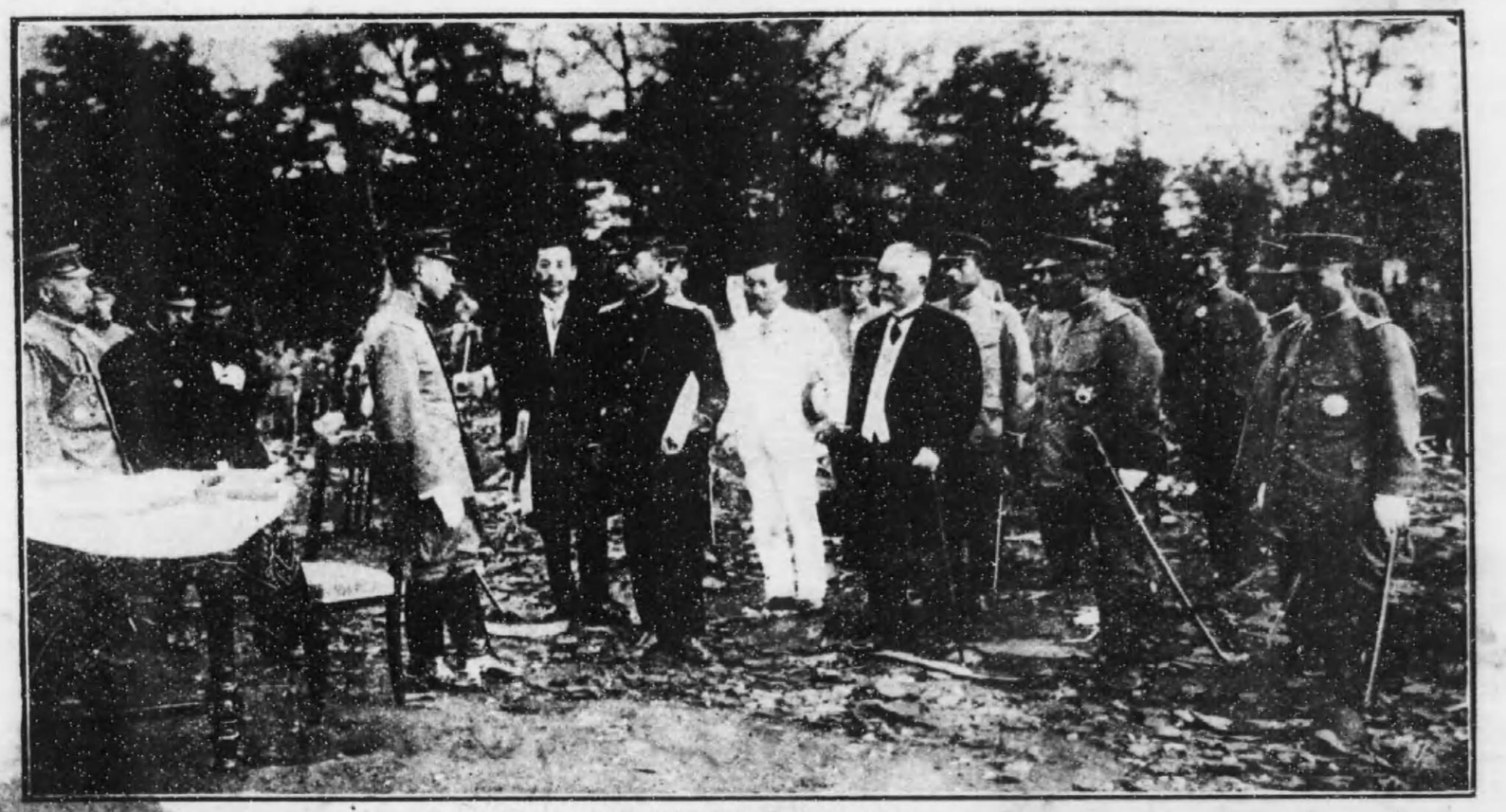
526
15

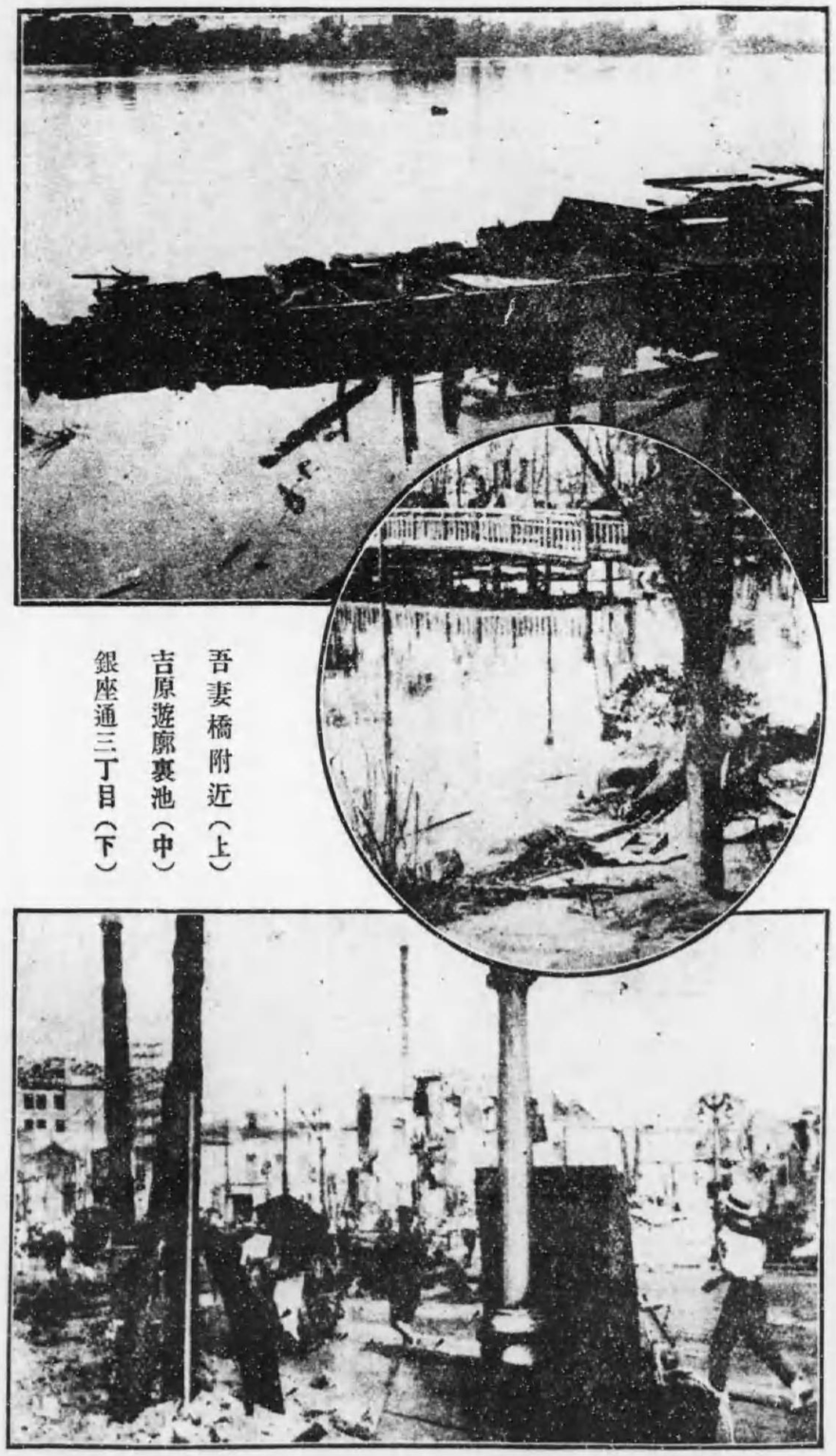
40cm

部

526
15

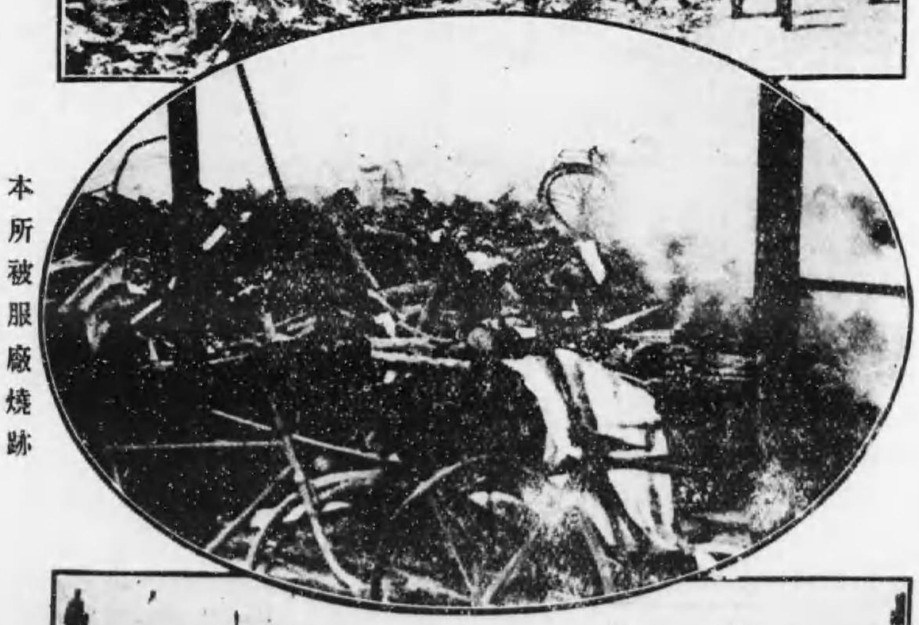


九月十六日攝政宮殿下震災地御視察(上野公園にて)



吾妻橋附近（上）
吉原遊廓裏池（中）
銀座通三丁目（下）

淺草十二階の殘骸



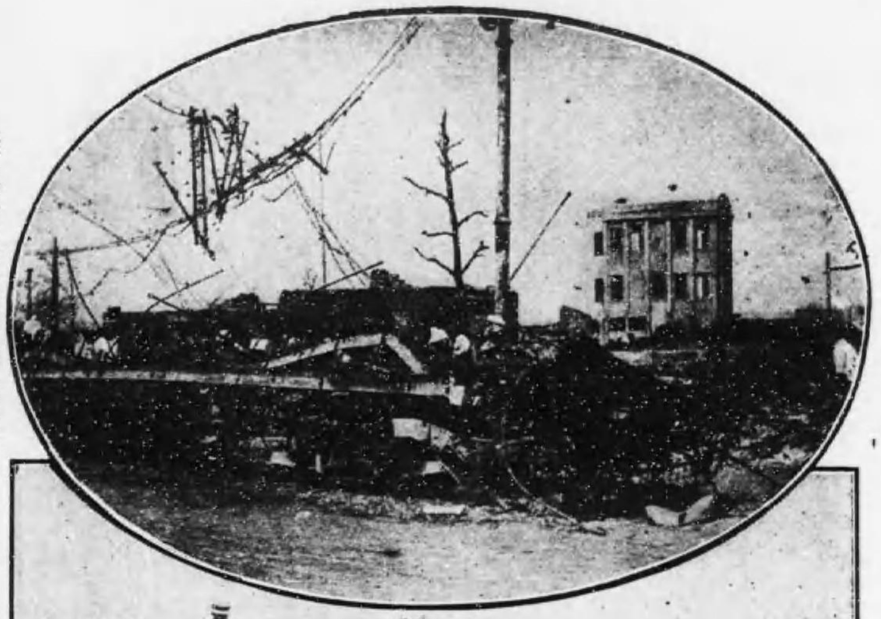
本所被服廠燒跡

神田須田町附近

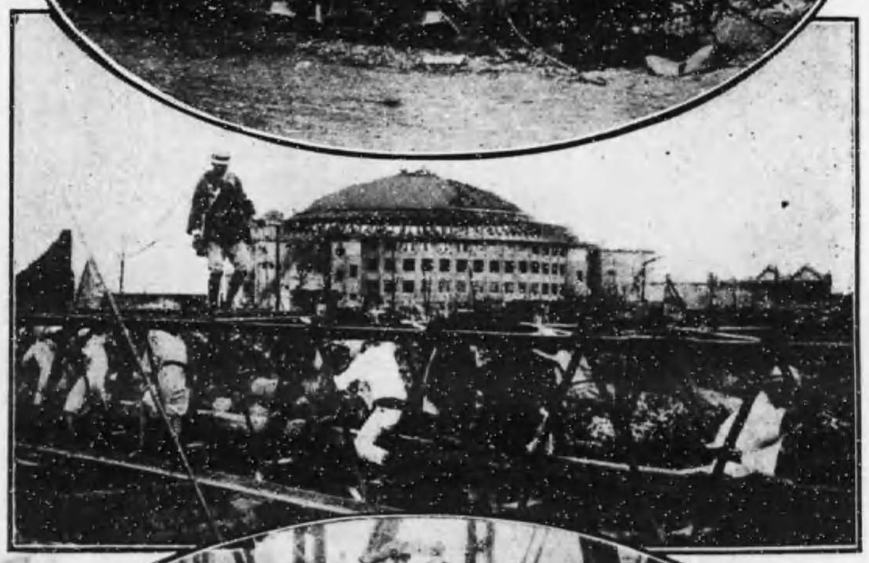
電車内の避難民

荷馬車の乗合車

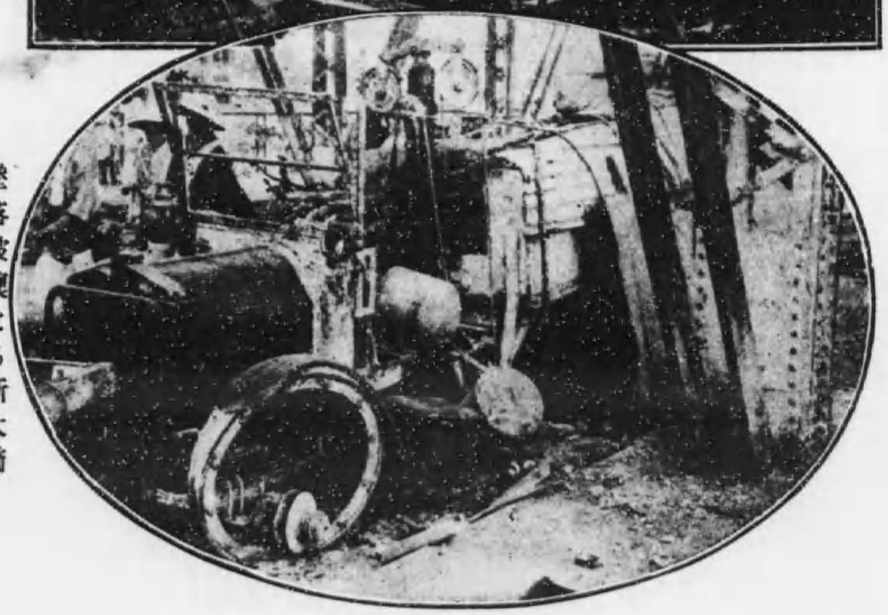
日比谷公園の避難民



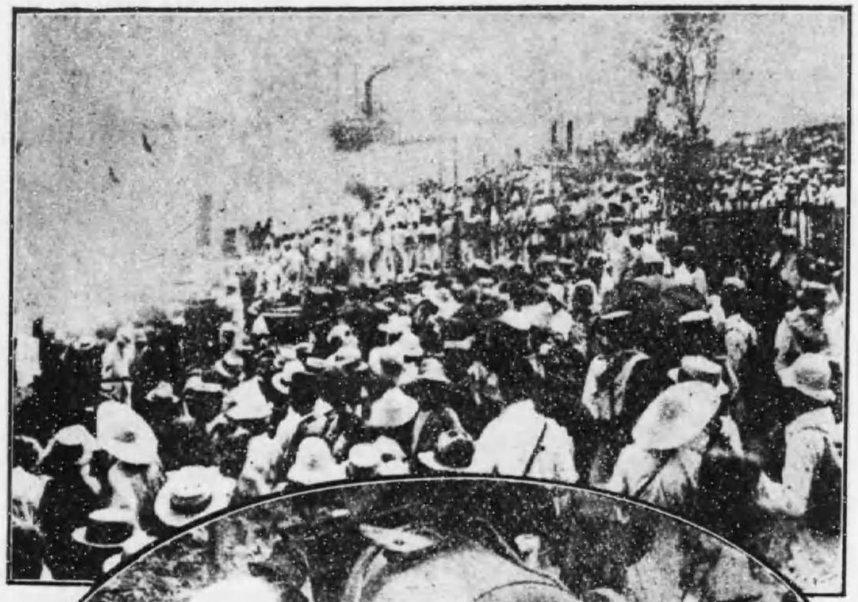
築地附近電車の殘骸



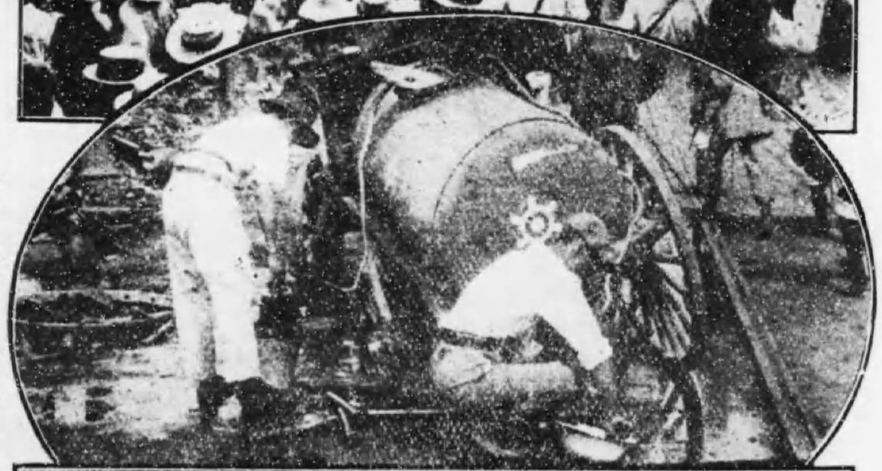
國技館燒跡遠望



墜落破壞せる新大橋

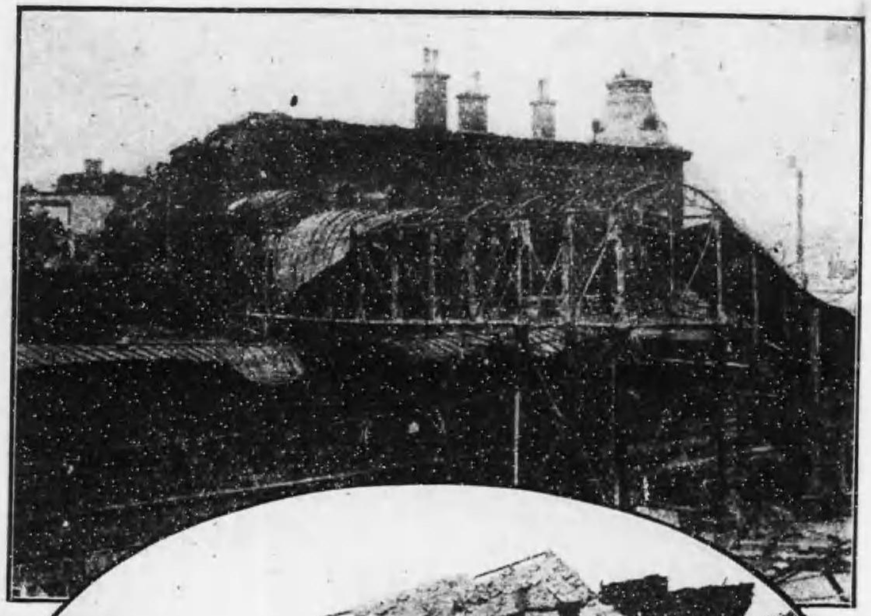


芝浦に救助船到着



タンク車で給水

救助米配附(人形町)



横濱驛の慘狀

横須賀軍港糧食倉庫崩壞

横濱の地われ（相生橋附近）

(上)民難避の坂支道谷澁
(中)グンイデルビ内の丸
(下)氏淵田者著の中集蒐料材

126-16

序文

關東一帶に亘る今回の大震災、帝都に於ける大火災は、そのすべてが口筆を絶し、凄慘の限りをつくした。

九月一日より一週日に亘る其の慘禍災害は、あらゆる形容詞を連ねても、以て其の萬分の一の影を表すことゝ出來ない。

震天動地！破天荒!! 古今未曾有!!! 關八州壞滅！帝都廢滅!!

すべてこれ、辛ふじて其の一部の實狀を寫す片々たる空辭に過ぎなかつたのをどうしよう！

死傷者數無慮百萬！倒潰燒滅建築物五十萬戸!! 三百年の文化を誇りてし帝都東京も、東洋一の商港横濱も、あゝれ空しき灰燼の廢墟と化しおほした。

死屍累々として、到る處惡臭の放つに委して慘又凄！

朝に和樂團欒の親子兄弟、忽ち離散して、夕は早やその生死さへ定かならぬ。

帝都人三百萬、或は死し或は傷つく、その辛ふじて身を免れもものも、忽ち飢渴はげしく迫り來つて

大正 12 11 3
内交

辛うじて生きる苦しみに苦しまなければならかつた。

新くて、おはれ肉親に分れ、家を焼かれ、財を失ひたる者のみ着のまゝの姿して、日毎、飢渇に苦しみながら、滅滅の苦痛を、無目的の彷徨に疲れてゆく多数の罹災市民！、誰かこれを悲惨と呼ばないものがあらう！

著者親くこの大災禍に逢ひ、その危険の域からのがれて九死に一生を得るのようこびを感得す、誠に、天佑であつた。

爾然引つゞいて、その破格な災害の實状に面接し、その酷苦、口云ふ所なく、筆記す能はざる底のものあるを見るや、痛憤断腸禁じ得ずして、遂刻ペンを執つて本稿を起したのであつた。その意は即ち此の惨状の眞相を天下の志士仁人に訴へ、一は以て、此等不幸なる多數の罹災民救恤の爲に奮起を乞ひ、他は以て、不幸災厄に罹れ、無惨にも突如として鬼籍に入りし幾十萬の英靈を弔慰せんとするに在りて存し、又敢て他意が無いのである。

新くて一意この目的貫徹の爲に立つた余は、厭危険の地域に出入し、群衆を馳駆して、幾多の冒険を重ねつゝ、此の稿をすゝめていつたのであつた。而も火難、震難を辛ふじて免れ得し身には、忽ち糧食難がヒシ〳〵とおほひかぶさつて來た。妻は目下身重でこの大災厄に遭ひ殆ど爲す所を知らぬ有様である。

病妻を勞はりつゝ、日毎十丁餘の坂下まで井戸水を汲むことより、辛ふじて得し玄米二升五合を搗き白搗いて白米とする手數まで、すべて悉く、聊れぬ我が手一つで仕おほしつゝ暇をぬすんでは本稿を草し或は妻をすかし慰かせては、街區に出でて之が探訪を試みるなど、可なり勞苦ははげしかつた。夜の如きは時間の不足より、一睡もとらぬ日が屢であつたのである。

殊に電車動かぬ災害後の市街は、ゆくもかへるも一々テクらねばならぬもどかしさ、加ふるに報道機関ほとんど絶えし地域に於ての本稿起草は、甚だしい勞苦を嘗めねばならなかつた譯である。夜は電氣なき室にて、暗い蠟燭の光をたよりに、しどろもどろの稿をつゞけゆくと云ふ始末、斯くて文字通りの不眠不休の一週間は續いていつた。

起稿四日、脱稿九日、一週間一息の筆になりし本書二百幾頁は斯くて余にとつて有難いものであらねばならなかつた。稿成るや余は直に後藤内務大臣の題字、序文を乞ふべく、且西下に關し特別の便宜を依頼すべく霞ケ關なる官舎へと赴いたのであつた。

然るに官邸前には、官公衙の自動車輻輳し、玄關先より入口正面の大廣間にかけては臨時震災救護事務局開催されあり、當局官吏係諸員無慮百名許り、それ〴〵急救の事務に忙殺され居り、如何にも物々しい

余は、一寸躊躇したが、この事又急に屬しどうしても内相の面謁を乞ふ必要あることとて、斷然室内に入り、刺を通じて、その意を陳じた所、内相は、いたく余の勞を謝され、一刻も早く關西に赴いて之が出版に着手し、一般國民に、今回の此の惨狀を知らしめる樣計らひ呉れるやうとの希望を述べられ、且つ「本業の事なれば、題字は素より、序文亦決して辭せぬ所であるのであるが、何分にも、事、帝都廢滅の急に際し、要務山積、皆悉く火急を要する事件のみである。加ふるに大震災當日より、右手强度の神經痛に惱み、今尚繃帶して、之を撫するに專らである今日、右手は何事にも用ひることが出來ぬ狀態である、乞ふ諒せられよ」

と、白く繃帶した右手を示されたのであつた。

余はその平民的にして、余の著述に對する好意を謝し、その理ある内相の說話を諾ひ、直に官邸を辭し、その足で永田町首相官邸に山本總理大臣、並に犬養遞信大臣を訪ひ、刺を通じて來意を告げた所、秘書官を以て、内相同樣「國家の急變に際し、とても悠々題字を揮毫する如き時を、出し得ぬ、殊に只今より緊急閣議が開かれるのであるから」との事であつた。

茲に於て、余は、事帝都廢滅の大變事に處り、内閣諸公悉く不眠不休之が對策に腐心されつゝあるの秋に際し、自らの小事を以て諸公の時を割きその勞力を費すの、却て憚りあるに想到し、小著に各大臣の序文題字を容れるの計畫を一擲して内相の指示の通り、之を一刻も早く出版するに決意し、茲に急遽西下の方策に移つたのであつた。

斯くて、本文「東京脫退記」に記す通り、命がけなる中央線突破を試み三日間を費し、辛うじて神戸に着するまで、その間の印銘は誠に一種特異のものがあつたのである。

神戸に着くや、直に神戸新聞社に編輯局長和田天華氏を訪ひ、余の意の在る所を披瀝した所、氏の豪放濶達にして任俠なる、直に余の熱望を容れられ、茲に小著は破格の敏速と異常の大仕掛を以て、余が當初希望せし以上の完全さに於て、普く世に頒たるゝの喜悅を見るに至つたのである。

茲に厚く神戸新聞社に謝すると同時に、余が震災に直面して、一貫不休の努力と熱誠とを傾倒したその仕事が茲に正しく報ひられたことを衷心より喜ぶものである。

大正十二年九月十二日

神戸新聞社に於て

旗山田淵巖識

大地は壞れたり

關東壞滅大震災實記目次

第一章　震前の帝都

第一節　政變來!! ……一

第二節　新風期來る(暑中休暇終る!) ……四

第三節　嗚乎!!大正十二年九月一日 ……七

第二章　大地震襲來!

第一節　大震動來る! ……九

第二節　その瞬間! ……十五

——刹那の生命——

第三節　火災四面より起る ……二三

第四節　震ふ地を踏み、火煙をくぐつて ……二七

目次

第三章　破滅の第一夜
第一節　恐怖の夜來る!! ……三五
第二節　生命の奮動(避難市民の渦卷!!) ……三六
第四章　災禍の第二日
第一節　不安の夜明く ……四〇
第二節　知りたき七箇のケ條!! ……四三
第三節　廢墟の空に飛行機一機! ……四五
第四節　飢に疲れるもの(災害第二日の罹難民!!) ……四八
第五章　戒嚴令布かる
第一節　第二夜の衝動!! ……五一
第二節　—市民自警團の奮闘! ……五五
第六章　報道機關の活動!(第三日の活氣!)
第一節　燒殘れる新聞の活動 ……五九
第七章　新内閣の成立

目次

第一節　禁廷の四阿に於ける御野立の親任式 ……六〇
第二節　新内閣の告諭並に聲明 ……六五
—大破壞修復の曙光見ゆ—
第八章　聖恩あまねし!
第一節　天皇皇后兩陛下御無事 ……六九
第二節　御賑恤一千萬圓御下賜 ……七〇
—附攝政宮の御沙汰書—
第三節　宮城の震害! ……七二
第四節　皇族方の御消息! ……七二
第九章　急救、修復への努力
第一節　糧食方策 ……七六
第二節　非常徵發令公布 ……九〇
—附　暴利取締令發布—
第三節　諸官廳、官衙、公署の活動! ……九四
—附　治安、警備、救護、自警各團體の活動—

第四節　陸海軍の活動！……九七
第五節　二重の勅令の公布……一〇一
——債務と流言浮説令——
第六節　通信、交通、機關の修復……一〇五

第十章　廢都探訪記

第一節　九段坂の上に立ちて……一一一
第二節　神田區……ニコライ堂の鐘いづこ……一一四
第三節　日本橋區デパートの王國、三越の殘骸……一一八
第四節　京橋區銀座に立ちての感懷……一二一
第五節　丸の内……ビルヂングの偉力……一二五
第六節　芝區……神威、佛德……一二七
第七節　本郷區……學府の荒廢……一二八
第八節　下谷區上……野公園の落日……一三〇
第九節　淺草區……念彼觀音力……一三一
第十節　本所區……被服廠跡の屍の山……一三五

第十一節　深川區……三面は火、海は激浪……一三七
第十二節　其他の五區……安全地帶……一三九

第十一章　帝都隣接地方の震災

第一節　横濱市の狀況……一四一
第二節　湘南の災害……一五三
第三節　潰滅死滅した箱根……一五六
第四節　凄慘たる駿相國境の慘害……一五九
第五節　富士山麓の慘害！……一六二
第六節　房總に於ける被害……一六四

第十二章　大地震研究

第一節　安政の場合と同じ……東大地震學研究室今村博士……一六六
第二節　地辷り地震……中央氣象臺長中村博士……一六九
第三節　京大二教授の發表……一七一
（その一）海底地震でない……京大志田博士……
（その二）原因は地辷り……京大田邊博士……

第十三章　悲話、惨話の數々

第一節　一家十一人を見殺しにした話 …… 一七五
第二節　陛下は一面の火、身は三階 …… 一七七
第三節　本所被服廠、死屍の中より讀び出して …… 一八一
第四節　愛は猛火よりも強く熱かつた …… 一八三
第五節　死市をめぐつて …… 一八六
第六節　入院患者を窓から …… 一九〇
第七節　船進まず、大川口の漂流屍體！ …… 一九三
第八節　後は火、前は水!! …… 一九六
第九節　吉原遊廓惨話 …… 一九九
第十節　進行中の列車跳ね飛ばさる …… 二〇〇

第十四章　東京脱退記
——命がけの中央線突破——

第十五章　優詔下る

第一節　帝都復興に關する詔勅 …… 二一二
第二節　總理大臣の告諭 …… 二一五
第三節　帝都復興審議會成る …… 二一八

第十六章　結語
附錄、諸調査、統計表 …… 二二三

大地は壊れたり

關東壞滅大震災實記

旗山田淵巖著

第一章　震前の帝都

第一節　政變來!!

故の内閣總理大臣男爵海軍大將加藤友三郎君、この炎暑の候、宿痾に病むこと數旬、多事なる内治外交の辛勞頓に加はりて復起つ能はず、遂に八月二十四日溘然として逝いた。

陛下の諸新聞紙は筆を揃へて首相の訃を傳へると共に、忽ち政變!!の聲は滿都を壓して、殘暑茲に一

期の暑熱を加へるの慨かあつた。

然るに純理よりする此際の内閣總辭職の措置を期待する以外、巷間しきりに說を爲すものあり、曰く延長内閣說、曰く首繼ぎ内閣說、曰く一部閣員交迭說、曰く何……と。都人士の興味と期待とは期せずして此の「政變」の問題に集中し、内閣に關する新說、奇論が新に報道せられる等に、人々の緊張は更に加はつていつた。例によつて元老、准元老と稱せられる人々の去來、言動は、朝野の耳目を惹き、此間を點綴する政黨者流、官僚係の人々の出所進退、赤紙面を賑はしていつた。

而も流說の多く、巷言の一切を超越して、所謂政變經過は順當に加藤故首相の訃後一週日を以て進捗し臨時首相の親任、内閣總辭職、元老への諮詢、朝野二大政黨の實言、諸新聞の論說……並に眞面目の態度と論調に移り、日本全國民の注意は、大命降下の何人なるや？の一點に集中し、元老の御下問奉答の如何は、萬衆期待の最たるものとなつた。

斯くて八月二十七日、伯爵海軍大將山本權兵衛君の大命拜受となり、政憲二大政黨を超越する内閣組織の事は切つて落された。政黨者流の悲憤浩嘆！民衆の歡迎！新紙の批判！再び滿都は靜然として、シーメンス事件の記憶は、人々の心に新に蘇つて來た。

而も政界に毀譽褒貶はつけものである、一切の世論、批判を一笑に附して、雷默新宰相は「乃公出でずんば」の意氣決心、ものすごく、水交社を本部として即刻、所謂内閣組造にと着手したのであつた。

八月二十八日、八月二十九日、早くも新閣辭令は、甲を大臣に乙を何にと都人士を喜ばする報道を齎し之を中心として口さがなき東人の噂は一段と高まつていつた、この間に處して、新聞記者の敏活なる活躍行動は、人の見る目も華々しく、何れもぬけがけの功名して、我社の名を天下に誇らんと血眼になつて東奔西走、疾驅する自動車にも、こゝ數日は生命あるを思はするほどである。

斯くて三十日に至り、新内閣の首班たる三四閣員の名、確實に傳へられ、爾餘の閣員亦今明日中に決定遲くとも九月一日には親任式擧行さるべしとの諸新聞紙の一致せる報道は、第一次の安定を人々に與え、並に人材内閣の標榜する新内閣に對する、新しき期待は、漠然として起り來つたのである。

三十一日この日夏の名殘の一日とてか、炎暑殊に甚だしく後三日に近づく二百十日の厄日も氣遣はるゝ蒸し方であつた。

而も逝く夏と共に辭せし加藤前内閣に代つて、初秋の第一日を以て山本新内閣の出現を見んとする。一種の暗示を受けとらざるを得ぬのであつた。而もその公式の成立を豫想さるゝ一日二日が二百十日の大厄日に相當せるに於てをや。

――大命山本伯に降下すと聞くや、自失沈乎、蒼白の緊張瘋顛に何れも云ふの辭なき態容に於て、氣味

悪き沈默にかへたる各政黨者流の心事、まことに察すべきである。」

第二節　新學期來る（暑中休暇終る！）

帝都は東洋文化淵藪の地。

學ぶによく、業を樹てるによく、人を磨くによろし。

宜なり笈を負ふて、この學都に遊ぶ青年男女の數　巨多に亘ること。

而も一面帝都は所謂紅塵萬丈の地、加ふるに冬寒く夏暑く、學に專らなる青年男女の保健必ずしも保證せられず、況んや現在の學校經營策、その大綱に誤り、青年子女徒らに競爭試驗に苦しみ、過度の腦力精力の消耗を餘儀なくせらるゝの現況に於て、帝都の勉學は實に痛苦そのものなることを敢て言ふに憚らないのである。

その純なる志操、確たる目的の爲に或は挫折、不貫徹に終ること、必らずしも、これら男女學生の怠慢不勤にのみ歸せしめることは出來ぬ、春爛漫の四月より、梅雨の三旬を越えて、炎暑の七月に至る第一學期は、學生にとつてことに苦痛の連續の四ケ月であらねばならなかつた。斯くて、その四ケ月の痛苦に耐え得て、日頃の勉勵の効果たる學業成績の高點を得たる青年男女學生が、鐵車長驅、各がしし、その母郷郷關に歸り得る夏休みなるものは、實に東都遊學の學生にとつて、唯一無上の悅楽であるのである。

その山青く水清く、緑邊の納涼、氷の如き家郷にあつて、過去四ケ月の勞苦、勉勵の疲れを癒し、舊友知己と語つて過去をなつかしみ、父母同胞と伍してその肉親の親愛に包まれて、心を活かす。まことに帝都遊學の學生にとつての暑中休暇は、他に比すべきもなき意義を特有することを痛感せざるを得ない。」

おゝ人生の至楽！その暑中休暇の四十日よ！

而して楽しき時の經過は、その人達にとつて短かつた。

彼等は慌しき休暇四十日の推移をふり返りなつかしむ間もなく、今日は早や、その行李を裝ひ、かびたる靴を磨かざるを得なかつたのである。

暑中休暇終る！

初秋の風、校庭の白楊を吹いて、帝都は、若き人々の歸來を待つてゐる。」

「いざさらば！我がなつかしの故郷よ、次は雪降る多の休み迄！」

斯て遊學の兒等は、新しき活力に蘇りつつ、帝都へ帝都へと歸つて來た。南は臺灣九州より、北は北海道、千島まで、近畿、中國、奥羽のすみ〻まで、恐らく朝鮮南滿の西の果までも、はた樺太の一角ま

で、あますなく殘り無き全範圍に亘りての歸來學生！

一列車等に、東京驛のシンメトリックな大建物が吸ひ込みては吐き出す行李背負つた若き男女の數々！

おゝ、その血色紅なる顏、見よ！その希望に輝ける眼を！

今や彼等には疲勞がない、彼等には怠慢がない。彼等のはりきれる如き體軀に包まれる所のものは、すべてこれ活力である、新鮮なる氣分である。

「殘暑何ぞ！我か一蹴に値せぬ、勉學への順應の痛苦我に於て何かあらん！」意氣昂然として肩に風を切りつつ、久振りの電車に身を橫たへた時、彼等の顏色――その赤銅色に光るかんばせは、歡喜と光明そのものであつた。

八月三十日より三十一日へ！

帝都は政變と新内閣の噂にすべてを忘れるが如き熱度に於てある時、

「腐つたる政治何するものぞ、我は天下の學生也、專心學を修めてその大目的の貫徹につくすのみ！」

と、雄々しくも亦しほらしく、各がしし棲みなれし下宿へと、その南京蟲襲來の苦痛も忘れた顏に飛び去りゆく……。

斯くて覺らく若き人々その影を見せざりし帝都の各町各街區には、急に活氣橫溢の若き男女の濶步を見るに至り、何れもその新學期來る！を意識させるに十分であつた。

おゝ新學期來る！新學期來る！それは都下二十萬の學童に於ても齊しく叫ばるる稱呼であつた。

「明日！その九月一日よ、夙く來れ、我等の上に……」

心からよぶその「希望の明日」よ！

第三節

嗚呼!!大正十二年九月一日！

「運命」の前には「無知」であり「無力」な關八州のすべての人々の上に九月一日は來た。

おゝその九月一日！恐らくすべての人々は喜悅してそのあしたを迎へ、燦々たる旭光を禮拜したとでゐつたらう！而して恰も昨日せし如く今日も亦

「今日一日の安穩と幸福」

を天地に祈つたに違ひなかつた。

併し！旭光に對して拍手するこの人々――おゝ善良なるその人々よ――の祈願や今朝の神々は快く默

受されたのであつたらうか？

警音以外の警を聞き得ず、見るもの〻外に見得ざる地表の人間に――少くともこの九月一日の日本人の上に――天地の主宰者、神、佛の聞えざる豫告、言はざる教示が如何に強く普きものであつたかを……けれども一切の人々は誰一人としてその豫告と教示に感應し、語るものとてなかつた。

時は人を待たず、刻々に秒を刻んで進み、大帝都の午前八時は偏頗なく八百八街に訪れた。

活氣ふる〻都下各學校々庭のフレッシュな印象――

それは午前八時を告げる正しき活きた時計であらねばならなかつた。

兵營よりする劉喨たる喇叭の音、進轉する電車、自動車、往來する人々、すべての者の上に、その朝は幸福を齎す樣であつた。

午前九時。十時。

それは、萬人勞働のタイムとして、一瞬の如くに過ぎ去つた。

午前十一時！各官社の鳴らす汽笛は、その勤務者へ晝食時の近づき來つたことを告げる「今一力」の齎動の號音であつた。

斯くて帝都には昨日と同じく平和な正午が近づいて來るのであつた――。

第二章　大地震襲來!!

第一節　大震動來る！

大正十二年九月一日午前十一時五十分頃！

誰人の上にも何等の豫兆を示さず、何等の兆候をも齎らさずして、その三百年傳統の文化を誇るかの如く平穏和樂の外貌を、利根の洲原、關東平野の一角に横へてゐる帝都大東京へ、破格未曾有の大強震が襲ふた。

眞に突如としてであつた。

「地震！」

と云ふ間もなかつた。

「アツ！」

と驚愕の一聲を洩らす餘裕をも見出し得ぬほど突發的であつた。と、

大地は壞れたり

大地震襲來

建物と云ふ建物――日頃はその宏壯を誇り、輪奐の美を競ふてゐた、和、洋、凡ゆる近代的建築物一切――否地表に物的存在を有するものゝ程はすべて、大濤に搖らるゝ葉舟のそれの如く、ユラ〳〵と前後左右に不規則に動搖せられ、瞬時にして、その寸前の姿を破却しつくされ、大半は倒れ、殘りのものは傾き、又は半壞し、瓦礫崩壞！誠に無雜作なものであつた。

これ丈け、これ以上書くの技巧と、云ふの修辭とを持たぬ。」

時間にしてほんの五分間程――長くて十分間の間であつた。」

間髪を容れぬ微妙なその時！

而も帝都の物象は、既に最早や永久に舊の雄大、壯麗、非然、繁華、殷盛きの形容詞を以て稱さるべき、何物も、然りほんの何物も存し殘すものとては無かつた。」

全滅、潰滅！

その一語、その一言につきる。」

而も强震は引つゞいて襲來し、辛ふじて身を以て戸外に逃れ得た者は、その唯一のより所たる地面そのものが大波のうねりの如く、高低左右に搖り動かされるにそ、今はもう地上に頼る何ものとてなく、眞に

「此の世の破滅！」

も斯くやと思はせる詭りであつた。

土壇崩瓦のすさまじき音！

四方より起る「命かぎり」なる悲鳴、叫喚、鳴咽、號泣の複合音の物すごさ！

不規則になる喇叭にも斷末魔の苦しみの調か、マザ〳〵とうけとれて、一きは凄愴の情を誘ふのであつた。

地震、頻々として地動波の如く、辛ふじて今迄その崩壞を免れたる殘存傾斜の家屋建築物は眞に浮木の大波に搖り弄ばれる如くユラ〳〵〳〵と搖り動く。

人々はといれば、蒼白！然り文字そのまゝの蒼白の顏色に吐く息もけはしく、只「我尙生けり」の象徴としての眼のみ異樣に輝かして、どうともすること適はぬ現在を各がしし、大木の下にしつかと抱きつき廢墟に座し、或は頭を抱へて立ち、或は天を凝視して動かず。

只ワナ〳〵と、打ち震へつゝ、爲る樣にしかならぬ、そのなりゆきにすべてを委す外なきあきらめにじつと地搖れにもまれる外なかつたのである。

地震は又しても襲ひ來り、又して來り、何時、如何にして果つべきか、ほとんど果しがつかぬ、その間にあつて只死を待つ外なき殘存市民の「不安」は恐らく「死」そのものよりも痛苦であつたらう……。」

大地は裂れたり

大地震襲來

阿鼻叫喚は次第に增し、倒壞家屋其他の建築物の小隙、又は下水とぶの溝口よりは、傷つき傷みたる男女、化物の形相もすごく血みどろとなりて、默々として這ひ出して來る、おゝそのだんまりし！泣けぬ。

然り、此際は泣き得ぬのであつた。泣くとより先づ生きねばならなかつた。

生の執着！

その執着の强さは、血みどろに傷つき、塵埃の所髮を土埃に委せつつ、どぶの中より、その身そのまゝ大波にゆれる如き地搖ぎに屈せずして、あえぎあえぎ這ひ出し來るのである。

又しても地震！

折柄濛々と四邊より黑煙立ち昇りはじめたるは、これぞ倒壞家屋か火に冒されて火災を起した所である。

「スハ火事ッ！」

今の今までは、只一途に恐ろしきその地震にのみ心をとられ、波上の筏にある如き身を、如何にして安全に逃れんかとにのみ、心をくだきたる人々は、其れ以外の刺戟に一向氣が注かなかつたのであつた。

「火事だッ、火事だッ！」

と大聲に呼びまはる聲に又しても愕然とした。

「エッ！何處に？何處！」

恐怖そのものの如き眼を四方にやれば、こはそも如何に？

何時の間に起り、何時の間に擴がりしか、四方は早黑煙に包まれて物の燒ける音、その臭ひ、叫びかふ人聲、一種云ひ知れぬ雜音！早くも火は己が身を包まんとするでは無いか？

「コハ大變！」

人々はもう、じつと一處に止つては居られなかつた。

危き命を辛ふじて地震にとりとめたる人々は、茲に又新しき火災より逃れてゆかねばならなかつた。

「逃げねばならぬ。」

その聲か、漸くにして我と我がうちに崩した時、今まで死せるが如く、發狂せるが如く一處に立ちつくしてゐた人々は、猛然として動き出した。

然り猛然として。

それは實に又すざましくも生命かけなる動き方であつた。

「逃げねばならぬ。」

大地は壞れたり

再び人々は叫んだ。

「而して安全に……」

けれども、その安全の方向か、那邊にあるかは誰人にも分らなかつた。

「我が家の附近！」

それが必ずしも安全とは云へなかつた。

この時初めて、勤務先の人々――恐らくその多くはそれであつた。――は、「我が家」を想ひ出した、今までは、只、我身の事のみにしか、心が作用かなかつた。

「逃げねばならぬ。」

との意慾に、新しく火事を恐れ出した時、急に、はげしく、狂ほしき許りの強さを以て、

「我が妻子！」

の身の上を思ひ出した。そして一刻も早く「我が家へ、我が家へ！」

と狂氣のやうになつて駆け出したのであつた。此時はもう、人々には「安全」よりも、「我が父母、妻子へ」の方が所切であつた。

人々は蒼白な顔をして、忽ちにして廢墟となりたる舊の大東京の街區を、言をも云はずに駆け出した。

第二節　その瞬間！――刹那の生命！――

その時、余（著者）は神田一橋なる帝國教育會の、階下最奥の倶樂部室にあつた。

休暇明けの第一日とて、皆々打集ひ、茶などをすゝり乍ら、久濶を謝し、或は當面の政局につき雜談し別して、新内閣の文相たる新聞辭令を、屢受けた我が帝國教育會長文學博士澤柳政太郎先生の起否、出所進退については、可なりつき込んだ所まで意見の交換をした事であつた。

余は、

「此の際、是非共會長閣下の入閣を乞ひ、義務教育の年限延長問題、師範教育改造問題、女子教育振興問題等當面の問題は固より、進んで根本的文政、刷新改善を斷行し大正の文化史を飾る名文相たるの名と實とを併せ享けらるゝことを切望して已まぬ。而して會長閣下にして斷乎一度立たれんか、如上の事柄の實現、易々たるものあるを信じて疑はぬ所である。

此の際は政派黨派上の分野乃至師屬關係、官僚、閥等の關係、一切を超越し、日本文政の爲の文相として」

て、過去一切の情實係累を絶ち、眞の意味の愛國憂民の立脚地より、乃至教育立國の根本見地より、忌非とも立たれんことを希ひて已まぬ云々」

と、例の一時的逆上と思はれるまでに熱しつゝ論じゆけば、集ふ甲乙、何れも全然賛同、滿場異議なしで忽ち小論採決、倶樂部内では、もう澤柳文部大臣閣下が出來上つてしまつた事であつた。

やがて雜談終り時局談もつき、各自それぞれの仕事にとかゝつた。

余は小著「教育者の手談 噫！殉職の十訓導！」に引つゞいて刊行の豫定である「噫！殉職の教育者」を初め、教育関係書全部五卷の原稿整理及び材料蒐集の件につき、急遽印刷物を物して、之を全國各府縣郡市視學諸君社會教育主事各位に配付方書肆と約束して來た事とて、これが、文案の起草にとりかゝつたのであつた。

（一日午後一時には出版元より責任者がその原稿をとりに來る約束であつたのである。）

ト、その時、―それは眞に偶然な思ひつきであつた。余は余の定廬が沈澱の爲めカーテン取外しの事とて、日光が直射してペンを走らするのに都合が悪いので、いつも無い事乍ら、ツト立つて倶樂部室中央の方卓の所へ席を移し、そこで熱心に起稿にかゝつたのであつた。

（余の固定廬は、その倶樂部室中最奥の際て、その廬からは二つの出口へ、共に一ばん遠いのである。）

扨てそれから五分間も經つた時であつたらうか？、同室の人々も餘念なく夫々、受持の仕事に專心してゐた事とて、大きな室内はシーンとして、余のペンの音がサラ〳〵ときこえる位の閑靜を見せてゐた。

ト、其時。

その極靜な平和を破つて、突如ザーツと云ふ得體の知れぬ雜音がしたかと思ふ間もなく、室の床を二尺許りも持ち上げる樣な大地震がドツと襲ふて來た。

「アツ！」

と叫んだ余は、本能的に裏のバルコニー側の出口へと逃げ出さうとしたが、今までペンを走らせてゐた中央の方卓、そこに列んでゐた椅子が、床そのものと共に、まるで大波に搖られる端舟のそれの樣に搖れるので、一歩も歩かれぬ。硝子のガタ〳〵と鳴り、パラ〳〵と破れて落ち碎ける音、書棚の書物の四離滅裂に落下する音、フト見れば室そのものが四十五度近くに傾く程度にゆれてゐる、此時、隣の圖書館の方から

「ウハーツ！」

と云ふ、何とも云へぬ悲痛な、しんに魂をしぼられる樣なうめきが聞えた樣に感じたが、そう感じた時と、余が波の樣な床を、どう、どんなに二間ほど歩いて來たか知らぬが裏側のバルコニーに面した出口のドアーの引手に手をかけた時と一緒であつた。勿論その時、同室の人々の事を顧みる餘裕とて無かつた

が、最初余が「アッ」と叫んだ時、室の一人か（誰か知らなかつた。）恐ろしい勢ひで一目散に図書館の方へ遁ずる廊下の方へ飛び込んだ事をうす〳〵覚えてゐる許りである。

力まかせにドーアを開けやうとしたが、どうしても開かぬ。地震は猛烈に揺つてゐること前と違らぬ。」否益々はげしくなり勝ち許りであつた。

悪闘々々してゐては命が無い。

「エイッ」

と、余は力まかせに硝子戸を白皮靴の足で蹴つた。と、バラ〳〵〳〵と硝子は微塵に砕け下方の板はバラ〳〵にこはれた。力まかせにドーアを押すと今度は辛くも開いた。

やれ嬉しやと、アッとバルコニーへ飛び出した余は、夢中で裏門側の黒板塀際へ走りよつた、その間三秒許り、その間に二度ほど倒れやうとした――土地そのものが波の様に揺れ動くので足のバランスがとれぬのである。――が辛ふして倒れることを免れた。これ実に天佑であつた。そこで倒れたらもう最後であつた。何となれば、やつとその黒板塀を押し破つて外に出た余が這ふ様にして、繃帯の一機高等小学校と音楽学校分教場との間の狭り木立の所までたどり着いた時、

ペラ〳〵〳〵と瓦と云ふ瓦のすべてが、今さつき倒れようとした所へ集中して落下し忽ち山積の有様となつたのを認めたから――。

扨て、余が、あの頑丈な黒板塀――生ならとても押し破れるものでない――を、どうして破つて出たか、又押したのか今に分らぬが、兎に角、黒板塀と余の身體とがはらい勢ひで盛と外の路へ倒れた時、やつと「外へ出られた。」と云ふ誠か感ぜられた。併し未だ〳〵である。

「何論かよい避難所が？」

息をもつがぬ敏速さで四邊を一廻すと、音楽学校分教場前の廣場に、何の木か知らぬが二抱もある大木が見つかつた。

「これだッ！」

矢庭に決心した余は、又しても這ふ様にして、波の様に揺れるその道を五七間、その方へと逃れゆき、一「命の親よ」と許り、しつかとその大木に抱きついた時、はじめて

ホッ――。

と太息をついた。これまで――倶楽部ペンを走らせてゐた時からこゝまで――真に一息であつた。おゝその張りつめた一息――

ホッと一息ついた余が、我が帝国教育如何にと仰ぎ上くればあはれピサの斜塔の様に傾いて、もう中流

れどころか。パラ〳〵と瓦の落ちる音が、どこからとなく聞えて来たと思ふ間もなく、ガラ〳〵だと泣くに泣かれず、思念して扱てフト眺なる女子職業學校の岩大な木造四階建の大建築物は如何にと見上げ、上へ行けば、これは又恐らしや、高らさ丈にその揺れ方のはげしさ見る目も恐ろしき程度也、これにて眩れぬとは不思議也と思ふ間もなく、第二の洋館物凄く震ひ来つて、余の抱きつきし二抱餘の大木も、前後左右にゆら〳〵と氣味惡きまでにゆれるにそ」

「死もば、この大木とも……。」

とうるさらめつて、鳥を殺して、女子職業の建物を見上げれば、

メリメリメリ……と天地を震動する破壊の音したかと思へば、あの輪奥の道を誇し大建築物の大屋根が、まるで紙を風に舞はする如く風と空中に浮はせたかと思ふと、瞬こ一度に落下して、」

メリ〳〵、ガラ〳〵、ズシーン

と一たまりもなく倒壊し終つた。

「アン〳〵」

と叫ぶ間もなく教育者の西側なる一樓風書館も亦、大音響を發して、宛然蛙を壓しつぶした様に壓つぶされてしまつた。と館内に藏書研究に熱念なかつた職業子爵の叫聲と覺しく「タヘーッタ」と云ふ壓しつけられた様なうめきが、物すごく響いて来た。」

中に挟まり、我が帝國教育者は何にと見れば、これで倒れぬは寧ろ不思議と思はれる程、陸に傾ぶく、その根には既に一枚の瓦もなく、壁はいつの間にか悉く倒れてバルコニー側の我が倶樂部室はもう滅茶〳〵に崩れ終つたさが手ぶして見られる。

「オー、我が帝國教育者の皆さまも未路よー」

初めて余の眼に熱い涙があつた。

ト、急に思ひ出されたのは、昨年三月の御沙汰書の事であつた。」

それは、今春より我が帝國教育者が、學制頒布五十年記念事業として、全國二十萬の教育者の力に依り、建設の事に決りして、若々之が實現に努力しつゝある所の「教育者會館」建設の事、畏くも天聽に達し、思召を以て、之が建設費として、金五萬圓也下賜の恩命に浴した、その優渥なる御沙汰書であつた。

その御沙汰書は現在、入念に表具された金無地張の屏風として、倶樂部室の正面に掛けられてゐるのである。

「オ、何にを指してゐるかの屏風丈だけとしても出なくては……。」

思ふと、もう矢も楯もたまらなくなつて来た。」

「突入！そうだ、這入らう！何アーに、這入るに這入られぬ事があらうかッ！」

決心の眦を定めて、屹乎と、半崩壊の帝國教育を見やれば、折折、又しても襲ひ來る餘震ドウドウと、半崩壊は忽ち六分、又、分……今はもう、如何に勇を揮ふとも、男一匹這入りこむべき餘地とてない況んや折折震頻々として危險名狀すべからざるものがあるに於てをや……。

余は大木に倚つたまゝ、然として泣いた。

「すべて已む矣！萬事は休した。もう早や何をか云はんやだ。」

余は沈痛なる獨白を殘して、尚も縋れに縋れ、震ひに震ふ地を危く、はら這ひつゝ、焼けし一橋高等小學校の校庭を通りの方へとあえぎ〳〵出ていつた。

その時は、もう四邊の目ぼしき建物にして、原形を殘し止めてゐるものとては殆と無かつた。その間眞に十分間足ずの間であつた。

第三節　火災四面より起る

同勤の人々の身の上や如何にと、正門側へ倒潰の女子職業の殘骸を辿つて行かんとすれば、こは又大

變！血相かへし避難の人々、泣き叫びつゝ、或は力限りに父母の名をよぶ子供達、子を探し求める頭髮くしどろの若き母親、或は片手を壓し切られ或ものは足を壓しつぶされ、鮮血淋漓、見る目も慘たる姿に、何れも、潰滅の街區を一橋際への僅　空地へ〳〵と逃げ集まるのであつた。而も何事ぞ、その唯一の逃げ場たる堀際の廣場もよく〳〵見れば、大きな地割を生じて歩くに危險な有樣である。

折から誰かゞ

「火事よ、火事よ」

と叫び乍ら群集の中へ飛ぶが如くに逃げ來るを見た。と

「狂ふたかッ」

と罵倒する壯年の男がある、狂ふたかと詈られた男は、もう言をも云はず、その火事とする方向を指し示してブル〳〵震へてゐる。

「何處？どこだ〳〵。」

今までは只地震〳〵とそれのみに心奪はれて、他の何物をも顧みる餘地とてなかつた、斯く叫ばれて。」

聞くその方向を見れば、こは抑も如何にすぐ間近なる堀ばたの女子職業の寄宿舍の壓しつぶされし感覺所より濛々たる黑煙が立ち昇つて居る。

大地は壞れたり

「オ、、火事、火事ッ、職業の寄宿舎だッ！。」

この聲に、今の今まで打ちつどひ乍ら只々死せるが如く おの〳〵き震ふばかりであつた女子職業寄宿舎生の生存者は、狂氣の如く立ち上つたかと思ふと何れも金切り聲をしぼつて、

「アレ〳〵〳〵」

「早く蒸氣ポンプを、早く早く……」

「ア、ア、ア、燒ける燒ける、妾の寄宿舎が……。」

と、四邊憚らず、よゝと抱き合ふて泣きくづるれば、四邊の人々も暗然として涙に曇る眼をその燒け跡へと注ぐ。

けれども、その時はどうする事も出來なかつた。給震々として只走るさへ危險である、殘餘の家屋は何時我が頭上へ倒れ來るか知れぬ、我身一人が保ち兼ねる有樣である。

どうして人の事など肝つて居る餘裕があらうか、それは決して自己主義からと云ふ樣な、考へたものでは決してなかつた。理智以上、道義以前の盲目な本能であつた。自己保存の本能とは正に之だ。

連日の炎暑に、家屋は思ふ存分乾燥してゐる。而も微塵に崩れて折り重なつてゐる。水道絶滅して一滴の水さへ出ぬ。消防隊は消火に來る所の騒ぎでない——恐らく彼等も、その本部に於て、そのポンプ諸共

同じ運命に陷つて居る事であらう！火勢は斯くして思ふまゝにその勢ひを加へ、瞬くうちに四隣へ〳〵と延燒してゆく、物の燒きはぢける音、そもそはれぬ臭氣！黑煙は天に冲して、天日爲にくらき有樣となつてゆく……。

「オ、、あちらも、こちらも火事だ、火事だッ」

誰かゞ又しても新しき發見をした如く斯く叫ぶと、人々は、又しても新しく恐ろしき刺戟に對して、そのいら〳〵した眼を作用かせなくてはならなかつた。

「オ、、ほんとだ〳〵、四方皆火事だ、こりやたまらぬ。」

人々の心は、再び動搖し初めた。

只見る、日本橋、丸の内方面、萬世橋、和泉橋方面——遙かに本所深川方面、

さては下谷淺草方面、及び本郷の各方面、眼をかへせば、芝、品川の方面からも、云ひ合せた如く、黑煙濛々勢ひして立ち昇るを見る。

「あゝ、未曾有の震災につゞくこの大火災！、神も佛も無いものか、愈大東京も絶滅だ、もう世は終焉に近づいた。でも、この貴き生命！力の限り、こん眼り逃れる丈け逃れ！見よう!!。」

余は斯く決心して、猛然として立つた。

「本部勤務の者等は？。」

と思ふとせめての最後に只一度顏を合せて置き度い、疾風の如く正門を潛れば、此門内の廣庭に、棒の如く立ちつくして居る事務員の者數名の姿を　出した。

「オ、諸君ッ、大丈夫だつたか？。」

余は斯く叫びざま、ッと寄つて、その人々の手を堅く握つた。

火勢は漸次擴大して、今は早や餘炎の爲に顏が熱さを感ずる程度である、黑煙は地上を這ふて、人々の心を暗くし。火の子は飛散して危險云ふべくも無い。

「諸君ッ、もう最後だ、殘念だが、もう我が敎育會を見捨てるより外はない――だが、重要書類はどうした？エ？何、大丈夫、それはよかつた。では、一先づ引き上げよう、俺は御沙汰書を取り出す事が出來なかつた、許して呉れッ！」

數人は互に手に手をとつて、男泣きに泣く……。

この時、又しても餘震が襲ふて來て、帝國敎育會の傾いた建物はユラ〳〵と浮き木の樣に搖く、「ウヘ！」ッ」と云ふ人々のどよめき！

「火事だ！危ない!!」

誰かゞ叫ぶに、皆の者は漸く我にかへつた如く、名殘の正門を飛び出した。

この時一橋際なる堀ばたの廣場は、避難の人で身動きもならぬ有樣であつた。

余は「文部省へ、文部省へ！」と心の中に叫んで一目散に駈け出した。

第四節　震ふ地を踏み火煙をくゞつて

一橋を渡つた余は左文部省、右九段の丁字路に立つて、またしても後の帝國敎育會をふり返り、ついで文部省を――おゝ、その文部省、そこには幣原圖書局長、塚原督學官を初め我が廣島高師時代の恩師が、多く在すのである。我が敬慕する清水先輩を初め同窓の者が多く勤めて居るのでは無いか、「氣遣はしい文部省よ」と、その高き建物を眺めやつた。とあはれ悲しや、一國文政の中樞として、今の今まで、その雄大の姿は四邊に聳えて居たそれも、無殘や瓦落ち壁崩れて、瓦礫さへはげしく傾いて居る、嘗て我が帝國敎育會と同じ運命を辿るものか。

ト見れば、その廣い圍ひ内のどこからか、唯ならぬ煙がユラ〳〵と立ち昇るでないか、「我文部省も亦火を發したのか、さりとは情なや……。」

師も此の際は、いつまでも此處に悪闘〳〵して居るところでなかつた。」

斯く文部省の最後を見屆けた上からは、今は「我家、我が妻」と、掌歌天の如く九段坂下の方向口へ」

て走り出した。

「オヽ、我家、そして我が妻……。」

それは此時、眞にはじめて突發的に湧き出た心であつた。」

併し、それは急に強く、はげしく且猛烈に、どうするとも出來ぬ焦心であり、衝動であつた。」

「早く〳〵、どうして、今までこんな所に止つて悪闘ついてゐたのだらう、家では、家諸共、最愛の妻が」

惡しつぶされて無慘の最後を遂げてゐるかも知れないのだ、氣にかゝる、ほんとうに氣がかりな、アア

アア、――」

思ふともう氣も狂はん許りである、頭は錯して來る、思ひは亂れてくる、手足ははげしく打ち慄へ、眼

は血走る。

「エヽ、退いた、退いた、邪魔するな〳〵、」

余はもうすべてを打忘れて、只一途に、家へ〜愛妻へ!!と走つていつた。」

此時、同じ默ひと、行動に動く人々で此通りは一ぱいになつてゐた、ゆく者かへるもの、狂ひてどこと

もわかぜに走るもの、自動車の疾驅、自轉車のベル、人力車、オートバイ、凶變に手綱切つた奔馬のはげ

しい蹄の音ー土塀と云ふ土塀は悉く崩れてゐる、屋根瓦の落下して紛微塵となつたもの道に散亂して危

險云ふべかくもない、而も人々は默々として、只そのけはしき眼の色に、現在の一切を雄辯に語りつゝ、」

歩きに歩き、走りに走つた……。

漸くにして九段下の電車停留所まで來ると、停電の爲に動かずなつた電車の數々が間の抜けた立往生然

と到る所に横たへてゐる。十字路の事とて、人々の右往左往、往復錯綜して戰場それ以上の混亂である。

此の時は、もう神田は一帶の火に包まれて、火焔濛々として、物すごき有樣を呈してゐた。フッ見ると

余が逃ゆかんとする飯田橋電停への電車通路の彼方も、眞黑い煙がうづを卷いて立ち昇つてゐる。

「コハ大變、悪闘〳〵してゐては、火焔に包まれてしまふー」

どうしようかと考へた、歩いてかへれば小石川上富坂の二十三は、こゝから遥かの距離にある、とても

少時間で歸りつくべくもない。」

この混雜ー

この人ごみー

この亂火ー

この地震！

而して、突然として、心にかゝる子と妻の身の上！

余は突嗟の裡に考へついた。

「そうだ、こんな非常な場合の事だ、すべてが許されなくてはならぬ、好しッ矣！」

と叫び、余はこの十字路の傍、安全にのこつた郵便ポストの側に立つて、飯田橋方向へと向ふ、自動車を物色した。

ト、聞こそよけれ、忽ちブーブーと警音ならしてこちらへ來る小型の自動車があつた、そのつやの美しさ、手入の入念から推して、それが由緒ある家の自家用のものであるとか窺はれた、見れば運轉手只一人なのである。

「オイッ、待てッ、乘せてくれッ」

矢庭に飛びだして、人ごみ故に、除行に移つたその自動車へ一も二もなく飛び乘つた。

それはほんの瞬間であつた。

「君ッ、どうも相すまん、傳通院――小石川の方へ逃るんだ、この火事ではとても歩いては逃られそうもないんだ、頼むよ。」

中へ這入りざまかう怒鳴るやうに頼んでも、運轉手は何とも返事しない、變はと見ると蒼白である。

「怒つてゐるのか？」そうでない。

彼は今尚、大震動よりの恐怖がのかぬのであつた。加ふるにこの人ごみである、平生さへ容易ならぬ東京街區の自動車運轉であるのに、まして今は、正に命がけの事である。

警笛を引つきりなしに鳴らし乍ら、蒼白な顏はブル〳〵慄へ乍ら、たゞ行手を見つめてゐる。人の一四位が飛び込んでも知れたものでない。それは餘りに輕い此際の刺戟であつたのだ。

「さらば好しッ矣」

と、どつかと身體を自動車内に横へた余は、窓より四邊の物凄い景況を見やりつゝ、人ごみの中、立往生の電車を避けては進み、進んでは止まりしつゝ、飯田橋へ、飯田橋へと進んでいつた。

ト、忽ち左手に當つて、ぺり〳〵と一切のものが燒け上る樣な響がした。

「家破ッ！」

と左窓から首さしのべて、火事や何處？と眺めやれば、驚くべし、電車通りのすぐ裏側は一面の火である。道理でこの邊は急に人通りが減つたと思つた。

「火事の眞只中にあるんだ、危險！冒險！！」

大地は裂れたり

運轉手は急にヘビーをかけた。自動車は疾風の如く走り出した。

火煙の巷、震動の地域を一目散に、飯田橋電停へ電停へ!!と。ふり返る神田區一帶はもう煙に卷かれ、妖火に包まれて、その壯觀の姿さへ見せぬ。

眞に一瞬の生命であつた。

自動車は、忽ちガード搖く省線の下をくぐつて目さす飯田町電停まで來た。フト行手を見ると、堀を隔てた、飯田町市公設市場の向ふ、諏訪町、新諏訪町は一面の火である。折から南方の烈風にあふられて、恐ろしい火の海は、刻一刻に北方の高燥方面へと擴がつてゆく……。

堀端の避難民の狼狽!搶ぎ出した荷物の山積!!怪我人をいたはるどつかの醫院の看護婦の甲斐甲斐しさ

混亂!滅茶苦茶!!

愚圖〳〵してゐると火は我が上富坂に移る氣配さへ見えるこの火勢と風向!自動車は此時、ピタと立止まつてしまつた。

余は叱る樣に呼んだ、もう自分が無料で乘せて貰つてゐる等の考へは疾つくに失せてしまつてゐるのだつた。

「オイ君ツ、傳通院だ!傳通院だ。上富坂だ、上富坂ツ」

「そう云つて三度を叱咤する將軍の樣に、ぐつと車内から身體を乘り出し乘り出し、その方向を指した。」

無言の運轉手は此時やつと口を開いた。

「私、早稻田へゆくのです。」

「そうか、それぢや大曲まで賴む」

「……。」

警笛をはげしく鳴らしつゝ、自動車は狂へる獅子の如く大曲さして疾驅しはじめた。

烈風いよ〳〵加はつて、諏訪町一帶の火事は、小石川區役所、砲兵工廠を一呑に呑まんとするもの丶如くである。

急に空腹を感じ出した。

考へて見ると「今朝らくで蜜食」と云ふ時からの大饗宴であつた。

今朝も遙まぬまゝに小食に止めた身である。今はもう午後二時ごろであらう!!思ふと腹は急に減つてゆくやうだ。

「あゝ腹が減つた、腹が……。」

自動車の中で、余は氣狂の樣に叫びごちた。

大は腹はれたり

物を買ふにも金がない、金を入れた上衣は、あの潰滅、帝國教育會の倶樂部に置いて來た、帽子も、ステッキも……。

腹は益々へつてくる。

大曲へ來た。

運轉手に自動車を止めた。余に急いで飛び出した。

「君、有難う、お蔭で命拾ひした、お禮をしたいが金が無い、許して呉れ給へ！」

運轉手君はうなづいた。

「……」

「では君も氣をつけてゆき給へ、有難う！」

若い運轉手は、はじめてニッコリとして、勢ひよくハンドルを廻した。自動車はブーブーと喇叭を鳴らし乍ら江戸川端を早稲田へ〳〵と、潰滅の道を急ぐ人の流れの中へと消えていつた。

余は橋上に立つて、じつと我が「命の自動車」を見送つた。

第三章　破滅の第一夜

第一節　恐怖の夜來る!!!

潰滅、破壞の大東京に恐怖の第一夜は來た。

電氣なし、瓦斯なし、水道なし、電車なし、電話なし、電信なし、商品もなく、家もなく、財もなし。

唯一つ、生き逃れ來しこの身には、過勞痛心の傷みが、空腹と共にヒシ〳〵と襲ふて來る。

それをどうするとも出來ぬ避難民は、辛ふじて見出し得た避難所なる山の手の一角、僅に身を容るゝ木の下、叢の中、石の上、野原等にどつと許りに身を投げ出して、只じつと眼をつぶる許りであつた。

暗黑の夜、絶叫の夜、恐怖の夜、

おゝ、それは正しく地獄を思はする第一夜であらねばならなかつた。

只見る、下町一帶、西南は遠く品川の邊より、北の方遙か千住の邊に亘り、近くは神田、本郷、下谷各區より、遙か本所、深川をとほして、恐らく浦戸、大島、小松川まで皆と云ふ皆、家と云ふ家、會社と云ふ會社

倉庫も、洋館も、學校も、神社も、佛閣も、公園も、橋梁も、すべて、皆一面に火の海と化して、紅蓮の焔、風にゆらぐ樣、眞に身の毛もよだつ許りである。

折から曇つた天には、この火の海か眞紅に映じて、立ち昇る黑煙と共に、一面に燒け爛れ、宛然地獄の劫火、斯くやあらんと思はるゝ許り、そのさま、その景況、眞に口筆のよくつくす所ではない。

而して、憐れなる市民は、今はこのすさまじき景況に面接して、之を如何ともするとの出來ぬ無力さである——やがては恐らくその身一つも持て餘す無力となるのであらう！人力の微弱さ、人の力の果敢なさ！大自然の破壞力、運命の神、魔力！それは一朝にして、人間三千年の歷史を拂り去り、易々として人智數百世代の文化を原始の曠原焦土と化し終る。

まことにこの日、人の世のあはれは一際深かつたのである。

第二節　生命の蠢動

避難市民の渦巻 II

火の海に包まれ乍ら流石大東京は廣かつた。抱き容るゝ市民正に二百萬人、仍に人間界の悲慘はいよいよ、はげしく、みぢめに演じ出されて來る。

はじめ大地震の突如として襲ひ來るや、その第一震と次の第二震とに於て、倒さるべき地上建造物のすべては殆と悉倒潰しつくされ終つた。而も勢ひはげしき餘震は執念くも殘餘の建造物まで悉くを搖り倒さんとする勢ひを見せて、襲遭難市民の心膽をひしいだ。

加ふるに强震と前後して起つた市内各方面の火災は、防火機關なくその逞なきに乘じて、宛ら無人の境をゆく王師のそれの如く、ほしいまゝにその勢ひをたくましうして、一切の可燃物を洩らさぬ有樣である。

驚きふためき、その身一つを辛ふじて屋外に逃れ得しその時は、一切の財寶、家具其他、何ものも欲しいといふ心もなかつたのであつたが、やがて淺間しや生くる者の執着は、「せめてあれ丈け」「せめてこれ許りは……」と、今はもう恐ろしき地搖れの事も忘れた如く、傾きかけし家に命を的に入り込んでは、あれやこれ、それもこれもと、慾ばりし心に、多くの品物を持ち出し、或はしつかと肩にかけ、背に負ひ、一手にさげなど、その姿、まことに五慾の人間界のならひに洩れず、斯くて今はもう地震・火災の恐ろしさよりも、その財物が惜くなり、生の執着は一朝、財物への執慾と化す。この間思はぬ時を消して、いざ！命より大切の財物と共に逃れんとせし時は、もう遲かりし由良之助、火は既に四面にまはつてのがるゝに所なき有樣！

「コハ大變！！大事！！」

と、今度は又も生の執着にかへりつゝ、今までの「苦辛」と「貴重な時間の費え」を、身につけし「財物」と共に、どつと捨て、文字そのまゝの命からがら、火の中をくゞつて逃げゆけば、同じ境地の人々、一時にどつと、細き道につどひ來り、忽ち人の渦巻は火の海の底に起る。

熱さに苦しみ叫ぶもの、人ごみの痛苦に泣くもの、肉親を呼んでは泣ぶもの、斯くなつてはもう人間は凡ふの昔に貴物主に返上して、強いもの勝ち、頑張りもの得の阿修羅場！！我先きにと弱きを排し、隣を虐げつゝ、一途に安全の彼岸へとあえぎゆく。

併し、あゝ萬事休す矣！

命の唯一の逃げ道なる行手の橋、此時既に燒け落ちて渡るに由なし、

「橋が落ちてゐるぞ、返せ〳〵」

と先なるものが叫べども、狂ひはやりし命がけの人々の耳には、いつかなその警告が入らばこそ「エッサ、エッサ」と押しゆき押しゆく……。

斯くて、あはれや寸前の優者、暴者の強者は、排し來り、押し退け來りし以前の弱者たちに、押し詰められて、あはれ水の中、濁流の中、火の中にバタリ、ベタリと落ちゆく許り……。」

斯くにして、行手の橋落ち居るとを知りたる生き殘りの人々は、又しても同じ混亂を他の逃げ道に繰返しゆく、そうかうする中に、火勢は益迫り來つて、あはれ無惨や、すべての人々は興奮と熱火と絶望に生木を倒すごとく、その塵にバタリ〳〵と斃れ終る。

實に生きたるまゝ、地獄の業苦を嘗めざるを得ざりし、これら多數の人々の身の上、書くにも我かペンしぶり勝ちである。

運命倘その人の上に幸にして、萬死に一生を得し「幸」なる人々は「助かりしとの有難さ」をしみじみ感謝しつゝ、文字そのまゝの無一物。着のみ着のまゝの洗足すがたを、あてどとてなく、只人々の歩くまゝに行くまゝに、要心したぬけがらの身を、フラ〳〵と夢の如く歩きゆく許り……。

これらの人々は、恐怖の夜と共に、次第にその數を增ゆき、山の手の比較的安全地帶へ逃ずる道は、これら「魂抜けし生き人」を以てうづまり、その狀態、これが人の世かと怪しまるゝ程であつた。

而も如何に傷つき、如何にいたむとも、小には「生への執着」が何より深く強かつた、餘りにはげしき衝動の連續と、興奮の極致は、その人々をして無感、無感、無知覺と化す。而も當目的に、只本能の力の、自とその魂のぬけがらを選びゆく所、正しく自己保存の原則にヒットする、「生の執着」が理念以上の本能に基くと、この際に於てマザ〳〵と窺知されたのであつた。

斬くの如くにして、震災、火難の二つより、辛くも逃れ得たる市民の沈黙の流れは、夜と共に深まる高きへ、下町山の手よりドツドツと、生命のいとぐちし、押よせるのであつた。

おゝ、燒ける天、火の海を背としての、この慘憺極まりなき人の流れよ！

生命の連續よ！！

この夜、劫火に光輝はれし天なる星々、そのかすかな光に深き憂を藏して、叫はれたる關東の人々の上にまたゝいてゐた。

恐怖の第一夜は、燃えさかりゆく火勢と共に、刻々更けていつた。

第四章　災禍の第二日

第一節　不安の夜明く

恐怖の夜は白々と明け初めた。

事もなげなるその黎明よ！！

昨日正午より燒けはじめ、燃えつゞけていつた震災後の大火は、全東京を包むと終夜、而も尚火勢猛烈を加へ、濠々たる黑煙、黎明の空を掩ふてすごい。

その夜、よもすがら、家なき人々勿論、辛ふじて碎破、崩壞、倒壞、炎燒を免れ得し少數の輩も、ともに、夜つゆしとどなる露天に、またゝく天上の星と共に泣きおのゝきつゝ不眠に明したのであつた。

過勞！痛心！興奮！絕食！負傷！神經過敏！の連續十時間の後に來る不眠不休の一夜！！まことにそれは災害の人々にとつて耐え得ぬ心身の責えであらねばなゝなかつた。

而　恐怖と不安と、災禍は、明けゆく空と共に消え去るのではなかつた。

火焰は益々朝の風　勢ひを得「すべて滅びよ！」と叫び、ゴーゴーと、

呪ひの曲を奏でつゝ、四邊構はず燃え擴がる、加ふるに時々襲ひ來る餘震の恐怖！

昨日以來、震動に對して、極つの神經過敏　陷りし殘存市民には、假令些々たるそれも、忽ち衝動的に立ち上り、微々たる細震　遽と色を作すこゝ亦已むを得ぬ所であつた。

斬くの如くして九月二日の大厄日の朝は、壞滅の大東京に訪れた。午前六時、七時、八時。

オ、、その午前八時よ！！

昨日のその時刻は、新學期來に、老は孫のよろこびを我がよろこびとし、親はその愛兒の歡喜に我が樂

しみとし、二十萬の學童を始め、漸く休暇を終つて英氣勃々として上京して來た男女幾十萬の中等學校生徒たち、賜暇を終りし官公衙への勤め人、其のすべてが、涼しい朝風を電車の窓に受け乍ら、歡喜の行進曲を奏でる如き輕の音、樂しく、夫々その樂しき勞作場へと急いでゐた事であつたに！

あゝ、人世無常、有爲轉は世の習ひと云ひ乍ら、これは又何と云ふ變り方であらう！

これが僅か一日の間の變化であると云ふのか!!

あゝ夢、夢!! 夢よさめよ、さめて活氣の帝都に、この身をかへせ!!

よべど叫べど、何の應へもあらばこそ、身は極疲の姿を夜露にしめらしつゝ、小石川は上富坂なる、政界の彗星、御樹滝主人、三浦碌樓將軍邸の廣庭に横へてゐるのであつた。

これがほんたうの事なのか？どうしも、さう思はれぬ昨日からの甚だしい變化と、複雜な刺戟、そして激しい衝動の數々よ!!

俺は狂してしまつたのではないか、狂人、狂を知らず、みだりにその錯覺に自ら驚くの愚を敢てしてゐるのではなかつたか、迷ひよ去れ！幻影よ消えよ、

あゝ、苦しく耐え得ぬまでなるこの迷夢の世界!! 霧散せよ、」

而して身自分を昨日の朝の歡喜と希望にかへせかし……。

うち血を吐くまで、狂はしく、衰えし心身を强てむちうちつゝ、事さまざまに觀じゆき、思ひ千々に亂しゆく敗殘の男女の九月二日午前八時の感懷!!

而もあゝ、天地の主宰者は、嚴乎たる事實を地上麗日の前に展開して、默々無言の雄辯に、奢り來りし人を訓へる。

「人よ、眞に生きよ。永久不變の文化の汝のうちに形づくられん」と。

第二節　知りたき七ケの箇條!!

文明の利器、惡魔の一戰れに忽ち潰滅しつくし、復用ふべくも無い。」

昨日に變る今日の不便、不自由の數々！

便利に馴れ、自由を誇り、物質文化の享樂に奢つた都の人々も、裏れ昨日正午からは、惨殺れし鳥、木から落ちし獸、杖頼はれし盲人にもいや勝りて悲しく情なく思なかつた。昨日午後のテクチク數里の徒步を第一とし、戰きし昨夜の暗黑無燈、無水を第二とし、今朝からは又、金あるも食なく、衣なく、住居なく、しみじみ生きることの苦しみを味はひ初めた。」

別して殘存市民にとつて、心許なく不安やる方なく、淋しさをして、一際淋だしからしめたものは、如たる諸報道機關の休滅ーそれであつた。

昨日以來引つゞき、後へ後へと勃發する、恐ろしきばかりなる變の數々!!それが如何にして成し、如何にして經過し、何時、如何にして終熄するや。それは萬人共通の第一義的疑點であり、不安の根核であつた。

震災と共に起りし大火が、現在那邊を燒きつゝあるや、既に燒つくしたる箇所、方面は果してどこどこなるか、その火事は何時どの地域に於て阻止し得らるゝ見込みなるや?これ第二に解決答解を要求してゐる所のものであつた。

第三には、これら多數の避難市民を、如何なる方法によつて救恤し、飢えたる多數に如何にして、食を給するか?

第四には、この不慮の大禍災に罹れし市民、抑も果して幾何ー

第五に、この震災は果してどの範圍に亘りてのものなるや、帝都以外の狀況如何ー

第六には、一刻も早く在京生存市民の消息を、母郷郷里の人に傳達するの方法を講ぜよ、その非常手段如何?

最後に、この破格的の大破壞を修復再生する當面の責任機關、新内閣は何時成立するや?その當面の人々は果して誰々ぞ?

凡そこれら　ケの經數、不明は、すべての避難市民に於て、一刻も早く、その一ケ條のみにても解決されん度く、分明にされ度く、熱望する所のものであつた。

新くて飢疲れた　人々は、その食　飲を欲し求めると同じ程度に於て、報道機關の、新しきニュースを渴望するのであつた。

けれども、全滅さ、終つた帝都の十數に餘る新聞紙は、何れも寂として聲だに立てず、悲慎の沈默を守るより外なかつた。

斯かる間を、得たり賢しと、流言蜚語盛んに行はれ、人々の不安は、いよ〳〵益々增しゆく許りであつた。

第三節　廢墟の空に飛行機一機!!

二日午前十時ごろ。

無傷、無疵、只妖焰の燒くに委せ、黑煙の掩ふに委せた帝都の空丸かにプロペラーの音高く聞えい

した。」

「飛行機來！飛行機來！」

「オ、飛行機だ、飛行機だッ」

不安の思ひに夜を明した避難市民の絶望の眼は此時、急に輝き出した。

何處の所屬かは、分らねど、外より飛行機が應援の帝都に見舞來しは、必ず、どつか外部との連絡のとれた證左である。

「早く報道のビラを播いて呉れッ！」

「早く助けをよこしてくれッ！」

子供の樣に、聞えもせぬ天空に向つて眞面目に呼ばふ老ひたる人のあるも、そゞろあはれが催されて感しかつた。

帝都の上空を幾度か廻旋した黄褐色複葉の飛行機は、地上なる慟れなる民衆の訴へを「心得た！」と、うなづくが如く忽ち西方の空へと、その姿を沒してしまつた。

あとには雖然たるさざめきが各所の避難箇所から起つて、しばしはしづまらなかつた。

四日に至り、飛行機を以て、逸早く帝都を中心とする震災の詳細を、傳へた三日版の大阪毎日新聞及び

震災の急報と共に逸早く神戸より帝都に入りし神戸新聞社編輯局員の寄した二日版臨時記事によれば二日のそれは、實に所澤航空學校所屬波多野飛行中尉の搭乘操縦せし、乙式第一型第二百十六號機であつたことが知れた。

波多野中尉は、その朝八時、陸軍大臣の命令を受け、重要事項を大阪なる第四師團長に傳達に出發し各務ケ原へ向け航行中、災火に憐む帝都を見舞ふたのであつた。

災害後の第一次飛行機に關する新聞記事の全文は次の通である。

第一

東京市の震災狀況、告及び救濟要求のため所澤航空學校の波多野中尉は第四師團司令部に赴すべき陸軍大臣の命令を携へ二日朝乙式第一型第二百十六號機を操縦して所澤出發十一時十分各務原飛行場に着陸した、同中尉は二日午前十時頃の東京市中の狀況を語る東京市内外は家屋倒壊人畜の死傷も無數で官衙も内務省、大藏省、文部省、帝室林野管理局、陸軍衛生材料廠、造兵廠、砲兵工廠その他多數燒失し東京衛戍各部隊で市内の繁理、營り陽の蟲、習志野、松戸、千葉等の各部隊より漸次東京に送致せられ各隊は市中警備の外自動車隊の衛生隊を組織し糧食分配死傷者救護等に努力してゐるが市内尙五六箇所燃えつゝあり横濱は今なほ黑煙につゝまれ横須賀軍港は軍用重油タンクが爆發したらしくとゝにも濃々た

大地は裂れたり

る黒煙の上つてゐるのを機上で見受けた云々

同中尉は午後一時出發　阪に向つたが大阪糧秣支廠の戰時用パン十數貫、米千五百石、至急海で東京に廻送すべき命令を第四師團司令部へ傳達しその糧食の東京着豫定時刻を急報すべき任務を帶びてゐる（各務原來電）

第二

東京より飛來せる東京航空學校波多野中尉が大阪第四師團に齎した隨軍大臣からの命令は

大阪師團において堅パン十、貫と精米千五百石を出來得る限り急速に東京に送附せよ尚狀況に依つてはその後又堅パン十、貫を送るべし若し大阪において不可能なる時あれば直に宇品の糧秣支廠　その旨傳達して宇品より送附すべし

と云ふのであつた、大阪第四師團では其命令によつて直に堅パン十、貫と精米千五百石の輸送準備に着手し三日午前十時大阪港を出帆する大阪商船アンデス丸に積込み中である、又現在東京では救護班の編成に非常に苦しんでゐる模樣だから四師團では既に軍醫看護卒及び看護婦等で約百名の救護班を編成し陸軍大臣の命令一下を待つて直に出動すべく準備を完了した尚第四師團では參謀本部總出で師團長邸に參集し種々の手配り盡りなく二日午後五時には事務所を設けて各隊に急援準備をなすべく內達した

之を手初めに、帝都の空には、日毎に飛行機の來訪、狀況視察が行はれだした。

新しい知己を天空に見出し得た罹災民のすべては、報道機關絕無の時とて、子供の如く欣舞して、その一刻も早く飛行機の通信よりする救援の來ることを離れ待つ許りであつた。

第四節　飢に疲れるもの

第二日の避難市民

飛行機去りたる後の人々の顏には、急に寂寞と空虛とが讀まれた。

それは恰も親愛なるものゝ、辭去した後に味はるゝやりどころなさであつた。と張つぶいてどつと、耐え得られぬほどの空腹と疲勞とが襲ふて來た。

罹災所に座臥せるものにして然りである。

況して昨日以來、魂ぬけし亡靈の如く、火より脫れ出でし身を一里、三里ものかは、親族、知己をたづね賴んでゆきしに、命とたのむ人も亦同じ運命に泣ける身たりしとは……。

失望落膽よりも同類相憐れむの感頻にて、共に熱き涙に、せめても命を全ふせしとを慰め合ふては、又

大地は壞れたり

しても何處あてどとて無いさすらひこ、出ゆかなければならなかつた悲しい運命！

そうした人々の、この日正午より午後一時二時、にかけての飢と疲れとは、しんじつ何ものにもなぞらへ得べきものとてなかつた。

翌三日に出でし某新聞の號外は、機械焼失、職工離散もの、覺束なき印刷ながらに、この日の一小章を報じて云ふ

避難民餓死に迫る

市役所の炊だしに狂ふ　如く參集す

市役所では二日正午から廳内に大釜をすえ大炊出しを開始し、炊上るとすぐ自動車に滿載して、市中に出かけるが炊だしと聞いて避難者市役所附近に群集、大混雜を極め擂り飯自動車と見るや群集は忽ち包圍して自動車を止め係員の手をまたず自動車によじ登つて手づかみにするやすぐ頬張るさまはまるで餓鬼の如く一晝夜ぶりにやつと飯粒を口にした事を思へば良れにもいたましい云々と、

けれども、これら僅乍らも食を得られしは上々の部であつた。荒廢の街區には一滴の水なく食料をひさぐ所とてない、その中を灰と塵とにまみれ乍らゆき來する人々を見てあれば、その灰とすゝと汗にまみれた顔を拭はうともせず、片手にしかと飲水入れしサイダーの空瓶など持ち乍ら、これを唯一の命のかてとしてゐるものがあるかと思へば、風呂敷にいと大切げに一塊の氷を包み、そのとけてしたゝる一滴一滴をまみれつく塵埃と共に風呂敷の外から吸ふてゆく者もある。或者は僅少のビスケットに一時の飢を凌ぎ、或者は紅シヨウガの一片を後生大事としやぶりてゆく。

食なくして疲れ果てしものは、處嫌はず四邊の焼跡にどつかと身を横へて、衰えし瞳をとぢるのであつた。

或はちんば引きく、壯年の肩にすがりゆく老人がある。或る婦人は父らしき五十許りの人の肩におよがつて、死人の如く蒼ざめし顔をぐたりとたれて、正氣なき樣なのもある。

臨月の腹を抱さ乍ら、背には二つ三つ位の子を負ふてあえぎ〳〵ゆく女もあれば、山の如き容積の荷物を危く我肩に支へ乍らゆく男もある。

女教師らしき若き女は袴を高々とからげて恥とせず、動め人らしき青年は無帽洗足である。多くの荷を手引車につんでは引きゆく一家族らしき一團の人々もあれば、自動車に砂塵をあげて疾驅する紳士もある。

よく〳〵見れば、車内なるその紳士はしたゝか酔いたか、首の邊りより後部へかけて白々と粉末してゐるではないか。

自轉車にのつて走るもの、荷車の上に、病傷の身内を蔽せて徐々に引ゆく者……迷ひ子らしき少年の、きょろきょろした眼もいぶらしく、何となく往き交ふ人の流れに流されては消えていつた……。

凡そ、かっした千態萬樣は、二日の午後より三日を經て四日、五日の夕方頃まで、引きりたしに、ザワ〳〵と流れに流れ、動きに動いて、眞にこの世のさまとは思はれぬ有樣であつた。

そして、オヽ、その一歩一歩がはげしき飢と疲れの爲に、その肉と神とを滅びに誘ひゆく死の道である

とを思はないのか？

夕方近くなると共に、避難民の空腹と疲勞と困憊とは、いよいよ增し加はつていつた……。

第五章　戒嚴令布かる

第一節　第二夜の衝動！

―〇〇と〇〇と―

二日午後三時――四時と覺しきころ。

小石川は、爆焰を起して區內の人々の心膽を寒からしめた砲兵工廠の隣、政界の惑星、彗星を以て呼ばれたる觀樹將軍三浦梧樓子の上富坂觀樹庵の廣庭、

饑渴と飢と疲れとは、日ごろのいかも外聞も何のその、揺とその身を叢の上、土の上に臥し横へ、昏々死せる如く眠るもの、呻くもの、叫ぶもの、或ものは失ひし財貨の事を話して、かへらぬ事に執着し、或ものは離散せし肉親の甲乙の身の上を氣遣ふ……今はもう、上空を廻旋せし午前の飛行機の事も夢幻の如く忘れ果てゝ、狂ほしき許りの作心てあり、憔燥てあつた。

併し乍ら、五尺の身を起して積極進取、自ら食をあさり歩き、とり出し得ざりし財物を待ち來り、失ひし人を索める氣力とては勿論有る筈が無かつた。焦慮燥心は却て飢と疲れとを強めゆく許り、やがて誰もぐつたりと失望、絶望の淵へ陷つた如く、だんまり込んでしまふ……。

そうした、その時！

廣庭の小高い所に立つた、武裝甲斐々々しい一在郷軍人らしい中年の男があつた。突如破れ鐘の樣な聲が、鮮づめの人の上にひゞき渡つた。その俄作りの馬糞紙のメカホーンは或る事を語つた。

死せる如く横はつてゐた人々は忽ち別人の如くすつくと立ち上つた。

その蒼白の顏面に凹ませて持つ雖の鰐きの、如何に髯樣なりしか

極度の緊張―その時、人々の口は死人の如くこはばり默する、」

おそろしく引しまつた廣庭のその時の空氣―

その空氣をうちふるはして、メカホーンの警報は鳴もゝじけられた。

在鄉軍人は、云ひ終ると飛鳥の如く彼方へと駈け出していつた。その後姿を瞬きもせざる注意に見送つた人々は、其姿の彼方に消えると共に、漸く我にかへつた樣に、ホッと大息をついた。

と忽ち怒濤の如きうなりが、どつと廣庭一帶に起つた――「ひと恐怖と絶望とを一度に音に表した樣なそのさゞめきが……。

しばらくすると、その雜音のすべてをかき消す「生命がけなる魂の絶叫」が起つた。

又してもざーつと魂のうなり――その雜音がひろがつて來た。

町内では、忽ち、在鄉軍人、青年團員、町内有志の聯合になる自警團が組織せられる。避難民中の壯年の男も、今までの疲れと飢とを打ち忘れたかの如く、進んでこれに參加する。殺氣は暮近き敗殘の町のすみ〳〵にみなぎり、人々の神經は針の如く鋭、作用きだした。

この世を滅亡せしめる魔の劫火は、東の天をあか〳〵と彩つてゆく、餘震尙やまざる裡に、恐怖の第二幕は近づいてくるのだ。

自警團の人々は、町名しるしたる白布を右肩より左脇へ、頭は後鉢巻甲斐〳〵しく、町の入口、町内の要所〳〵を、水もらさぬ堅固さに固めていつた。

第二節　市民自警團の活動

この夜は、自警團の警告に驚かされて、一人として家――辛ふじて倒壞と火災とより免れ得し山の手方面の少數の家――に居るものとて無かつた。すべて夜露しきりなる屋外に、萬一を避け逃れて、何れも戰〳〵戰〳〵として安き思ひと　無かつた。

赤々と燒け爛れる東方の空は、不安のひに疲し人々の顏をぶり向く毎にくわつと照し又忽ちその一切をかくす、はげしき明暗―それは東面西面が示す氣味惡いこの夜の景象であつた。

東の空の眞紅に燒けることが、却て四隣警團の歩行を妨げる、それは例へば烈日の下にあつて、日かげを、る時の、日かげの闇黑不明のそれであつた。

この間に流言蜚語は頻に行はれて、いよ〳〵人々の心を惑はし、恐れしめゆくのであつた。

虛說はまことしやかに傳へられ、噂は噂を產んでゆく、誰もその眞相を捉え得、その正しい

事實を指摘し得るものとては無かつた。

不安と危惧とは、夜の更けゆくと共に刻々募つていつた……。

折から、下宮坂の方向に當つて突如として「ウヘーツー」と云ふ物々しいときの聲が起つた。かと思ふと引つゞいて、けたゝましい音が聞えた。

「夫れッー」

と云ふまもあらばこそ、ガヤ〳〵〳〵と騒り騒く聲、玉ぎる樣な叫喚!!一度に起つては又しても「ウワ——ッ!!」と云ふ喊聲とたる。

一個命はまろぶ樣に何事かを告げ來つては彼方へ一目散にかけ出す。

「好ッ矣ー」

一同は總立ちとなつた。

自警團の人々は、闇より現れ、闇に沒する……。

騒擾はほどなく靜まつた。あとは又氣味惡い沈默にかへる。

東の空は赤々として、劫火燄〳〵ひろがり強まる事を示す。誰も一言として發するものが無い、息を殺し、片唾をのんで樣子如何にと聞き耳を立てゝ詳り、

ト、遙か彼方の何處よりか、幽かに物の響く音が人々の耳朶に傳はつた。あとは又しても死の樣な沈默にかへる。

しばらくすると、今度は最前、けたゝましい叫びの起つたあたりから、歡喜、謳歌よりする聞の聲が「ワーッー」「萬歳——ッ」と、死の沈默を破つて起つた。

つゞいて息せき切つた少年傳令が、宙を飛んでかけすぎる。

人々の心臟は早鐘の如く打ちはじめ、その瞬は、すごくも異樣に光り出した、正に生死の關頭に立つの思ひである。

そのすべてを嘲笑する如く、火の海、燃る東の空は、赤々と毒々しく笑つてゐる。

この大きな背景を東に負つて、夜は益々更けゆく、鬼氣は川の手一帶の闇に迫つた。

午前三時ごろであつたらうか!

眠るともなしに、うつら〳〵してゐる人々の耳へ、夢の國よりの便りの樣な聲が傳はつて來た。

「皆さ——ん、御安心下さい。只今二ケ師團の兵士が我が東京を護りに來てくれました。戒嚴令が敷かれたのであります。

御安心なさ——い。もう大丈夫ですぞッ……。」

大地は燃えたり

その人は、同じ事をくり返し〳〵、彼方へ彼方へと叫れていつた。

「戒嚴令！」

その言葉に、又しても人々は立ちあがつた。

忽ちどよめきがざわ〳〵と起つた。

けれども、それは宵の物騒さに對しておこしたそれとはまるつきり違つてゐた。何とも云へぬよろこびの聲が、そのどよめきを快活に見せた。と誰かゞほゝたりに嬉しさうに叫んだ。

「有難うーーッ」

その聲におび出されたかの樣に、つゞいて、誰からとなく、萬歳——ッ」と云ふ歡聲が、眞暗の中から起つた。そして、しばしは鳴りが止まなかつた。

疲れにつかれ、飢えに飢えしすべての避難民は、はじめて安心した樣に、どつと地面へ倒れ臥したかと思ふと、もう前後も知らずに眠つてしまつた。——そこゝ夜露しげき野天であることも何も忘れたかの如く——その時、只一聲、朗々たる鶏鳴が闇を破つて、黎明近きを告げた。

第六章　報道機關の活動！

第一節　燒殘りし新聞の活動！

はじめ大地震帝都を襲ふや、あらゆる建築物は損傷し、倒壞、半潰れ、傾斜その何れかに歸せざるものとてなく、而もつゞいて起りし災火はその上を舞ふてその惡くゝ灰燼に歸せしめた。

丸の内、京橋、日本橋の大建築物皆然り、從つてそこを根據とする帝都一流の新聞社亦免れることが出來なかつた。

新聞社はビタとその機能を休止し、爲めに人々は、未曾有の災禍裡を、その一切の情を知るに由なく、夢〻夢〻に燒跡、震跡を盲目的に、さまよひまはる外なかつた。

斯かる裡に、辛ふしてその機能の幾分かを存し止め得し、報道機關東京日々、報知、都などは、災害第三日目即ち九月三日より不完全なる號外を以て報道を開始した。

正にこの災害地域にあつて、連日連夜の恐怖と不安とに、心混亂の極に達し、五里霧中を彷徨せし百五十萬の人々にとつて、闇の光明であり、無上の福音であり、且、安定の指針であつた。

罹災民、難民のすべては、この破格なる幸福に逢ふて、しん底から、新聞紙の有難さ、報道機關の價値を

認し認めた事であつた。

かくして傾に建つた帝都の新聞紙は混亂の裡に號外又は本紙を發行して、市内の所々に貼りつけ、衆の便覽に資した。

其他三日に至つては、各種の謄寫摺、墨汁のなぐり書き掲示、至る所に貼附られて、何とも云へぬあはたゞしさである。

人々は急に活氣づき、そのふみしめる一歩一歩には、力と意力とがよまれた。

街路に沿ふた到る處の、貼用號外其他の掲示には、やつれ衰へし人々が、黒山の緣に集ふては、息をもつがずに讀んでゆく、そして或はほゝ笑み、或は太息をつく……。

そのさま誠に壯である。

第七章　新内閣の成立

第一節　禁廷御野立の親任式

加藤前内閣總辭職の後を承けて、内閣組織の大命を拜したる山本權兵衛伯は、去月末以來、連日水交社に立てこもり、所謂内閣製造に專心してゐたのであつたが、九月一日も亦早朝より水交社に入り、要路の人々と會談中、この大震災に遭ふたのであつた。

山本伯は危き中にその難を免れ、一先づ水交社を出でゝ難を避けたが翌二日に至り、この日本未曾有の凶變を見て、一身を邦家に捧ぐるの大決心を以て新内閣組織をみし、午後四時、永田町官邸に新閣員たる人々を召集し、内閣組織に關する大體の協議を遂げた後、打揃ふて宮中に參内した。

これより先き、震災は宮廷にも及び、破損々傷少くなかつた事とて、最れ多くも攝政宮殿下には、御座所を庭前の四阿に移させられ、そこに難を避け給ふたのであつた。

茲に於て、山本伯以下を召させられ、四阿に御野立あらせられたまゝ、新内閣々員の親任式を行はせられ給ふたのであつた。時に午後七時半、茲に驚大震災の後を承けて立つ山本新内閣は成立を見たのである。

その内閣々員の顔觸れは次の通りである

總理大臣	山本權兵衛	外務大臣	男爵 伯
内務大臣	後藤新平	大藏大臣	井上準之助

大地は壞れたり

新内閣の成立

司法大臣　農相兼任
陸軍大臣　田中義一
農商務大臣　田　健治郎
鐵道大臣　山之内一次
文部大臣　逓相兼任
海軍大臣　財部彪
逓信大臣　犬養毅

それより、各閣員は宮廷を退出して一先づ首相官邸に引とり、種々當面の重要問題につき協議し、取り敢ず左の如く事務所を設定して、晝夜不休執務をすることに申し合せたのであつた。

晝

山本首相兼外相　首相官邸
後藤内相　内相官邸
財部海相　海相官邸
田中陸相　陸相官邸
田農相兼法相　農相官邸
犬養逓相兼文相　未定
山之内鐵相　鐵相官邸
井上郵相　郵相官邸
樺山輪長　首相官邸

夜

芝、高輪臺、三二
麻、櫻田、五〇
芝、白金、三光、五一九
麻、我善坊、一五
四、大番、八五
四、南、八八
麻、第十見、三三
麻、三河臺、三一
四、大番、二八

四日新内閣は閣議を開き、左記重要諸項を協議決定した。

閣議決定の對應策

(一)近衛第一師團の軍隊麵麭を配布する事現に三萬人分を配布す
(二)宮城前廣場を開放する事
(三)防備を嚴重にする事
(四)青年團及在郷軍人の武器携帶を禁ずる事
(五)火葬場を臨時設置する事
(六)千住木津習志野の廠舍を開放し一萬五千人の罹災民を收容する事
(七)バラックの建造を工兵の力に俟つ事
(八)銀行開業の場合は軍隊の援助を俟つ事
(九)宮城前、宿深川の宮内省御地を思召により開放する事
(十)外人に對し相當保護を與へる事
(十一)宮内省の木材を罹災民に下附する事

ついで當路の大官、逐次に左の通り任命を見た。これで國家政の基礎は漸く定まつたのである。

任司法大臣　枢密院議長　平沼騏一郎
任臺灣總督　内田嘉吉

新内閣の成立

任大審院長　大審院判事　横田秀雄
任内務次官　　桑本清治
任内務大臣鄭衛官　田島逸介
前大藏大臣　　市來乙彦
日本銀行總裁被仰付

任警視總監　　湯浅倉平
任社會局長官　　池田宏
任文部大臣　　岡野敬次郎

五日よりは、毎日閣議を午前午後の二回づゝ開き、夫々當面の對策につき協議することに、つた。

新紙の報ずる五日の閣議の狀況は次の如くである。

官邸閣議

五日午前九時より永田町首相官邸において閣議を開き山本首相以下各大臣出席交通機關物品配給の模様等につき關係大臣より報告を聞き殊に(一)交通機關の恢復な法については今後後藤内相と田中陸相とがよく打ち合はせの上聯絡統一を計ることとし(二)食糧の供給はこの際最急を要するとなるを以て出來得るかぎりその輸送配給を速かならしむると(三)及び赤池前任警視總監より今日まで管轄内の秩序維持についてとり來つた方針の報告を聽取して正午散會なほ當分の間閣議は連日午前九時より及び午後四時よりの二回開會の筈

第二節　新内閣の告諭並に聲明

―大破壞修復の曙光見ゆ―

山本新内閣總理大臣は、五日左の告諭を發して、罹災後の國民を戒める所があつた。

國民の節制を望む

今次の震災に乘じ一部不逞鮮人の妄動ありとして鮮人に對し不快の感を抱く者ありと聞く鮮人の所爲若し不穩に亘るに於ては速かに取締の軍隊または警察官に通告してその處置にまつべきものなるに民衆自ら濫りに鮮人に迫害を加ふるが如きことは固より日鮮同化の根本主義に背戻するのみならずまた諸外國に報ぜられて決して好ましきことに非ず事は今次の唐突にして困難なる事態に際會したるに基因すと認めらるゝも刻下の非常時に當りよく平素冷靜を失はず愼重前後の措置を誤らず以て我國民の節制と平和の精神を發揮せしむることは本大臣のこの際特に望む所にして民衆各自の切に自重を求むる次第なり

大正十二年九月五日

内閣總理大臣　伯爵　山本權兵衛

大地は壞れたり

又、後藤内務大臣は、左の聲明をなし、人心の安定と、國民の協力を希望した。

帝都再造の聲明

政府は最善を盡して罹災者救護に關する方法を講ずるとともに一切の救急手段に遺算なきを期して居る而して政府は市民と共に全國民の協力に訴へ速かに帝都を再造し大東京を復活するのみかこれを機會として更に光輝ある新生命を樹立する事が内閣總理大臣以下全政府の統一精神である事を聲明する昨今政治の中心を大阪に移すとかの浮説があるやに聞くが、これは災後の巷間に發生した無根の流説か憶説であつて斷じて政府の流言でない事を重ねて聲明する故に市民は天の與へた大試練に堪へ全國民と共にこの國難に打ちかち政府と共に後圖を策して帝都を再造し大東京を復活する外更にその上に新文明を建設する抱負あらんことを希望する

引つゞき後藤内務大臣は、今回の未曾有の大震災、大火災に處する對策につき、左の七案を提議し官民共力一致して應急の手段に出づべきを高説した。

その七案に曰く

第一、食糧は十分供給に餘あるけれども配給の方法よろしきを得なければ何にもならぬ仍て當局者が最善の努力をするとは勿論であるが各紳士において義勇奉公の精神を發揮し博愛衆に及ぼすとゝもによく

浪費と徒勞とを防ぐの必要がある但當局者は未だ曾てかくのごとき大事變に臨んだ經驗がないから法による行爲は一面において法に拘束せらるゝことを免れないから各紳士が自主的に發奮努力せんことを切望し且これに信賴する

第二、然して以上の食料の配給をたすくるものは運輸機關であるが自動車を有する各紳士が自發的にそれ等の自動車を提供せんことを希望せざるを得ない若し自發的に提供しない場合は徵發令によつて徵發するの外ないのであるがこれは自他ともに甚だ遺憾のことであるから萬一にも斯かることのない樣に希望する然して目下市中はガソリンと運轉士との缺乏に苦るしんでゐる狀況にあるから各紳士はよろしくガソリンと運轉士とを付けて自動車を提供せられたいこの場合政府はガソリン代及び運轉士の給料を負擔することになつてゐる今やこの事は一日も等閑に附することをゆるさい焦眉の急であるから各紳士はいやしくも愚圖々々してはならぬ即時に斷行せられたい

第三、水道は既に開通したと稱してよろしい但山の手方面の高地は水が不十分のため未だそのはこびに至らないけれどもこれは多少の時日をまたなければなるまいと思ふ

第四、次ぎは雨露をしのぐ住宅の問題である幸ひにも天恩優渥攝政宮殿下の特別なるおぼし召しによりて數十萬人を收容するに足る大テントを各公園その他宮内省所有地の適當なる箇所に建てることになつて

あるしかしてこのテントは陸軍省の所有品を宮内省に献上し更に攝政宮殿下より罹災民救濟用として御下賜になるのであるが差しあたり十萬人を收容する大テントを作るとになつてゐるこの事たる實に皇室未曾有の恩惠であつて國民の喜悅はさることながら當局者としては聖意の徹底について至重の責任を感ずる次第であつて十分の努力をなす決心である、然るにこの實行については多少の時日を要することを免れないからこの際各紳士は速かに英斷を以てその住宅を開放するに至らんことを切望する、若しこの決心をなすに躊躇するものある場合は或ひは強制的に實行せしめるかも知れないから斯かることのないやうにくれ〴〵も義勇奉公の精神を發揮し博愛衆に及ぼさんことを切望する次第である。而してこれと共に國康者はなるべく地方に出づるやう心がけることを勸告するこれは健康のためにも後圖をなすためにも時宜に適すると信ずる即ち政府はこれ等の希望者の爲に北海道の遠きに至る者までにも無賃乘車を許可することに決してゐる

第五、自治自營について各青年各在郷軍人團のとれる態度について或ひは過ぎたるものなきやとの非難もあるがこれは一部分であると思ふ、社會奉仕の爲にそれ程熱心してやるといふことは嘉すべきことであるからよく關係諸官の指揮のもとに萬遺算なきを期したい、この邸舍は決して無用のことではないたゞ本來の趣旨を沒却しないやうにすることが肝心であるしかして今日兎角政府當局者の意思の徹底を缺き實行の稍ともすれば不行屆をとなりはせぬかと危惧せらるゝものは前述せる物品の配給であるからこの方面に對して是非とも各青年團各在郷軍人團の援助を期待したい

第六、死體の跡始末は戒嚴的且衛生的指揮のもとに、しかして國民の自主的行動による援助のもとに實行する

第七、流言蜚語をなすものに對しては市民の自主的自警によつて十分警戒したい然るに前日來の跡を見ると夜中行人を誰何する程に用意周到なるにかゝはらず或ひは却て流言蜚語を幇助するが如き行爲あることは免れないのは頗る遺憾とせざるを得ない、この事は更に一層の注意を乞ひたい

斯くて大破壞修覆、新都再建の曙光は、かすかに認められ初めたのである。

第八章　聖恩あまねし

第一節　天皇皇后兩陛下御無事

大地は裂れたり

御巡幸の御留守宮殿下には、一日の大震災以來、日光、田母澤御用邸に御避暑中の父母君、兩陛下の御

聖旨を深く氣遣はるゝ御心痛の爲めにとんど同夜は御一睡も遊ばされぬ御有樣であつたが、二日午前一時どろ、危險を冒して上京報告に來た栃木縣官吏が

「日光地方微震の爲に被害少く、兩陛下には些かの御懸念なく御機嫌麗しく渡らせらる」

と宮内省に報告したので、宮内省では、ことに御慶至極と、早速之を御政官殿下に言上せばやと、深夜にも拘らず、この趣言上申し上げ奉た所、殿下には輝く御安心遊ばされた。

つゞいて二日朝十時、再度の報告宮内省に到達したので「宮城の御模樣をも」と御報告書を所澤の航空隊に命じ飛行機で田母澤へ廻さしめられたのであつた。

又御政官殿下には長くも庭前の四阿に御避難遊ばされ、御安泰に亘らせられ、二日には、新内閣の親任式まで御執り行はせられた位である、これ誠に、不幸中、何にも優る全國民のよろこびであらねばならなかつた。

第二節　御賑恤金一千萬圓御下賜

東京横濱を中心とする未曾有の大震害、火災慘狀を極むる惡、天意に遂し、長くも賑恤の思召を以て御内帑の金、一千萬圓を下賜せられた。誠に聖恩あまねしとゴふべく國民感泣の外ない御惠みであつた。

その御沙汰書の本文は次の通りであつた。

一金壹千萬圓

右天皇陛下震災ニ付被害慘狀ヲ極ムル趣被聞召賑恤ノ思召ヲ以テ下賜相成候事

大正十二年九月二日

宮内省

御政官殿下には、山本内閣總理大臣に對して、優渥なる御沙汰を賜つた。

御沙汰書

今回稀有の大地震東京及び近縣を襲ひ之に加ふるに大火災を以てしてその慘害甚だ大なるは實に國家生民の不幸なり予はその實狀を見聞して日夜憂戚し殊に罹災者の境遇に對して心深く之を傷む茲に内帑を頒ちてその苦痛の情を慰めんと欲す官民それ協力して適宜應急の處置をなし以て遺憾なきを期せよ

政府九百五十萬圓支出

三日の閣議に於て罹災民救濟の爲九百五十萬圓の豫備金支出即時使用に決す

この有難き御沙汰、忽ち特筆大書して罹災民に公示されるや、皆々天恩の忝なさに感泣せぬ者とてなかつた、親くその實狀に面接して感動の極致の民衆の涙を見て、筆者も亦、男泣きに泣いたのである。」

第三節　宮城の震害

新紙の報ずる宮城内の震害は次の通りである

宮城内における被害は可なり甚だしく其の被害の報道は畏い事であるが御内儀の四方の壁全部は落ち宮内省の内外も甚だしき損害を蒙つた又大膳所は滅茶々々となり宮城に通ずる二重橋正門、乾門、大手門、櫻田門、半藏門、和田倉門等の諸門は傾き御局の女官連は何れも悲鳴を揚げてゐる（名古屋來電）事、雲深き大内山の上の事に係り、今はその大要を記するに止めなければならぬとを遺憾とする。

第四節　皇族方の御消息

公報第七號に掲した皇族方御動靜（宮内省發表）は次の通りである

宮博忠王殿下

田浦附近にて御召車「トンネル」通過後墜落し最後の三等車を粉碎し多少の死傷者ありたるも殿下には幸ひにして御無事なるを得たり

竹田宮大妃殿下並に二殿下

靜岡縣沼津御用邸並に御滯在中の處三殿下共御異狀あらせられず御用邸も無事なる趣靜岡縣知事より來電ありたり同宮事務官よりも報告ありたり

閑院宮殿下並に寛子女王殿下

相州小田原御用邸御滯在中の處强震の爲御別邸大破寛子女王殿下には俄に避去あらせられ御遺骸は驅逐艦夕凪に奉安し殿下御附添ひ昨四日午前十時東京灣芝浦沖御着艦直に永田町御本邸へ御歸邸あらせられたり

北白川宮大妃殿下

箱根湯本に御滯在中の處强震にて假御座所破損したるも幸ひに御異狀あらせられず昨日閑院宮殿下の御一行と御同艦御歸京あらせられたり

大地は破れたり

聖恩あまねし

各新聞紙が報ぜし皇族方の御消息は次の通である

久邇宮御一家自動車に御起居

久邇宮殿下御家族御一同は箱根宮の下富士屋ホテルに御避暑中遭難遊ばされ寢るに家なく同ホテルの乘合自動車（十六人乘）内に一日夜以來今日迄御起居遊ばされて居るホテルは跡形なき迄に破壞してある

わかくれの皇族

御避暑中不慮の震災の爲薨去遊ばされたる皇族方は左の通りとうけたまはる

▲山階宮武彦王妃佐紀子女王殿下（二）鎌倉に薨去

▲閑院宮載仁親王妃寛子女王殿下（一）小田原にて薨去

▲東久邇若宮師正王殿下（一）小田原にて薨去同時に諫早御用取扱並に侍女即死

▲賀陽宮大妃殿下（七）鎌倉にて御負傷

閑院宮御一家は小田原別邸に御避暑中であり同別邸の崩壞と同時に御避難されたが逃げ遲れた寛子女王殿下は恐れ多くも御圧死を遂げられた、賀陽宮大妃好子殿下も御實子である山階宮妃佐紀子女王殿下と鎌倉御別邸に御靜養中だつたが大妃殿下は同御即死佐紀子女王殿下は御重傷の後御危篤に陷られ鶴沼なる東久邇宮妃、各若宮殿下も漸く御避難になつたが第二皇子師正王殿下は遂に御即死された

御頂宮御無事

御頂宮殿下は横須賀田浦間のトンネルで列車堰泛離去と傳へられたが幸ひ崩潰箇所はトンネルの前後のみであつたので直に御掘御救ひ申し上げ軽微の御負傷であつた

賀陽宮大妃御重態

賀陽宮大妃好子殿下も鎌倉で離去を傳へられたが御手當の結果御蘇生目下御重態ではあるが御生命は取り止められる樣子

山階宮妃殿下

山階宮妃佐紀子女王殿下は御即死遊ばされた、同妃殿下は御姙娠四ケ月であらせられた

茲に申すも畏き極みながら、大禍災後、帝都糧食の缺乏甚だしくなるや、攝政宮殿下には、赤坂の離宮に於かせられて、恐れ多くも御手づから玄米食を召し給ひ、罹災民の身上をお慮れみ思ひ下されたと拜聞す。御仁慈誠に感涙を催す。

左の報道は、この有難き御思召と、篤き殿下の御孝心とをうかゞひ奉る好個の記事である。敢て錄す。

攝政宮も玄米食

大地は裂れたり

赤坂離宮にあらせられる攝政宮殿下には日光田母澤御用邸に行啓中の兩陛下の御身邊をいたく御氣遣ひ遊

ばされ六日特に山脇栃木縣知事を御召玄米食にて御陪食を仰せつけの上御模様を詳細に御下問山脇知事は一々御奏答御安泰の旨言上した處御孝心深い殿下には全く御安堵遊ばされた御模様を拝したと(宇都宮)

第九章　急救、修覆への努力

第一節　糧食方策！

震災につぐに大火災を以てして、帝都を一擲に黒土の廢墟と化すや、忽ち糧食の缺乏を來し、罹災民のすべては飢に苦しみ出した。

政府は事急なるを見てとり、勅令を以て臨時震災救護事務局を設け、先づ總務部、食糧部、諸材料部、運輸交通部、飲料水部、通信運搬部、衛生醫療部、整備部、情報部、經理會計部の十部を設け、事務所を首相官邸に置き、早刻、急救の大活動にとりかゝつた。

先づ食糧部は四百五十萬圓を支出して、米五十萬石を買入れる事とし、諸材料部は三百萬圓を支出して假小屋十二萬戸分の材料を購入する事に決した。

その報道は次の如き大記事として罹災民を狂喜せしめた。

米五十萬石買入と小屋十二萬戸を建てる

食糧部

四百五十萬圓を支出し米五十萬石を買入れることに決し差當り埼玉縣下に於て七萬石買入れ板橋驛に廻送した上品川及び目白兩驛を中心とし市内に配給を開始する筈尚十萬石は大阪神戸方面に於て買入れ軍艦で品川沖まで輸送することになつた。

諸材料部

三百萬圓を支出し假小屋十二萬戸に要する材料を購入し至急市内に配信する計畫である所要木材十二萬石の中六萬石及び之が附帯材料(釘、繩、莫蓙)は大阪神戸で、五萬石は秋田青森地方にて調達し之を東京に輸送すべく當該地方長官及び大井監署長に無電を以て依頼した上係技術官を昨夜各地方に出張させた。

これより先、陸軍大臣の命令によつて、第四師團長は、軍用テントを軍艦につみ急遽東京に向はしめた。と共に、軍用天幕十五萬人分も同じく海路東京に輸送さるゝことゝなつた。

これと相前後して罹災民に同情したる近縣では、夫々糧食に、テントに、水に、乘物にあらゆる方法を以て、罹災地の急救につくした、斯くて、日を追ふて糧食は次第に關東の罹災地に集まり來つた。

次の諸報道はその狀況を雄辯に語る。

（其一）十四萬人分の軍用パン　十五萬人分の天幕も着く

四日午前十一時四萬人分の軍用パン到着既に罹災者に配付濟み更に五日及び六日には十萬人分軍用パン到着の筈農商務省持米の横濱にあるものゝ一部東京に廻送せらるゝ筈。兩三日後には十五萬人分のテントを供給し戒嚴司令官の指揮により設備せらるゝ筈。

大阪から政府持米來る

大阪商船シカゴ丸は四日午後大阪より政府持米を搭載品川沖に着せりこれより陸續廻米到着の筈。

（其二）食を滿載して軍艦到着

罹災民救恤の爲海軍省より電命を發した中、軍艦六隻は昨日中に食糧を滿載して品川へ廻航の豫定であると

（其三）食料は續々來

東京市にては東京府を通じて四日農商務省より官米六百石の供給を受けた外非常徴發令に依り官營米千五百四俵鹽百六十二俵を受取り各罹災民に配給した五日は大阪より到着の六十萬石埼玉群馬地方よりの一萬石を順次配給する豫定尚佐久間河岸倉庫の七千俵も配給してゐる。

（其四）食料船入航表

船名	米積載量	
アンデス丸	七、七〇〇石	四日午後六時大阪發
鳥羽丸	二四、〇〇〇石	五日同
千香丸	八、〇〇〇石	五日同
神隆丸	一〇、〇〇〇石	六日同
北京丸	二八、〇〇〇石	六日同
長砂丸	一四、〇〇〇石	七日同
銀山丸	五、六〇〇石	七日同
はばな丸	三九、〇〇〇石	八日同
明洋丸	四二、〇〇〇石	五日神戸
熊野丸	二、五〇〇石	五日同
大榮丸	一九、二四〇石	六日同
大連丸	一四、四〇〇石	六日同
神瑞丸	二二、〇〇〇石	六日同

急救修養への努力

まらつか丸	三六、〇〇〇石	七日同
興稱丸	四八、〇〇〇石	七日同
かろりん丸	三〇、〇〇〇石	
計	三四〇、二四〇石	

糧食續々來

九月六日　陸軍省公表

糧食左の如く到着の豫定

一、小倉師團に於ては九月六日朝糧食を門司にて積込をなす

二、北海道師團より發送せる米二百五十俵は軍艦千早にて九月四日午後五時小樽港を出帆す
　尙米十七百五十俵其の他食料品約三百噸は貴船丸にて同港を出帆す

三、仙臺師團は繃帶藥品等を九月五日午後五時五十分發送す

軍艦輸送の食料品

繃帶	五、〇〇〇貫	
堅パン	二、〇〇〇貫	
治療材料	三八箱（十七）	天龍艦　横濱着

毛布	百枚		
繃帶	二〇、〇〇〇貫	利根	六日　横濱着
堅パン	三〇、〇〇〇貫		
繃帶	九、〇〇〇貫	出雲	同
精米	一〇、〇〇〇貫		
繃帶	九、〇〇〇貫		
精米	一八、〇〇〇貫	岩手	同
繃帶	五、〇〇〇貫		
精米	二〇、〇〇〇貫	八雲	同
繃帶	三、〇〇〇貫		
米	四〇、〇〇〇貫	金剛	横濱着

神田川二千俵殘存

七日早朝府市宛到着した米は一百俵餘である因に神田川倉庫に災害を免れた殘存米二千俵を發見したを發表した

米國から多數の食料太材被服積出

米國政府より在京米國大使ウッヅ氏に達した公報によると米國政府は東京の大震災救助の爲め米一百萬ポンド大豆一百萬ポンド倒多數の建築材料及被服等を日本へ向け送り出した米國御用船一隻食料品藥品、寢具、テント其他一般救助材料を滿載九月七日東京へ向け出發すると

大地は壞れたり

米國東洋艦隊所屬ブラックホーク號其他數艦、世界各地に無線電信聯絡をとる爲め日本近海に出動を命ぜられた

食料藥品を滿載し米國艦隊到着

食料品及藥品を搭載せる米國アジア艦隊所屬驅逐艦一隻昨夜九時半品川沖に到着他に四隻も亦横濱に到着した、これら米艦は東京横濱より退去を希望する米人を收容して米國行き汽船に乘移らしむる筈で既に今朝若干名は退去した

發送した米量

九月六日迄に發送の米量左の如し

發送地方			
大阪	九二、七一二石	栃木	七、三六八石
福島	一七、〇〇〇貫	埼玉	一六
山形	一三二	茨城	五七九
新潟	一、六七二	千葉	七二〇
群馬	八二	鹿兒島	四〇〇
北海道	五、〇〇〇	石川	三〇〇
福井	二二〇	愛知	九、六〇〇
秋田	……	岐阜	……
關東州	三、五七〇	朝鮮	一〇、〇〇〇
計	一三二、三七一	外に政府米倉庫在米	一一、四九〇石

九月六日午後四時發行、震災救護事務局情報部報告、公報第七號所載五日正午現在の糧食狀態は次の通りである。

◎東京方面食糧品到着

精米	五百七十二石	
玄米	五千石	
バン	二萬七千八百貫	
右ハ大阪ヨリ扶桑ニテ品川着		
バン	十萬貫	
右ハ宇品ヨリ商船ニテ東京着		
精米	七百四十石	
野菜	多數	

右ハ大阪市ヨリ東京市ヘ寄贈五日未明荷揚ヲ爲セリ

大地は壞れたり

精　米　三千五百七十石
繰　詰　一五、〇〇〇
右大迫ヨリ四日横浜東京着ノ確定
精　米　一〇、〇〇〇石
右仁川ヨリ四日横浜東京着ノ確定
立　米　一〇〇、〇〇〇俵
繰　詰　多数
右五日ヨリ羅次田場へ着ノ見込
以上ノ外大阪ヨリ軍艦ニテ輸送ノ食糧品材料左ノ如シ
鑑　詰　二萬貫　香港　五日　品川着
毛布　三五、〇〇〇枚
カンパス　二、六五〇貫
糸　三、五〇〇貫
ロープ　三〇〇、〇〇〇本
毛布　八、〇〇〇枚　金剛　品川着ノ見込
毛布　一〇、〇〇〇枚
テント　五〇
ローソク　多数　室戸　品川着ノ見込
右の外東京市保管櫻橋倉庫在庫米八千俵あり昨日より配給しつゝあり政府米深川倉庫焼殘りの分千二百石は東京市内に五千萬斤あり必要に應じ何時にても配給のことに專賣局と打合せ府市へ通知せり

蠟燭は陸軍に在庫品多きを以て配給方交渉の筈なり

◎横濱方面

パン　十萬貫
精　米　六百二十八石
右八横濱着陸軍受取
精　米　三百石
パン　三萬四千貫
右八大阪ヨリ軍艦神戸ニテ横濱着
精　米　八百石
立　米　千五百石
千葉鰯　千八百貫
鑵詰肉　二千三百貫
梅干　三千貫
澤庵　一五〇貫
右六日名古屋出帆七日横濱着
精　米　二、三〇〇石
立　米　三、〇〇〇石
右横濱着ノ確定

大地は壊れたり

右ノ外大阪ヨリ輸送ノ食糧品材料左ノ如シ

鑵詰	五、〇〇〇貫	天鵞絨	横濱着	
堅パン	二、〇〇〇貫			
治療材料	三八梱			
天幕	十七枚			
毛布	百枚			
鑵詰堅パン	二〇〇、〇〇〇貫	利根	六日横濱着	
鑵詰堅パン精米	九、〇〇〇貫	出雲	同	
鑵詰堅パン精米	二〇、〇〇〇貫			
鑵詰精米	一八、〇〇〇貫	岩手	同	
鑵詰精米	五、〇〇〇貫			
鑵詰精米	二〇、〇〇〇貫	八雲	同	
鑵詰精米	三、〇〇〇貫			
鑵詰	四〇、〇〇〇貫	金剛	横濱着	

右の外横濱に在庫する政府米燒殘りの一萬石あり昨夜神奈川縣知事へ引渡し市内に配給せしむることゝせり

尚同市に在庫する鹽六百萬斤あり必要に應じ配給することに決定通知を發せり

食料品入航一覽表

船名	總噸數	米積載量	所有者			
アンデス丸	七、七七二噸	七、七〇〇石	大阪商船	四日午後六時大阪發		
鳥羽丸	六、九九五噸	二四、〇〇〇石	日本郵船	五日同		
千香丸	一、一七五噸	八、〇〇〇石	栗木商事	五日同		
神藤丸	三、一七五噸	一〇、〇〇〇石	岸本	六日同		
北京丸	三、〇一一噸	一八、〇〇〇石	大阪商船	六日同		
長砂丸	二、五四〇噸	一四、〇〇〇石	大阪商船	七日同		
銀山丸	一、七〇一噸	五、六〇〇石	橋本汽船	七日同		
はな丸	五、八二二噸	三九、〇〇〇石	大阪商船	八日同		
明洋丸	五、四四四噸	四二、〇〇〇石	T、K、K	五日神戸		
熊野丸	四、七〇二噸	二、五〇〇石	日本郵船	五日同		
大榮丸	二、九二四噸 ?	一九、二四〇石	日本郵船内田	六日同		
大連丸	二、二三七噸	一四、四〇〇石	岸本	六日同		
神瑞丸	三、九八二噸	一二、〇〇〇石	岸本	六日同		
まらつか丸	五、三七一噸	三六、〇〇〇石	國際汽船	七日同		
興稱丸	六、七八〇噸	四八、〇〇〇石	國際汽船	七日同		
かろりん丸	四、一〇六噸	三〇、〇〇〇石	國際汽船			
大阪		一二六、三〇〇石				

大地は裂れたり

神戸　二二三、九四〇石
計　三四〇、二四〇石

之と共に、水道の破壊斷水に伴ふ飲料水の缺乏は、市當局に於て鋭意之が復舊供給に努めつゝあると九の記事に於て推せられる。

東京市に於いては水道の被害の復舊について目下鋭意努力しつゝあり目下の狀況にては羽村入口其他水道の復舊工事は多分明三日正午迄には工事が完成し下谷、淺草、深川、本所其他の下町方面には給水を開始し得可し

山の手方面の給水に就ては吹揚げポンプに要する電力供給の方法無きを以て給水開始の時期を豫定し難き遺憾とする人今二日午後三時永田市長及益田電氣局理事は東京電燈若尾副社長と臨時震災救護局に於て會見し電力供給には全力を擧げて工事に着手する筈なるを以て至急復舊工事を竣成す可く其時期に就ては繰延する筈

三日以後、實施された飲料水の配給方法は次の通りである。

避難者集合地及び飲料水を得られない場所に應急配水の方法として三日より撒水車十臺を配置し更に四日より陸軍用貨物自動車四臺を增配し四斗樽を滿載して飲料水の配給につとめてゐる

之と共に糧食配給の組織を次の如く樹てゝ發表した。

食糧配給の司令部を田端、芝浦、龜戸及び宿各陸軍廠に設け芝浦司令部の下に兩國支部を設く

其受持區域左の如し

龜戸　本所、深川、南葛飾郡
新宿　牛込、四谷、豐多摩郡
兩國　淺草、神田、日本橋
田端　下谷、小石川、本郷、南足立郡、北豐島郡
芝浦　麹町、赤坂、麻布、芝、京橋、荏原郡

—備考—　芝浦は埋立地第一號地

つゞいて左の分配實施案を作り、六日より實施に決した。

明日より食糧配給司令部管理の下に左記員數の人夫及貨車にて食糧運搬を行ひ各區及郡の中心地に分配す

一、貨物自動車八十五臺
　内譯　市四十臺、隣軍十五臺、徵發三十臺
二、荷馬車百臺　但し徵發のこと
三、荷車千臺　但し徵發のこと
四、人夫　毎日二千人市に於て調達のこと

右配給狀態監視の爲め乘用自動車二十臺を徵發す

之より先き、戒嚴司令部では、市内に左記廿六ケ所の食糧配給所を設置して、罹災者へ食糧の分配

を行ふの手段を決し、之を發表した。

これにて、罹災者に於ける糧食問題は一先づ解決を見ること、なつた。

◆芝浦配給司令部　麻布町區半藏門麹町區高等小學校▲京橋區築地本願寺▲芝區勞資協調會▲赤坂區役所▲麻布區役所▲任原郡品川驛前廣場、荏田、大崎

◆芝浦配給司令部兩國支部　日本橋區水天宮横▲神田區一ッ橋高等小學校▲淺草區新谷町元車庫前

◆田端配給部同隅田川支部　本所區役所▲小石川區役所▲下谷區東京自治會館▲北豐島郡坂橋驛、三河島驛、田端驛、隅田川驛▲南足立郡北千住

◆新宿配給部　四谷區大木戸新宿御苑前▲牛込區市ヶ谷小學校▲豐多摩郡中野驛、澁谷驛、新宿驛

◆龜井戸配給部　本所區國技館▲深川區元岩崎邸清水公園▲南葛飾郡龜井戸驛

第二節　非常徴發令公布

―附暴利取締令―

東京府市一帶をその地域とする戒嚴令の布かれると相前後して、凶變時に處する非常徴發令は、勅令第三九六號を以て九月二日公布せられた。

その全文は左の如くである。

非常徴發令

第一條　大正十二年九月一日地震に基く被害者の救濟に必要なる食糧、建築材料、衛生材料、運搬具其の他の物件又は勞務は內務大臣に於て必要と認むるときは非常徴發を命ずることを得

第二條　非常徴發は地方長官の徴發書を以て之を行ふ

第三條　非常徴發を命ぜられたるもの徴發の命令を拒み又は徴發物件を藏匿したるときは直に之を徴收することを得

第四條　徴發物件又は勞務に對する賠償は其他市場に於ける前三年間の平均價格に依り難きものは評價委員の評定する所に依る

第五條　非常徴發命令を拒み又は徴發物件を藏匿したるものは三年以下の禁錮又は三千圓以下の罰金に處す徴發し得べき物品に關し當該官吏員に對し申告を拒み又は虛僞申告を爲したる者亦同じ

第六條　徴發物件の種類賠償の手續評價委員の組織其の他本令の施行に必要なる規定は內務大臣之を定む

附則

本令は公布の日より之を施行す

大地は裂れたり

つづいて内務省號外を以て、非常徴發令に依つて徴發し得べき物件を指定した。時に九月三日。

内務省令號外

第一條、大正十二年九月二日、勅令第三九六號非常徴發令に依り、徴發し得べき物件左の如し。

(一)食料品(二)飲料(三)薪炭、油、其他燃料(四)家具(五)建築材料(六)藥品其他の衛生材料(七)船車其他の運搬具(八)電線(九)勞務

追而右違反したるものは勅令の規定により處罰せらる

九月三日

ついで政府は、この古今未曾有の大震災に乗じて、暴利をむさぼり、私利を營み、私腹を肥さんとする不良商人輩の出現に對して、之を抑へる爲に緊急勅令を以て暴利取締令を公布した。

暴利取締令

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ生活必需品ニ關スル暴利取締ノ件ヲ裁可シ之を公布セシム

御名御璽

大正十二年九月六日

摂政　名

内閣總理大臣
各省大臣

震災に際し暴利を得る目的を以て生活必需品の買占若くは寶惜みを爲しまたは不當の價格にて其の販賣を爲したる者は三年以下の懲役または三千圓以下の罰金に處す

前項の生活必需品の品目は命令を以てこれを指定す

附則

本令は公布の日よりこれを施行す

ついで農商務大臣は、暴利取締令による生活必需品を指定して之を公布した。

暴利取締品目

(一)食料品(二)炊事具及食器(三)薪炭、油、其他の燃料及照明用品(四)船車その他の運搬具及これに使用する消耗品(五)建築材料(延焼建具及家具を含む)及建築用具(六)藥品その他の衛生材料(七)綿毛絲綿毛布、及その製品(八)紙類(九)梱包用材料(十)履物雨具及掃除用品(十一)鍋釜その他の文房具

第三節　諸官廳、官衙、公署の活動

罹災、水災の爲めに、或は倒壞を見、或は燒失し、或はその用を爲さぬ狀態に陷つた諸官衙では、急遽假事務所を設定して、緊急事務にとりかゝつた。

その假事務所、又は移轉先は次の如くである。

(A) 官廳假事務所

文部省(高等師範學校內)▲大藏省(丸の內日本興業銀行內)▲內務省(內相官邸)▲臨時震災救護事務所同▲遞信省(中央郵便局內)▲特許局(燒跡天幕內)▲馬政局(農相官邸)▲帝室林野管理局(正門受付)▲警視廳(日比谷府立第一中學校)▲日比谷警察署(馬場先門派出所)▲錦町警察署(商大別館)▲外神田警察署(和泉橋金網亭內)▲愛宕警察署(增上寺內)▲久松警察署(自署裏庭)▲堀留警察署(東京驛前)▲新橋橋警察署(坂本公園內)▲深川區役所(岩崎邸內)▲農商務省(農相官邸)▲鐵道省(東京驛前)▲會計檢査院(燒跡正門)▲印刷局(衆議院事務所)▲稅務監督局(四谷稅務署)▲築地警察署(海軍參考館)▲北紺屋警察署(自署庭)▲麹町警察署(自署前)▲西平野町警察署(自署天幕內)▲麹町區役所(牛藏門外麹町高等小學校內)▲神田區役所(一ッ橋高等小學校內)▲日本橋區役所(水天宮四ツ角より約一丁土州橋側モスリン會社)▲京橋區役所(西本願寺內)▲芝區役所(芝公園協調會內)▲下谷區役所(上野公園自治館)▲本所區役所(玉枝館)

(B) 各警察假事務所

麹町(牛藏門外麹町女學校內)▲飯町(一ッ橋巡査派出所)▲西神田(今川小路巡査派出所)▲外神田(內國通運會社構內(和泉橋際)▲久松(署燒跡)▲堀留(日本橋北詰品川裏河岸)▲新場橋(坂本公園內)▲築地(海軍參考館)▲北紺屋(鍛冶橋巡査派出所)▲月島(月島三號地)▲愛宕(芝增上寺)▲上野(公園美術協會)▲坂本(金曾木小學校)▲象潟(岩崎邸內)▲日本橋(橋場町三七今井喜八氏方)▲南元町(向柳原衛試驗所)▲七軒町(上野帝室博物館)▲相生(兩國橋麹)▲太平(龜戸署)▲原庭(本所表町久世子爵邸)▲向島(地藏橋際)▲西平野(同署燒跡前公園內)▲扇橋(砂町小學校側の寺)▲洲崎(洲崎消防出張所)▲水上(署燒跡)▲小松川(小松署前中川館)

又、憲兵隊は、臨時配備所を、市內左記各所に設けて、急救と異變に備へる事になつた。

臨時憲兵配備所

麹町分隊(大手町)▲造兵廠の駐所(小石川元砲兵工廠內)▲上野分隊(美術學校)▲千住分駐所(其地)▲兩國分駐所(劇技館內)▲龜戸同(其地)▲小松川同(其地)▲芝分隊(芝公園十七號地手島幸六)▲品川分駐所(品川町北品川三業組合)▲川崎分駐所(川崎町郡役所東隣)▲赤坂分隊(其地)▲目黑分駐所(目黑火藥廠內)▲玉川同(玉川村電車事務所)▲下谷分遣所(其地)▲早稻田分駐所(下戸塚早稻田大學內)▲中野分駐所(中野町三、九六六飯田又衛門方)▲淀橋同(角筈新町一六一名古屋彌一方)▲荻窪同(荻窪村一七五內田方)▲板橋分隊(其地)▲大塚分駐所(兵器支廠內)▲池袋同(其地)▲赤羽同(岩淵町▲王子同(其地)▲立川分遣所(其地)▲所澤分遣所(其地)

大地は壞れたり

又、警視廳は、五日左記の通り檢問所を開設して、治安と警戒に備へた。

檢問所の開設

傷車場◆印は當分開設せず

品川　◆新橋　◆東京　◆上野　日暮里　田端　赤羽
池袋　新宿　飯田町　◆兩國　◆淺草　◆押上
陸路　要　所

入ッ山下、五反田、目黒、恵比須、渋谷、神宮裏、青梅街道入口、目白橋、大塚ガード下、巣鴨驛ガ一下上、駒込橋、千住大橋、逆井橋

市　内　要　所

新橋(芝口)、櫻田本郷町、虎の門、赤坂見附、四谷見附、飯田橋、市ケ谷見附、水道橋、御茶の水橋、松住町、萬世橋、和泉橋、淺草橋、兩國橋、新大橋、三宅坂

罹災傷病者の救護の爲に設けられたる救護班の位置は次の通りである。

△麹町、日比谷公園、府立第一中學校内△芝、芝公園△　郷、本富士署△牛込、神樂坂署△下谷、上野公園△淺草、觀音堂橋有馬伯氏淺草橋△淺草△淺草橋新谷町△本所、御藏橋派出所△深川、深川一岸町△龜戸方面、場所未定△向島方面、牛島小學校△寺島方面、寺島役場△南千住方面、南千住署△巣鴨方面、巣鴨署△小石川、第五中學校

尙、陸軍に於ては、左記の地に移動救護班を開始して、傷病者の救護につとめることになつた。

▲青山練兵場(陸軍大學校)▲芝增上寺▲海軍大學▲日比谷公園▲三宅坂第一衛戍病院▲九段陸軍々醫學校▲上野公園▲深川公園▲深川の岩崎邸▲兩國驛北側▲向島三圍社

此外、市民の自發的に組織した、諸種の治安、急救、警固、修繕、奉仕團體は數知れぬ有樣である。

斯くの如くにして、大破壞後の帝都は、あえぎあえぎにも、新しく活きるの努力に、眞劍であるのである。

第四節　陸海軍の活動!!

一

關東戒嚴令司令官、福田陸軍大將、同野間口陸軍中將、共にその專門的敏活、大膽、緻密の策謀と實行とを以て、よくこの大異變に備へた。

この外所謂航空隊、千葉騎兵隊は眞先に駆けつけ、近衛、第一兩師團と共に、危險の裡に奮力その任務をつくした。

この外、各方面の軍隊陸續と罹災地に向けて集中し、海軍本來東京灣に集中、夫々其の任務に忠實專心である。

今公報によつて、その狀況を示せば左の如し

大地は壞れたり

(A) 陸軍の部

(I) 軍隊到着豫定（九月五日陸軍省公表）

第二師團の工兵大隊及衛生部員（約百名）四日朝仙臺を出發す
第十三師團の歩兵二聯隊、工兵一大隊は四日正午頃先頭部隊を以て高田を出發す
第九師團の工兵大隊及衛生部員は四日午後六時より十二時の間に金澤を出發す

既到着の兵力

既に發表せる佐倉聯隊、甲府聯隊、習志野騎兵旅團、下志津、國府臺、砲兵諸隊及歩騎砲工、航空各學校教導隊並に士官學校生徒隊の外既に被災地域内に到着して警備に就きつゝある部隊左の如し

1、第十四師團の歩兵二聯隊、工兵一大隊
2、第十五師團の歩兵二大隊、工兵一中隊

此の部隊は目下小田原附近に出動せり尚重砲兵二聯隊更に同方面に到着する筈

一、名古屋師團の通信部隊は九月五日神戸を出帆せり
二、同師團より第一救護班は九月四日夕名古屋發、信越線經由東京に向ふ第二救護班は五日夕、第三救護班は六日出發の筈なり
三、京都師團より派遣せられたる救護隊及通信隊は九月五日未明京都發神戸より海路にて品川に向へり
該隊は六日朝品川到着の後にして多數の材料、食糧、飲料水を携行す
四、廣島師團より派遣する電信聯隊は五日夜半より廣島を出發し東京に向へり
五、金澤師團歩兵第六旅團は九月五日夕より夜半に亘り金澤を出發し日暮里に向ふ
六、弘前師團工兵隊及救護隊は五日夜上野驛に到着の豫定なり
七、名古屋師團の工兵隊は九月五日夕名古屋を出發す

(B) 海軍の部

(I) 海軍の活動

一、三日横濱到着の軍艦五十鈴は即時陸戰隊を上陸せしめ大に横濱の民心を安んず、天龍、四日横須賀着の上搭載中の糧食天幕等を揚陸す、目下横濱に在泊して一般警備及救護作業に任ずる艦船左の如し
山城、春日、五十鈴、天龍
二、品川沖到着の艦船は三日横須賀より水船八隻、驅逐艦一隻、四日驅逐艦三隻、五日驅逐艦二隻にして驅逐艦は何れも消毒品を搭載し來れり

右水船は東京市に引渡し其他の軍船は軍隊の東京横濱間輸送並に深川越中島罹災民輸送等をなし傍通信聯絡に任じつゝあり

三、特務艦鹿州は清水港より小田原に糧食輸送並に小田原の罹災者の清水港に輸送の目的を以て四日夜品川発清水港に向へり

四、朝鮮西岸に在りし聯合艦隊は既に佐世保及呉に到着し兩軍港及大阪方面の物資搭載中

軍艦球磨、多摩、大井及特務艦神威は大阪に在り

五、軍艦扶桑は四日呉發大阪にて陸軍糧秣廠の糧食搭載六日頃横須賀着の豫定

特務艦野島は四日呉にて成るべく多數の短艇を搭載し尚ほ德山にて自動車ガソリン油を搭載して品川に向ふ軍艦利根は三日、出雲は四日、吾妻は五日、何れも治療品救護班、糧食等搭載出發、本日より相踵いで横須賀及品川に到着の筈

特務艦室戸は品川に輸送の爲天幕三千張毛布一萬及糧食類を舞鶴にて搭載中

(2) 五日海軍省公表

海軍省は極力各鎮守府司令官に無電を以て糧食輸送及罹災に必要なる天幕、治療品救護班員の輸送及通信聯絡等に任じつゝあるが横須賀警備司令官の行方は五日正午迄不明にて警備未だ完全ではない

いが前記輸送には何等の支障はないと云つて居る

軍艦五十鈴は三日横濱に到着陸戰隊を上陸せしめ横濱の警戒をしてある天龍は糧食天幕を陸揚して居る

斯くて關東罹災地一帶には周到嚴重なる軍隊の警固保護する所となり、罹災民の心は糧食の補給と共に次第に安定に歸つてゆく……。

第五節 二緊急勅令の公布

―債券債務、流言浮説に關して―

罹災後の人心安定の必要上よりする二大緊急勅令は、六日を以て公布即日施行された。即ち次の通りである

(第一)災害地に於ける一切の債券債務及び賃借關係の權利義務延長

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八

大地が揺れたり

關東地震ノ被災

條第一項ニヨリ私法上ノ金錢債務ノ支拂延期及手形等ノ權利保存行爲ノ期間延長ニ關スル件ヲ裁可シシコレヲ公布セシム

御名御璽

摂政宮

大正十二年九月六日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第　號

第一條　大正十二年九月一日以前に發生し同日より同年同月三十日迄の間に於て支拂をなすべき私法上の金錢債務にして債務者が東京府、神奈川縣、靜岡縣、埼玉縣、千葉縣及震災の影響により經濟上の不安を生ずる虞あれば勅令を以て指定する地區に住所又は營業所を有するものについては三十日間其支拂を延期す但債務者が其の地區外に他の營業所を有する場合に於て該營業所の取引に關する債務については此の限りにあらず

震災の影響により必要あるときは勅令の定むる所により前項の規定は大正十二年十月一日以後に支拂を

爲すべき私法上の金錢債務につきこれを適用することを得、前項の規定中三十日の期間はこれを延長することを得

第二條　左に掲くる支拂については前條の規定を適用せず

一、國庫縣其の他の公共團體の債務の支拂

二、給料及勞銀の支拂

三、給料及勞銀の支拂の爲にする銀行預金の支拂

四、前號以外の銀行預金の支拂にして一日百圓以下のもの

第三條　手形その他これに準ずべき有價證券に關し大正十二年九月一日より同年同月卅日迄の間に第一條に規定する地區に於て權利保存の爲に爲すべき行爲はその行爲を爲すべき時期より卅日内にこれを爲すに因りてその効力を有す

第一條　第二項の規定は前項の場合にこれを準用す

附則

本令は公布の日よりこれを施行す

（第二）流言浮説取締令

大地は裂れたり

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條第一項ニ依リ治安維持ノ爲ニスル罰則ニ關スル件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名御璽

摂政名

大正十二年九月六日

内閣總理大臣

各省大臣

勅令第　號

出版、通信其の他何等の方法を以てするを問はず暴行、騒擾其の他生命身體若くは財産に危害を及ぼすべき犯罪を煽動し安寧秩序を紊亂するの目的を以て治安を害する事項を流布しまたは人心を惑亂するの目的を以て流言、浮説を爲したる者は十年以下の懲役若くは禁錮または三千圓以下の罰金に處す

附則

本令は公布の日よりこれを施行す

尚右、二緊急勅令と關連して左の勅令が發せられた。

官吏俸給前拂勅令

勅令第四〇六號

會計規則其他の收入支出に對する命令の規定に對する特例を設くるの件震災に基く特別の事情により必要なる場合に於ては大藏大臣は會計規定其他收入支出に關する命令の規定に對し特例を設くる事を得

第六節　通信、交通機關の修復

今回　災害中、他的に致命の損傷を受けたものは、一切の通信機關と、交通諸機關とであつた。帝都は日本の樞要、素より通信、交通の中軸を以て任ぜしところ、火、震災一朝にしてそのすべてを滅却するや、あらゆる支障忽ち來り、その混紛紛、名狀すべからざる狀況を呈した。

汽車の不通！電車　停頓！

電信、電話の不通！

郵便物の不着！

大地は壊れたの

急救復旧への努力

これ等が一時に、家なく、財なく　食なき數百萬の人の上に、どつと掩ひかぶさつたのであるから事で
ある。

郵便局は休止して局内に郵便物山積し、只貯金の非常拂係のみ不眠不休の活動をつゞけてゐる。」
電信局亦た滅し、罹災民の安否を故郷に傳へる術もない。
鐵道は破壞して、汽車動かず、空しく昂軀を敗殘の驛に横へ、風雨の打つに委する有様！
市内、郊外の電車亦然り！
斯くて人々は罹災地を去るに去られず、音信を絶せんとしても通ぜられず、刻々迫り來る飢餓を甘受し
たければならなかつた。
此の間の罹災民の心理は、實際その中にあつて、つぶさにその一切を嘗め味はつたもので無ければ、分
り得ぬ悲痛、深刻たものであつた。
而もこれら通信交通機關の復舊は、何日の日に期し得らるゝかほとんど不明である。實に悼ましき限り
であつた。
併し乍ら、二日、三日、四日、五日と經過するうちに、漸くその一部が通ずる樣になつて來た。
即ち、六日より中央郵便局は罹災民の無料電報を取扱ひ始め、七日よりは殘存郵便局に於て一般郵便物

の取扱を開始した。」
又交通路の方は、その各線一部宛の復舊運輸が、刻々公揭せられたし、罹災民は潮のよせる如く、東京
近接の各驛へと押しよせた。
海路交通亦漸く開け、陸上との連絡をはかるまでに進んで來た。」
斯くして災禍一週日を經、漸く内外一部交通路の復舊を見た次第であつた。」
けれども、貧弱なる復舊交通機關の運輸に對して、無數の避難民である、我も我もと先を爭ふて乘車口
乘船口に、死もの狂ひの爭鬪を演出する、亦已むを得ぬ次第であつた。
試みに、今五日の鐵道省調査に係る退京者の數を見るに、五萬人と稱する。六日はその倍數に及ぶ迅
であると云ふ。
これらは皆悉く無賃乘車であること言ふ迄もなかつた。」
從つて隨所に、非常な混雜を演出し、小悲劇は茶飯事の如くくりかへされゆくのであつた、殊に乘車口
の混雜に限らず……。
今左にその一斑を新聞記事によつて示さんに、」

列車の大混雜罹災者さへ生じた

大地は壞れたり

避難民の無賃乗車をゆるしたゝめ各鐵道の混雜は眞に言語に絶する有様で、歸人で輻輳する上り列車でさへ長野より日暮里まで二十八時間を要する始末にて、越、東北線の、點日暮里、中央線の起點新宿、いづれも屈強の壯漢か必死の努力を以てするも容易　乘車の目的を達する能はず各列車の屋根はもとより兵兒帷々窓わゝにむすんで窓外に腰掛けを作りブラ下がるもの、鈴なりの狀を呈し車輛の連結箇所には必ず二三人しがみつきをる狀態で、中には車軸の下に這ひ込み車軸に取りついても歸りをいそがんとするものさへある、殊におどろくべきは五日午後日暮里を發せし列車内　て全く人　みのため混亂窒息に至れるものがあり大宮、取り降せる位であると、されば列車の速力は牛歩の如く遲々何時間かゝるか見當つかず從つて途中にて食糧を求めんとするも奪ひがちで、手に入るもの　幾ばくもなき有様だから必ず途中の食糧を用意する必要がある。これ、決して誇張でも誇大でもない、事實はむしろこれ以上であることを思はねばならぬ。

最後に、東京を中心とする主要、鐵道線の九月二日正午現在と、それより三日を經たる五日現在とを、列記して參考に供する

列車運轉狀況（九月二日正午現在）

東北本線　日暮里、川口町間四日開通ノ見込ミ、川口町以北無事

常磐線　北千住、我孫子間ハ四日中ニ開通ノ見込、我孫子取手間ハ開通不明、取手以北ハ無事

中央線　飯田町、八王寺間ハ本日開通ノ見込、八王寺以西ハ未だ、東京飯田町間ハ不明（被害甚大）

總武線　龜戸、稻毛間運轉中、千葉四ツ街道間兩三日中に開通ノ見込、大網、勝浦間無事、四ツ街道銚子間ハ無事

東海道及山手線　（沼津以西ハ平常ノ通リ）東京、品川間不明、品川川崎間四日中ニ開通ノ見込、川崎以南ハ不明（被害甚大）横須賀線不明（被害甚大）田端品川間本日開通ノ見込（汽車、池袋、赤羽間本日開通ノ見込（汽車）

同上五日現在（附時間割表）

東海道線　東京品川間不通、品川鶴見間開通（汽車運轉）、鶴見御殿場間不通、御殿場以西開通、横須賀線、熱海線、横濱線不通

中央線　東京飯田町間不通、飯田町飯瀬鳥澤間不通、鳥澤以西開通

山手線　品川田端間、池袋赤羽間開通（汽車運轉）

東北本線　上野日暮里間不通、日暮里以北開通（列車は田端より運轉）

信越線　右同（列車は日暮里より運轉）

常磐線　全通（右同）

總武線　兩國橋龜戸間、五井江見間、蘇我大網間不通、其の他は開通

鈍線　東武鐵道淺草粕壁其の他は開通、東上線支障なし、駿豆鐵道線不通

關西方面は信越線篠井より中央線塩山若くは直江津より北陸線糸魚川にて到達するとを待、地方行脚災者にかぎり無賃輸送の取扱ひをなす（五日東京鐵道局情報）

列車發車時間（田端を日暮里驛より）

東奥線（田端發）午前五時十二分日光、六時十二分青森（奥羽線廻）、八時十二分日光福島、九時廿七分鹽釜、十時卅二分日光、十一時五十三分日光青森、午後一時八分青森行急行、二時十二分日光福島、三時卅七分日光白河、六時八分青森、六時四二分青森、八時八分、青森急行（奥羽線廻）、九時十八分青森（奥羽線廻）、九時卅二分新潟行（岩越線）十一時十八分青森

常磐線、日暮里發）午前六時廿七分青森、六時四七分成田、八時七分水戸、九時十二分一ノ關、九時五七分成田、十時五七分水戸、十一時四七成田、午後十二時卅二分原町、一時四七分成田、三時十二分富岡、四時四二分水戸、五時五七分ヤ、六時五七分成田、七時五七分水戸、九時七分水戸、十時五分青森急行、十時卅九分取手

中央線（飯田町新宿間）午前十時卅分飯田町發、午後一時卅分同、午前十一時卅分新宿發、午後三時卅分同

中央線（新宿發奥瀬行）午前八時卅分午前十時十二分各驛停車、午前十一時卅分午後二時十八分荻窪以外電車驛不停車

東海道線（品川發東神奈川行）午前七時、同八時卅分、同十一時卅分、午後一時卅分、同三時卅分

山手線（品川田端間）は午前六時より午後五時半頃まで往復各十八回づつ池袋赤羽間午前七時より午後三時半頃まで往復五回宛

第十章　廢都探訪

第一節　九段坂の上に立ちて

余は今、九段坂の上に立つてゐる。

黑煙と降灰と塵と汗にまみれて、鼠色と化けた白詰襟皮服には、ボタンがあつたり無かつたり、白靴は連日の活動に全く黑と變じて、ズボンの下部をぼかしてゐる、頭髮は蓬々、銅鑼はムシヤクシヤ、銅色にやけた顏の裏へ顏の奥に異樣に光る眼許りが我が生命を示す。

時に大正十二年九月四日正午ごろ。

右肩から左腋にかけては「關東壊滅大震災實記」著者とにじませた晒木綿肩章を帶び、左肩から右腋へは、原稿紙書板をかけた姿、正に起稿後第三日の著者であつた。

四日間に亘りし大震災後の大火災、漸く收まり、餘震亦遠ざかつて、人々初めて落つき始ふの餘裕を見

大地は裂れたり

出し得た。

併し乍ら所々の餘燼は、普通時の火災よりはげしき勢を見せ乍ら、濛々と黑煙をあげ、眞紅の火焰を見せてゐる、けれどもそれらは今は罹災民の一顧だに與えぜぬ所、又その火は延燒すべき四隣の何者をも有せざるに於て極めて安全なものであつたのである。

余は無量の感慨に、坂上に突つ立つたまゝ、暫しは身じろぎさへなし得なかつた、只見る、見渡す限りの黑色焦土―これが三日前まで、東洋一の東京と、その三百年の文化を中外に誇り來つた、我が帝都そのものなのか―

あはれ、あはれ！

この、一朝にして黑色の廢墟と化した帝都に對して、余は、之を弔ひ悼む一言の恰好な辭を知らない。

荒涼！寂だし。空漠！當らず。黑色の沙漠！戰場！地獄!!

あゝ―あゝ!!あゝ!!!

余は涙さへ出ぬ思ひに、その在りしHの殷賑と繁華とを忍ぶ大東京地圖を開いた。そして今、我が眼前に展開された現實の此の荒廢の黑土と比べ乍ら、今よりせんとせる廢墟探訪のプログラムに思ひ入つた……。

比べゆけば、今更乍ら長嘆息の外なき許りなるその異變々化の甚だしさに、又しても手にせる地圖を捨てゝ超然たる有樣である。

「オヽ、あれが十二階だツ」

其の半を折られた如く倒潰の災厄に遭つた敗殘の姿を、遮るものとて無き一面の焦土の彼方に見せ乍ら、悲しみ悼む如く孤の姿態につつ立つて居る淺草十二階のさま、之が繁華殷盛を誇り來つた淺草の王城とどうして思はれよう！而もその變化は僅旬日を出でなかつたとは！

感深き眼を順次に此方へとまはしゆけば、一切の建築物を火に滅された空虛の街跡には、手にとる如く、近くに見える偉大の一物！

「オヽ！これがデパートの王城、三越の形骸だ。」

一昨々日までは、その二つの入口より、鯨の潮を吸ふが如く都鄙の人士をおびき入れ、夕方近き出口には人の流れをふき出して居たその三越が、かうしてガランドウの姿を、氣の抜けた木偶の樣にケロリカンと焦土の上につつ立たして居るのを目睹しては、又しても感、切なるを覺えるのであつた。

「あゝ！あれが兩國國技館の大鐵釜の遺骸だ！」

眼を轉じ、首をめぐらす毎に、新しき驚異として臨面もなく眼前に展開されゆく、悼ましき酷り、マザ

くしい大禍災の形見！

余は暗然として、しばらくは言ことなかつた。

只老松千古の緑に、恒久の平靜と安泰とを示すなる我が大官居の外廓を拜しまつりては、ゆるぎなき皇國と宮室の御榮のほどが忍ばれてうれしいのであつた。

これより、余は生々しき廢墟の探訪にかど立つのだ。

第二節　神田區の狀況

今ニコライ堂の鐘いづこ

「芝で生れて神田で育ち……。」の歌韻に漂ふ神田ッ兒の氣魄！それは江戸、東京の永い時代をとほして、の誇りであり華であつた。

學校雲立、學生群闘、書肆櫛比、その潑溂たるアトモスフエーアに、凡そ來り參ずるものゝ程は、皆悉く清新なこの神田ッ兒氣分の洗禮を受けないものとては無い位の強烈鮮明さであつた。

その神田の街々も、あはれ今日は見る影もない黑土と化し去つてこの間までの面影は微塵たにこれを求めらるべくもない。

文字そのまゝの廢墟！それは我が親愛なる神田區を云ひ表す此の際の一ばんよい名辭でなくてはならなかつた。

九月一日、午前十時ごろの、あの謹愼風發、齊しく我が政界の推移を驗し、新内閣の閣員に就て語り、我が帝國教育會長澤柳博士起否の商題につきての胸襟うち開いての、華々しかりし快談高話！その休暇明け第一日の帝國教育會内、倶樂部室の閑雰も、思へば今は夢であつた。

一ツ橋通りは帝國教育會を初め、女子職業の大建物も、皆きれいに燒き拂はれて、教育會門前の辻男爵の銅像が獨り淋しく突つ立つて黑土の燒跡をじつと見てゐる樣なのも、云ひ樣のない感觸である。

商科大學は流石、その洋式建物の形を存しては居るが、内部はきれいに燒きつくされて、ガランとした空洞の樣な殘骸に、却てその痛々しさを見せてゐる。

神保町の電車十字路につ立つて四方をはると、その邊りには、震災前まで文字そのまゝの蜘蛛の糸の樣に四方へ引いてあつた、高架電線類か、瓦斯管其他の線と共に、地上に落ち墮かれて四離滅裂の有樣、道を行く人々の妨げとなることおびたゞしい。

辛ふじて、儒失を免れた小石川、牛込、方面の高臺の倒壞淺れの人家が、手にとる樣に沉く見える、

しその間を阻む、神田一帯に建物の一ッだに存し居らぬ爲である。二日から三日にかけて無蓋にも電車線路へ引出されてほかしてあつた焼死體、窒死體も、今日は流石に、商大なる廃體收容所に運ばれて、死體を探し求める夫々の近親の人々の涙を新しくしてゐる。

余は、この邊一帯の餘りに廣漠たる狀況に、一言のそれに連ぬべき辭なきを思ひつゝ、神田橋方へと向つた。來て見ると、神田橋は、きれいに落ちて通行人は、その隣なる瓦斯管か水道管の所を這ふ樣にして通つてゐる。

こゝより小川町へ抜ける道筋も亦同樣の黑土である。

駿河臺に、幾然屹立、その愛慈の鐘の音に、幾多都人士の魂を活かし慰め來つた。名代の會堂、そのニコライ教會堂も亦免れることが出來なかつた。

「鐘か鳴る、鐘か鳴る、ニコライ堂の鐘か。鳴る……。」

と、その神秘の妙音を綾美した歌詞も、今ははかない思ひ出の、悲しい韻と化してしまつたのであると……飯田町、萬世橋の邊り亦荒涼、軽快のボーギ運ふ省線の高架路は痛ましくその長軀を横へて永久の沈默、臥す。あはれさは一しほ深いのであつた。

只一つ、その中に、日露海戰の勇者、軍神廣瀬中佐の銅像が、杉野兵曹長とからみ合ふ如く、須田町の廣場に突つ立つて、無殘なりしこの間中の災禍の一部始終を見きはめてし、無常の思ひもいと深げに、默默としてあるのを仰ふいでは、余は思はず

「オヽ、悲しかりし軍神よ、曹長よ！」

と、叫ばざるを得なかつた。

「嗚呼若し口あれば、一日夜より二日夜にかけての火海と化せし、この邊の眞狀を語れかし！」

仰げゝ默又默。黑土焦土の街區を渡り來りし初秋の風、氣味惡き感觸に颯と吹き過きゆく……。

而も奇蹟は、恰も軍神中佐の庇護によつてか、神田區の一隅に現れた。

智水橋際の街區一列、火の海の中に、黑煙に渦巻かれてあつと三日二夜、而も、些かの火災を受けずして殘存してゐるではないか。

「オヽ、砂漠の中のオアシスーそれにもなぞらへ得べきこ　黑土焦土の中　殘存家屋の集團！　余、茲に探訪第一の奇蹟と不思議とを見る！、不可思議なること家並！！

暫らくは、茫然自失、その不可思議、奇蹟、直面して、余は心身の剛直狀態を覺える計りであつた。

やがて余は淺草橋方面から、日本橋區の狀況探訪へと志した。

第三節

日本橋區方面

デパート王國三越の殘骸

淺草橋電車停留所附近の混雜は眞に口舌以上である。淺草方面へ急ぐもの、兩國橋を渡つて本所へと志すもの、本所方面より出て來て、我が來し道を余と行違ひに神田方面へとゆく人、本石町方面へと急ぐ人、其の人々は或は荷物を背にし、幼兒を背負ひ、或は傷ついて跛足をひく。或ものはパンを頰張りつつゆき、乙は氷をかぢつて歩く、荷車に山ほど荷物をのせて引ゆき押しゆく一家族と覺しき人々。

或者は、跣足或者は上衣を着けず、中には白布に「尋ね人何某」と墨黑々と認めし旗をかざして、的もなき尋ね人を探してゆく……。

凡そこの十字街の混雜は、彼の本所深川方面の被害者と、淺草方面のそれ、及び日本橋京橋方面のそれと此の處に於ける交錯によつて演じ出される震災後に顯著なそれであらねばならなかつた。

暫しは、この混亂の十字街に立つて悼ましき人々の去來に、瘝乎と沈默の凝視をつゞけてゐたが、やがて足を南の方へと向けて、美事に一掃されし日本橋方面へと向つた。

一昨々日までは「東京中での日本橋」とその豪勢と脫俗とを誇つてゐた日本橋區も、あはれ河岸には一戸をも殘さぬ全滅のあはれさ。

而も、この地域として、逃げ路の二路、陸も海も周章て驚ぎし際の情なさに、陸なるは火災に包まれぬ道を選ぶ餘裕なく、海路は滿潮に加ふるに逆風しきりなりしを判斷する餘地とてはなかりしとて、持つべき財寶を苦しみの中にとり出し乍ら、遂にそれさへ抛ち捨てゝ、身からゞ逃げおはしたのが上々の部であつた、悲運と危險とに遭逢したとは、思ふも悲慘の極であつた。

その名殘を語る河岸一帶の燒け殘りの船體と、半燒けの材木類の浮き漂ふてゐる狀――おゝ！その間々には悼ましき運命を語る水屍體の三々伍々浮び上つてゐるのもあはれ一際深い。聞けばこの日本橋河岸では、辛ふじて船にのがれて安全の胸なぜ下したのも束の間、滿潮と折からの逆風とに舟が次第に川の上流へと進み、左右の兩岸の火の手に舟體共に耐えられぬほど熱せられ、苦しさに水中へ飛び込んで死んだ者も多かつたとか。それにやつと耐え得たものは、次の大旋風に捲きあげられた火の粉、火のついた木片其他の頭上からふり落されて、おはれ舟諸共水の上で焼け死んだと云ふ悲慘な運命に終つたものが多かつたとは、思へば限りなく殘虐の猛威をふるふた火焰であつたらう！

河岸を去つて、東京の代の名橋、彼の日本橋の上まで來た。そして深い感慨に沈んだ。おゝこの日本橋

大地は壞れたり

!!それは彼の腐軍が絶大の筆を揮ふた東海道五十三次の振出しの昔を忍ぶその日本橋だ。錦繪の日本橋なのだ、それに何だ、この今我が立つてゐるこれは……どこからともなく襲ふて來る鼻をつく臭氣!!

よく〳〵見れば橋の袂の所には「死體收容所」と云ふ立看板さへ立つてゐるではないか、あゝ日本の眞の中央、繁華のセンターとして誇り來つた日本橋か、死體收容所になるほどのこの慘狀!予は云ひ得ぬ感に涙さへ出ない。

その橋を、飢と疲れと恐怖と絶望とを極度に見せた人々がひつきりなしに通る、燒けた家を探しにゆくのか、死んだ家族の骨を索める爲か、それとも亦、ゆく所とてなき彷徨か……。

見渡すと、彼方に半世紀の榮華の殿堂と誇つた彼のデパートの王城、三越か黑焦の殘骸を悼ましくも見せてゐる。近づいてよく見ると、玄關前の彼の一對のライオン像が、

「人間の力の弱さ、人間文化の果敢なさ」

とあざ笑つてゐるかの樣に燒け跡に殘つてゐる。

澤山の巡査が聲をからしての交通整理にも追つかなかつた日本橋交叉點には、白木屋の跡が僅に忍べるほどに燒けくづれてしまつてゐる。住友、村井、西川、森村など、ありし日の榮華の跡の忍ばるゝ諸建物がその邊に僅、形ばかりを殘してゐるのも情ない。

東京に於ける新思想、新知識の門戸丸善も、あはれ大山の崩れ落ちた如く倒壞燒失しつくされてゐるのも云ひ得ぬ淋しさである。お隣の日本生命の大伽藍室内が、燒け出された新橋署の假事務所となつてゐる皮肉、更には南洋成金の豪勢を誇る如く突つ立つてゐた星製藥社、大建築も、筋向ふの第一相互生命保險會社の高層も、共に震災火災兩攻めに爲には、もろくも傷み破れて、見るからもう取こぼちの危險さを偲ばせる迄になつて居るのも、つく〳〵無情感を深ふするのであつた。

茲に日本橋區に於て唯一の殘存建築物が、日本經濟界の樞軸、東洋金融界の中心、帝國唯一の金庫である日本銀行であつた事は特記するのは、獨り余の意を強ふする所であるのみならず、帝都を初めとして關東罹災民二百萬の以て幸ひとし、頷みとし、やがて歡喜する所のものであらねばならぬ。

兜町、蠣殼町の兩相場町も、やつと道順でその所在が分る位の程度に燒け崩れこの間まで、金の爲に眼の色を變へてゐた連中も、今頃はつく〳〵黃金の夢からさめたとであつたらう!余は、日本橋區を見終つて京橋區へと志す。

第四節　京橋區の狀況

銀座に立ちての感慨

東京と云へば直に銀座を連想する位、銀座は東京に於て樞要な地位にあつたのである。それ丈け、その銀座を包括するこの京橋區の潰滅は慘憺たるものであつた。今、新聞記事によつて、京橋區全滅の經過、あのはげしかつた火の手の方向等を想像すると、恩はず身の毛のよだつ思ひがする、そしてもう夢にも銀ブラを思ふともならず、彼の華やかな銀座祭を見ることも出來なくなつたのかと思ふとつく〴〵燒け殘りの東京での生活の味氣なさが余の心をつくのであつた。

新聞記事は可なり深刻に、そして眞に迫つたこの日本の中樞の廢滅の經過を指示する。

一日正午の激震後間もなく京橋山城町に起つた火災は西南の風に煽られて勢ひ猛烈を極め二時間の後には中央新聞社、ジヤパンアドヴアタイザー社、電報通信及銀座電話局等を紅蓮に包み、消防の配備は殆ど及ばないために潮の寄せるやうに猛威を逞しうして數寄屋橋、瀧山町、日吉町へと進んだこの際更に一方の火の手は宗十郎町の藝妓屋街から起つて國民新聞社附近一帶から新橋際に擴がり北方に進んで兩鍋町、時事新報社、實業之日本社、カフエ・バウリスタなど全く無人の境地と化し東京朝日社が變方の火の手に包圍されたのは薄暮に近い五時半頃であつた、そのうち日本橋方面から火龍の如く南下した火と共に銀座通りを埋め東京隨一の市街地は夜半までには文字通りの曠野と化し一町を燒く毎に勢ひを加へる火の手は銀座裏を突破して二日朝頃までには采女町商務省日露交渉の記憶新な樹齢木挽

町の遞信省等悉く烏有に歸し、築地方面の外人住宅地等亦空しく焦土となつて到る所大建築の殘骸から餘燼と殘火を吐くのみである、この間赤羽工兵大隊は水を以て消火することが全然不可能となつたのでダイナマイトを投じて家屋を破壞し防火區域を到るところに作つたがこれまた功を奏せず銀座をつくした火は猛り狂つて芝口から芝浦埋立地に飛ひ一日夜十一時十五分ガスタンクは轟然たる音響と共に破裂して黑煙と焰は天を眞紅に染めた「そら危ない」と火焰の方面を眺めて避難した人は多く芝公園方面に集合し櫛ヶの間と增上寺本堂附屬舍墓地等全山を埋めて燒け殘りのトタン板を屋根とし辛ふじて一命を拾つた人々、妻子親類を失つた人など恐怖と絶望と飢餓、疲勞あらゆる災害を一時に受難して鳥獸に等しい生活に辛ふじて生命だけを繋いでゐる、全市の火漸くをさまつたあとには立退所と書いた札を掛ぎ我家と覺しき跡を悄然と眺める者、近親知友の安否を案して燒跡を探す者など默々として流れをなしてゐる、新富座前には黑焦げとなつた男の死體がいまだに取り殘され、築地河岸には逃げ場を失つた人の死體が浮流してゐる。

扨、余は、日本橋區を後に京橋を渡つて銀座へ出た。

「車の燒死體か、累々と、あの廣い路面に横はつてゐるのが一種の壓を感ずる。併し、よく〳〵見ると流

と平生の銀座を想像させる乃に何物をも出し得ないではないか。只鐵材ばかりペチヤンコになつた電

石銀座通の焼跡は、他の何處にも見出し得ぬ特色を示してゐることが觀察された。

それは――丁度仲見世を大規模にした樣な大きな煉瓦壁の店が列んでゐたから、それが礎材だけになつた形で、丁度コの字を幾つも列べた樣で、それが又、赤くもならず、又黑色とも化せず、白色に見えてゐるのが一種異樣で、丁度曠漠たる滿洲邊のどつかをさ迷ふ樣な心地がする。

建築中であつた銀座ビルヂングが、名物ともならずに流産したのは、惜しかつた。銀座四丁目は燒野ケ原の追分けと化し、外廓かやつと出來かけてゐた歌舞伎座が、その新築落成の華々しい興行をも俟たずにこの災火に遭ふて、魔の宮殿の樣に、黑くくすぶつてその邊りに聳へ、今にも物の怪が棲み込みさう、又ほんものゝ化物が出さうな姿に化つてしまつたのも情ない。

五分間に燒け落ちたと云はれてゐる築地本願寺は、黑幕を切つて落した樣にカラツとして一種の新しい寂滅感をよぶ。

南無歸命頂來山川草木悉皆成佛……南無阿陀佛〳〵、

門徒らしい老人が朗々と、その燒けた大殿堂を拜み乍ら經文を唱へてゐる。

道行く人の、疲れと興奮と恐怖と絶望とは、どこもとみな同じい。

京橋を去つて余は丸の内にと向ふ。

鮮顯、雄偉の外觀によつて、文字そのまゝて進んだ文化街を誇ポする東京驛前一帶のビルヂングは、流石この震動にも身じろぎだにせざりし容つきを見せて、その周圍の混亂と騒擾とを冷やかに下してゐるやうに見え。

第五節　丸の内の狀況　ビルディングの偉力

只、どうともすることの出來なかつた、それ自體内からの火災、若くは猛烈勢ひを以て迫り來つた、四周よりの狂火には耐え得で、外廓の平然たるに内部をガランドウに燒き拔かれ、ポカンと天に向つて大口開いてあきれてゐる樣、姿態を見せるのを目出しては、一種云ひ得ぬ哀愁が湧く。

震災について眞先に火を發したと云ふ警視廳、さてはこれにつぐ丸の内歡樂の巷なりし帝國劇場、共に燒け乍ら好個のコントラストを見せる。東京館の危なかしい二階三階四階の外部を氣にかけぬ如く、平階の入口では、コツクらしい人達が、セツセと炊き出しの用意をしてゐる「雜人も出入を禁ず」と怒つた樣な字で硝子戸になぐり書いてあるのが、危急の際を思はせる。

大地は壞れたり

一旦、府立一中に引越した整視廳か、又丸の内へかへつて來たので、その近所の東京日々新聞社の表通りと共に、去來の自動車や、人の往還で、戰場のやうな混雜を見せてゐる。血眼の記者、ギロリと光る警吏、眼、おつかなさうにそれを眺めて通る通行人、ガソリンの臭ひ、自動車のブー、一見して神經衰弱になつてしまひさう！

東京驛は流石帝都正門の大入口に恥ず、巍然として、原形を有し止めてゐるのが、此上なく嬉し、構内はどこもこゝも避難民で一ぱい、そして壁と云ふ壁には、一面に紙片が張りつけられてある、迷ひ子、尋ね人探し、友人への通信、其他公掲物類である、丸の内ビルディングはスツカリ入口の戸を閉してしまつてゐるが、壁が少々落ちた丈で少しも異狀を見せぬ、その邊の他の三つのビルディングも同樣である。

大手町近くの二つの洋館は、あはれ火に中をきれいに燒きぬかれて、氣の拔けた樣な姿を突つ立てゝる。

お堀を一つ隔てゝ、畏き宮居に對するこの丸の内は、京橋、日本橋方面よりする火を防ぐ何よりの防火壁である意味よりして、この地域一帶の雜踏は、とひり、その所有者、營業者たちのよろこびに止らないことを思はなくてはならぬ、宮城前の大芝生、日比谷公園一帶の罹災民避難者の群居生活のみぢめさを凝を以て眺めつゝ、余は芝方面へと向つた。

第六節　芝區の狀況

神威と佛法

「芝口一丁目から、金杉四丁目まで、芝での下町方面の全部を灰燼に歸した猛火は、三日午後六時頃に至つて漸くおさまつた——。

實に芝區の半以上の燒失であつて、その戶數二萬五千、罹災者十三萬人、死傷者約二千人中死者三百人」

とは新紙の報ぜし所、來て見れば、聞きしに勝る慘狀である、巍然として、その原形をなし罹災、火災何するものぞと誇り愛宕山麓に在る增上寺には、避難民集ひ寄り、身しろぎも出來ぬ有樣、芝公園も亦然り。その寺、壁に一ぱい張られた張札はすべてこれ迷ひ子探し、尋ね人の廣告である。

愛宕町から金杉町三丁目へかけては、見渡す限り茫々たる燒野ケ原、燒け殘つた協調會の窓からのぞいた避難民の顏の哀へに哀愁はいよ増してゆく。

御成門附近の鐵道病院、芝區役所、後の巡査教習所から政友會本部、その隣の赤十字社本社など、皆一

刷毛、きれいさつぱり焼きつくされて一面の焦土となつて仕舞つてゐる。

櫻田本郷町から佐久間町、虎の門へかけての左側も綺麗に焼けて、日本で一ばん古い洋館の記念物を借用してゐた虎の門の女學館も滅茶々々の姿となつてゐる。にも拘らず隣の金比羅樣が焼けなかつたのはこれぞ正しく神威の致す所と、増上寺の佛力と共に、田はずも有難やーと云ひたくなつた。

有難い話と云へば、あの焦熱地獄の眞只中なり淺草に、觀世音樣が、同じく焼け残り給ふと聞いてゐる。「いざさらばその有難い功德にあやからん」と、人の流れ、電車道を日比谷より神田橋方面へと引返こ目ざすは本郷、下谷、淺草の彼方面である。

第七節　本郷區の狀況

學府の荒廢

本郷の誇り、東洋一の學府、その帝大もあはれその大半を焼拂はれて不調和、殘骸を天日にさらしてゐる情なさ。デカンショ〳〵の赤門もあはれ大破に遭ひ赤誓の面影がない、本郷三丁目の交叉點に立てば東南部の一帶は美事に焼き拂はれて荒漠限りない有樣、只前方の餘燼に掩はれて、下町方面まで見とほす

ことの出來ぬ、この邊りに流石に死骸を見ぬが、二日夜あたりは不安の爭鬪が可なり激烈にあつたらしい話、

お茶の水の名物と名指さるゝすべて――博物館、女高師、順天堂等すべて跡形もなく焼きつくされて、」人をして呆然たらしめる。順天堂病院火災の際、收容病院患者たちの悲慘な話は、聞いた丈で頭が慄にたる位てある。

神田へ渡るあの高いお茶の水橋も、中央が焼け落ちてゐる、こゝからもあはてゝ逃げ出した人が、あの深い底へ落つこつたと聞いた。考へてさへ身ぶるひを催すことでないか。

併し本郷區にまだ今度の災害では、その半分か火災を免れたこと丈でも、非常な仕合せをしたとよろこばねばならぬ方で、水道橋際の松平さんのお邸か焼け、ずつと元町をお茶の水まで一なめにした、火の勢ひは、大へんであつたとは、それを見てゐた人の話。全く今度の火災では、火が大手をひろげた樣に横に擴がつて、一息に町と云ふ町、家と云ふ家の悉くを掩でゝいつたから堪らなかつた。そして、それをどうすることも出來ず、唯え乍らに、只じつと見てゐる外なかつたお互人間の悲しさ。

夕焼けの空の樣に、まつかに焼けてゆくその紅蓮の焔は、その時、しんしつ恐しい人間たち二百萬の運命を嘲ふ惡魔の舌に見えたのであつた。

本地社頭れたり

第八節　下谷區の狀況

上野公園の落日

「ヒシ〳〵とつめかけた避難民の爲めに、動きもとれぬ有樣となつた上野公園の一角に立つて、四望すれば、これは又何と云ふ荒漠たる四邊の光景なのだらう！

見渡す限り、只黑土、目に見える限り只焦土、その平面的單調を破る西洋の古城の樣な建築物の外郭が却て生々しい廢滅の感じを深くする。

しばらくは、言葉もなく、我と我が眼を疑ふ樣に、じつと各方面からの、この刺戟に對して居た余は、久しくして發作的に叫んだ。

「ひどい。實にひどい、あんまりだ。あんまりだ。」

あとは又無言。云はぬのではない、云ふ言葉がなかつたのだ。

眼下の上野驛と、松坂屋の空虛な殘骸も、悲しみ泣くが如くに見えた、遮るものとてない爲か、六階より折りとられた十二階がすぐそこに見える、觀音樣の堂宇の、少しも傷まず燒けず悠然として舊態を存して居るのは、此の際神々しく、寧ろ神秘的にまで感ぜられた。

きれいさつぱりと燒却しつくされ、嘗めつくされた所は、探訪しても、すべてが單純な位あつ氣なくて書きとめる多くの事柄を見出し得ぬ。

それよりも、この上野公園内の活きた、生き殘つて「生の苦しみ」を苦しんでゐる人々の觀察探訪と出かける方が意味が多いのではなつたか、

そんな事を考へ乍ら、きれいに燒けた下町方面を尙も眺めてゐると、蝶の樣に電車道を往還する人々の流れが、人の運命の悲しさを葬る無言の葬列の樣に見え出した。悲しい沈默でないか。それに引かへて公園の各所に、隨所に動物の呻りの如き叫喚怒聲を聽くは、苦しきこの際の「生への努力」の喊聲であるのだ。「苦しくても活きよ。」とをしへてゐる樣に見える。半分の十二階に、この時赤い夕日がチラと輝いたがすぐ又かげつた。」

第九節　淺草區の狀況

念彼觀音力

大地は裂れたり

「この區、災害狀況を傳へた新聞紙の記事は色々あるが、次に掲ぐる如きが、その正鵠に近いものである。

と思はれる。

「橋場の古河汽船会社、有馬伯別邸、今井別邸など川岸にある凡そ百戸及び観音堂、仁王門、大塔の七八軒を殘し殆ど焦土と化し、強風と火災の爲めに無慚な焼死を遂げたもの數知れず死體は路上に打ち倒れ、風浪り鬼氣人に迫る、避難民は着のみ着のまゝで浅草公園に一時脱れたが忽ち火炎に包まれ親子兄弟何れも離散先を爭ふて、新谷町の新堀橋方面に雪崩へみ寄ふして生命を取り止めた、その數約一萬、吉原方面は一軒だに殘らず全部崩壊焼け拂はれ全町の娼妓妓夫廓内の住民は生命辛々裏手から吉原公園に辿りつき、ホッとする間もなく火は忽ち同公園にも及び千數百名は附近の池に飛び込み互に胴を繋ぎ手を握りしめたまゝ全部溺死を遂げた此の災害から脱し得た住民數萬は何れも市外へ逃げていつたが吾妻橋廐橋の兩橋、假橋木橋も全く破壊し僅に迂回して兩國橋を通るもあり向島、寺島を經て千葉縣、茨城郡方面に、見るも哀れの狀態にて避難しつゝある。」

來てみれば、記事にもまさる物凄さ、十二階かゝ六階より折れて、その折れたのが、群衆の眞只中へ墜落つこちて、勢ひすさまじく破壊した時の混雑々閣！思ひやるだに冷汗三斗の感がする。さなきだに月初めの公休日とて、押すな〳〵と浅草さして、つめ寄せてゐた大附小附連でどの小屋も、皆大入滿員の盛況で、興行係は皆久しぶりの大ニコ〳〵に祝ひ酒にほろ酔ふて楽しんだのも束の間、ドドン！

と云ふえらい勢ひに突如として襲した大地震に、歓楽の巷は忽ち阿鼻叫喚の修羅場と化し、浅草全體は命がけの人の混雑　恐ろしい有様を現出した事であつた。

その時、引つゞいて發したのが、火事！而も素敵に足、早い火事であつたから堪らない、地震て逃げまどふてゐた人々は、忽ち又火事から逃れ出さなければならなかつた。かうして、せゝこましい地域に於ける無數の人々は、公園、又は池を最後の逃れ場所として逃げたのであつたが、公園も池も、その地震、その大火力にいかでか支へ耐え得られたらう！火焔は皮膚を焼き、水は熱湯とぬるみゆき、遂には飛び火まで降り來つて、人々は生ける地獄そのまゝに、そこの公園、こちらの池の中に、悶え死、焼け死、水死を遂げなくてはならなかつた。

さうした最中に十二階　倒壊がある。劇場が倒れる、と云ふ騒ぎ、とても口にも筆にもつくされぬ混雑悲愴の場面が展開された譯である。

そんな事をゝの中に浮べ乍ら、余は浅草に來た。そして火焔の中に、只一劃、その災火から免れ給ふた觀世音菩薩の御堂へ歩を向けた。

果然！！

余はその餘り奇蹟的なシーンに盲ごてなかつた。どうしてこの火に、こんな四圍の狀況であつたのにこ

こ丈け免れることが出來たのであらう、不可思議なこと?…色々、心に浮べ來り、考へ來つてゐるうち、フト思ひ出されたのが觀音經の一偈であつた。」

「念彼觀音力、火坑變成池」

「そうだ、これだ〳〵、これが經文そのまゝ、こゝに示現したのだ。」

余は思はず手をうつた。そして科學とか云ふ薄つぺらなものを鼻にかけて威張つてゐる學者とか紳士とか云ふものを輕蔑したくなつて來た。

「すべてが信の上の事だ。乃に超科學の不可思議がある、神秘とはそれだ——。」

人間が科學にゆき詰つた時、神秘の哲學は易々として、之に融解の燈火をさゝげてくれる。そこにはもう正否や眞僞はない、一切が信であつた。」

フト我にかへると、又してゐ悼ましい現實が、乃に醜くも投げ出されてある。」

吉原の慘狀を觀んと、歩を此の方へ運ぶと、これは又慘中の極—吉原病院とおぼしき邊の吉原池には、」無數の人の屍が或は浮き、或は池の邊に或は棧橋の上に、或は破舟の側に、又上に、到る處に累々として横はつてゐるではないか、余は思はず面をおほふた。そして、來る道々、想像して來た大震災、大火災の時のこの地域の人々のむごたらしい實狀をほゞ察知することが出來た樣な氣がした。そして思はずブルプ

ルツと身ぶるひを感じた。その時フト、」

「南無阿彌陀佛〳〵」

と御念佛が、余の口をついて出た。」

第十節

本所區の狀況

被服廠跡の屍の山

被服廠跡の屍の山!!それが今回の大禍災に於て、如何に深刻痛烈な印銘として人々の頭にきざみこまれたことであつたらう!

死屍無慮三萬八千、二千人づゝの屍の山を築くこと正に十九と聞いては、誰かその凄慘に驚かざるものぞ、大正十二年にして、新しき回向院はこの地に立てらるべきものと云ふも、まこに理である。

その本所、その本所區は、櫻に名高き向島の地域の少數を殘して全部灰燼に歸し、礫るものとてない。

一面の曠野と化し去つた。

初めて大地震襲ふや、倒壞家屋夥しく、折から賣食炊事の爲に、火氣の使用多かりし時とて、忽ち、」

各所より火を發し、見る〳〵數町の本區は一帶の火の海となるに至つたのであつたが、その時、本區民の避難所として、最適地は、隅田一致被服工廠跡の廣場であつた。

地震に追ひ出され、火事に追はれた人々は、新くてドシ〳〵一家諸共荷物を携帶して、この大廣場へと避難したのであつた。そしてそれは警察の方でも勧めた所であり、事實絶對安全の場所であつたのだつたから我も〳〵とつめよせる人多く、忽ちさしも廣いこの空地も、避難民と荷物とで一ぱいになつてしまふと云ふ始末であつた。

その時分には、火は三方から、次第にこの空地の方向へと燃えさかつて來たが、人々は平氣であつた。しかに避難してゐた刹那、全く頭上から、しんこつの火が降り出したので、忽ち事だ。アレヨ〳〵と云ふ間もなく、所嫌はず落下する火の玉、それを避けようとして、皆とつと逃げ、勢ひ餘つて若者婦女子を倒すと云ふ有樣、その倒れし上へ人は倒てゐることゝて忽ち折重なつて倒れ、壓死、窒死、閉絶

立どころに既の山を築くと云ふ慘事を招來した、一方旋風は更に強くなり行き、大きな火の塊は、雨の如く落下するにそ、命からく〳〵逃び來りし荷物にその火がつき、四面は早一面の火と化したるにそ、中なる人々は、只あちらに逃げ、こちらに逃げ居るうち遂に疲れと飢と、焦燥とに、あはれ悲くその廣場にうち斃れてしまつたのであつた。かうして三萬八千の生靈は、永久に火を呪ひ、風を呪ひ、地震を恨ふて怨らく、靈魂安きに歸ることはあるまい。實くだに物すごき慘事ではあつた。

余は今その累々たる既の山の側へと來た。一種異樣の臭氣は風なきに人の鼻をつき、何とも云へぬ厭しである、しんに鬼氣人に迫る、とはこれを云ふのか。永らく居るに耐えない。次、見るに忍びない、立くにも滅の出せぬひとさである。余は逃げる樣にそこを辭して龜澤町から深川方面へ向つた。

第十一節　深川區の狀況

三面は火、海は激浪

深川區に於ける第一日から第二日にかけての震災・火災の狀況は次の樣であつたと聞く。

「下町の中に焦土と化した深川區の避難者は船と他の方面に〳〵のがれたが、それも惨、一日夜本所

大地は裂れたり

若宮町に起つた猛火は、強風に煽られ瞬間に深川方面に延燒し一方大島町の倒壞した大會社から東北の強風で兩方面から深川を襲つたので同區は各外郭を一面の火に包まれて殆んど逃げ場がなく一部月島、越中島方面の人が芍西方面の荒川放水路から小松川、行德方面へ脫れるなど大混亂を來し木場の材木置場からも一時に火炎が燃え上つたことゝて同所の水邊に避難してゐた人々は材木を抱いて水中に飛込んだもの無數に到る處死體となつて累々と重なり合ふ有樣は鬼哭愁々面を向ける可くもない又新大橋、洲崎郭内は激震と大火と加ふるに激浪の襲來で全く逃場がなく住民全部行方不明である。

三方からの火！それをさける唯一の陸路さへなかつた、深川區の人々の悼ましき運命、只賴りとなる海路は、舟をも呑まゝ激浪が襲來して來たとは……。

かうして悲しき運命の人々は、皆水に火に惱まされつゝあらん限りの呪ひの言葉を火と水にあびせ乍ら悶え死んだのであつた。

余は一面の灰となつた深川區を見て、多く記すと能はざる心持に捉はれて、逃げる樣に本所方面へ引かへして來た。そして國技館内の避難民の、どこに曉らぬ「悲しき生」をいたみつゝ、辛ふじて渡れる兩國橋を渡つて江西へと引かへして來た。

本所につゞく龜戸の町もほとんど全滅と聞いた、假令暫らくにせよ、その地に勤めてゐたと云ふ經驗を

持つ著者には、さうした事を聞くとは、限りなく悼ましい事なのだ、あゝ龜戸の町、そこの五萬の人々、希くはその身に恙なけれ！余は遙かの彼方、龜戸天神、香取神社の方に向つて合掌禮拜した。そして、茲に強く

「我が香取校、千五百の愛兒達よ、二十五の敎師諸君よ！まさきく在せ！」

と念ずるのであつた。

第十二節　其他の五區の狀況

安全地帶を殘して

四谷、麻布、赤坂、小石川、牛込の五區は所謂山の手に位し、震災、火災ともにその災禍を受けること少かつた。勿論少々の被害は、この未曾有の大震災、大火災に際しては免れざる所とするも、彼の全滅の下町六區のそれに比しては、すべてが雲泥の差においてあるのであつた。

疲れし身、感動はげしき心、それに時間もない。

余はこの安全地帶とも謂ふべき五區の狀況を、テクリ歩き乍ら視察探訪するの勞を止して、一氣に本書

大地は壞れたり

の稿を作るの策に出でた。

而して、採訪正に二日に亘り、

心身爲に勞すること普通ではなかつたものを……。」

第十一章　帝都隣接地方の震災

大震災　際東京に於ける未曾有危險區域たる神田區一橋帝國教育會にあつた著者は、初章詳記した通り眞に九死に一生を得、爾來大混亂の帝都中を、地震と火災と飢渴と恐怖、襲はれ乍ら、縱橫に疾驅して、眞實の震災の狀況の摘錄に晝夜を忘れてゐた事とて、事實帝都隣接諸地方――横濱市を初め、湘南地方、駿相國境方面、靜岡縣の狀況、或は千葉市を初め、房總地方、並に伊豆七島等の震災狀況を見聞視察する暇間と餘裕とを見出し得なかつた事である。

而して、茲に本章を設けて、帝都隣接地方の震災狀況を記す所以のものは、その災害に於て、帝都以上の程度にありて、ほとんど全滅に瀕し居る横濱市を初め、慘憺たる湘南、駿相國境地方、並に房總地方をも本書記中に收錄することの先づ書題にフイットし、一方讀者をして、その間に一脈の連絡をつながしめるの

便宜多かるべきことを察して事、そのすべてが、著者の實見にあらざることは、最初に豈つて正直にことはつて置く所である。

第一節　横濱市の狀況

――文字そのまゝの全滅を見た――

横濱市に於ては、九月一日午前十一時五十分頃の第一回の大震動と火災、及び二日午後一時の第二回大震動とによつて、ほとんど全く地上建築物の倒壞、燒失を見、死傷者數十萬と云ふ慘憺の狀況を示した。

茲に、諸新聞記事中、その正確に近くして描寫、眞に迫れるを思はするもの二三を抄錄して、その狀況を忍ぶこととする。

斯くて、日本第一の輸出港横濱に、全くの焦土と化し、原始の曠野に歸したことを思ふ時、余の眼は、云ひ得ぬ熱涙にうるほふのであつた。

（その一）發震よりその夕まで（第一日の狀況）

――全市の住宅の大半はぺちやゝ――

★地はれたり

横濱市では一日正午前十分頃最初は水平動の地震か三十秒程つゞきそれから上下動に變つたと思ふ間もなく全市の住宅は大半ペチヤ〳〵と潰れてしまつた身を以て免れたものはまだしも幸ひである屋根の下に抑へられ壁の間に挾まれて出るに出られず助けを呼ぶ悲鳴があちらにもこちらに揚る、避難民の多くは横濱公園と櫻木町驛前にうづくまり中には海岸へ飛び出して船で沖へ乘出したものもあるが川の中の船に避難したものは後で船がやけたので死傷者を多く出した櫻木町驛の廣場から見渡すと恰も書飯時で火を使用して居たことゝて潰れ家の各所から十數の黑煙が立ち登ると見る間もなく西北の烈風にあふられて紅蓮の舌は潰れた市街の上を我が物顏に這ひまはる、先づ横濱貿易新報社の後から起つたのが元町小學校に移り貿易社をなめつくす頃には北から燃えて來た猛火は櫻木町停車場及び電話局を烏有にし眞金町や住吉町から燃え立ち其他に十數箇所から黑煙を張らせたので横濱市は全く黑煙に包まれてしまつた、正金銀行や縣廳市役所などは地震には潰れなかつたが猛火の爲めに敢なく燒盡された、斯くて午後七時頃には縣廳、市役所正金銀行グランドホテル、横濱船渠會社、櫻木町驛、横濱驛、神奈川驛を始め屈指の建物悉く烏有に歸し、全市火の海となり横濱市は全滅に歸した、殊に山下町外人居留地の被害は特に甚だしいやうである公園及び櫻木町驛前に於ける避難の民衆は一時は四方を猛火に包まれて焦熱地獄の有樣となり中にはもがき死するものもあり櫻木町驛前にも屍體が七人ばかり轉がつて居たが誰も

收容する暇がない其の内に潮と潮とが迫つてくるが一滴の水もないので黑い濁水をガブ〳〵やつてやけたゞれた梁に落ちて居るのを拾ひ合つて食ふさま悲慘の極みである併し全市がやけ潰れたのであるから市役所でも警察でも手の出しやうがないので避難民は餓死を待つばかりの狀態で夜を明した此の日の死傷者は十數萬に達しその内死者が數萬に達するだらうと云はれる。

（その二）第二日より第三日にかけての横濱の慘狀

市中は二十間おきに死者一人の割

一日夜横濱内外の慘たる光景は想像だも許さぬ程、酸鼻の極で、大横濱の内外及び港内は宛然火焰の海と化した、各種製造工場、稅關、倉庫及び各新聞社、横濱驛、櫻木町驛、神奈川驛等大小となく燒き盡されスタンダード及びライヂングサン石油會社の倉庫赤一色となり石油は八方に飛火して民家は思ひもかけぬ慘禍を蒙り石油タンクの破壞する音響は巨砲の破裂する如く人心恟々一人として生きた心地とてはなかつた、石油は流れて各河川から海に入り大小のランチ、艀船、荷船等に忽ち延燒し水上の危險いふばかりなく、汽船は避難民を載せて沖合遙かに遁れた、燒けに燒けた一夜が明け、白煙の間に全くの大地は壞れたり

焼野の原に化した大横濱を俯瞰した時、市民は皆吾子は何處に、我妻は、我母はと離散した家族の名を口々に呼んで焼け跡にと向つた、郊外に難を逃れた者は夜の明るまでに神奈川驛前から危險な鐵塔と焼け殘つた電線網とを飛越え〳〵横濱驛前から櫻木町方面にと向つた、龜裂は深さ一丈、幅二三尺、断層五尺位の所もあつた一方辛ふして横濱公園に避難した市民は一夜を火焔に煽られて手も、足も、顔も、眞黑に爛らして一夜の苦熱に十年も年老いた面持であつた、履物など滿足に穿いてゐるものは十人に三人とはなかつた、大抵は繃帶で足を卷いてゐた、地震に次く火焔に髮の毛は焼かれ打傷や火傷で傷のたいものとて一人もなかつた、顔は泥と灰で化粧され男やら女やら一寸見わけがつかぬ有様、杖を頼りに足を引き乍らトボ〳〵あてもなく行く様はこの世乍らの亡者であつた、それでも生き殘つた者は何たる幸運の者であつたらう死者は殆ど數へ立てられぬ程路を挾んで黑焦となつて倒れてゐる、電車の中で即死した者、投げだされて頭を碎いた者、逃げ損ねて路に焼死した者、電線に引懸つて即死したらしい者それ等は二十間に一人位は見受けられた、殆ど總ての死體は裸體で黑く焼かれ中には赤く脹れて居るのも澤山あつた、殊にいぢらしいのは子供がそのまゝ焼かれて丸く小さく固まつて居るのや、馬が半死半生の體で蹲踞つて居るなどとても見るに堪へなかつた、死兒を抱いて泣きすがる母、娘の手を固く握つて血走つた眼で何か睨んでゐる父、それらしい死體を見つけて泣きもえせぬ若者、常識的な悲嘆を通り

こした人間の本性その儘のいたましい情景であつた、横濱公園の避難民はその數何萬に達し全く人を以て堤まり公園の池は爲に泥土と化し、避難民は泥水を口にして僅に渇を醫やした、しかも火焔に包まれて苦しさの餘り泥中に顔を突つ込んでその儘死んだものも數多あつた、根岸、山手の方面も全く同樣、海岸通埋立地は龜裂一層甚だしく全く海中に沈入した所、右と左と喰ひ違つて四五尺も低下した所もある、避難民は震災以來一物も口にせず一杯の水も咽喉を通してをらぬのが多い、税關は第一回の激震でやられた、メリケン波止場の倉庫内には多數の貨物が殘し元氣の若者や魚屋などはこれを公園へと運び饗渇に倒れかゝつて居る避難民に分與して居た、ウイスキーなどは「氣付藥」にするのだといつてほんの一口宛のませてゐた、しかもこの所はれたる第二日目に至るも震動は突發して人心を益々暗くした、午前十時五十八分から二十秒程の强震あり、午後二時十一分から二十五秒程の鳴動あり、更に六時二十七分三十秒から四十五秒に渉る大强震があつた。

此兩日の罹災者中殊に氣の毒なのは外人で、彼等は地震・國日本を恐れてゐたがこんな震目に遭はうとは思はなかつたらう、海岸通の外國商館で執務中の外人は半數もやられたらしい、彼等の中には餘りの驚愕に絶息したものもある漸く逃れた者でも――日本人も同樣だが火焔の熱氣に蒸されて死んだものも多かつた、その後一時下火となつたが九時、十時頃から再び各所に火の手が上つた、山手方面も

に辛じて殘つた箇所からも時ならぬ火の手が上つた、日暮に至るも餘燼は絶えなかつた、陸上、水上とも警官、水夫、有志等は救助に奔走し鶴ヶ岡持寺及び川島小學校等に各三千の避難民を收容した、沿道には行倒れたもの算を亂して横はり渇して命絶えたもの、傷の出血多量で素人手當の甲斐なき者等其處にも此處にも連つてゐるが何等醫療の道もなかつた斯くて二日の日は暮た、避難民は今更に新しい悲しみを加へた、夜の更くるに從つて所々に餘焔が輝いて黑い山に反映した、緊張してゐた持は夫程でもなかつた身の傷、心の傷は新しい痛みを加へて來た、三日拂曉二時頃であつたらうか神奈川方面に當つて大火焔が上つた、靜まり返つてゐる天地は再び慘たる光景を演出した、神奈川の山によつた所は前日の厄み逃れた所であつたのに火焔は高島山一帶を包んでゐた、かくして火焔の靜まると共に夜は明け放れた。

(B) 燒盡される全市を徹宵高島山から望む

激震猛火の東京を後にして一日午後京濱街道を只平常の健脚をたよりにヒタ走りに走つた沿道の慘狀辛苦は今更いはず殆ど夢中で横濱に近着いた時には既に全市街が紅蓮の焔に包まれてゐる眞最中であつた高島山の麓から横濱の方へ通ずる鐵道橋から先へは一歩も進めない、漸とのことで高島山に上り本覺寺本堂が倒壞した屋根の上に身を横へて通れ來る人來る人を捕へては現況を聽く、一人はいふ、高島町の

横濱市營食品市場は十前から午後へかけての盛り時で全市の八百物商が寄り集まつてゐたことゝて千に近い人は忽ち壓しつぶされると同時に隣接の横濱社會館公設浴場等から發火したので壓しつぶされたまま全部燒死したと、又いふ、西戸部町の藤棚の水道路の大鐵管が破壞され附近一帶は見る〳〵湖水に變じその上諸方から出火した火の手が燃え擴がり水火の攻めは眞に阿鼻叫喚といふより外はないと語る。翌二日未明稍火勢衰へた方角を見定めて勇を鼓して下山、横濱驛前からあの長い〳〵ガードに沿つて櫻木町驛前に出て大江橋を渡り岸壁へ向つて進んだ、横濱驛も櫻木町も殆んど見る影もない、ことに櫻木町驛前から横濱公園まで來る内の慘狀は言語に絶し大江橋を渡つて馬車道交叉點へ出ると一臺の電車が車臺だけ燒け殘つてゐるその前後に三四人乘客らしい人が眞つ黑焦げになつたまゝ倒れてゐたが迚も正視するに忍びない、尙ほも足を進めると燒死死體は殆ど數へることが出來ぬほど横たはつてゐる、四方八方から突風に煽られて襲ひ來た猛火に包まれ悲慘な最後を遂げたものであらう、道は彼方にも此處にも大人がやつと飛び越えることが出來る位の龜裂が惡魔のせゝら笑ふやうに大きな口をあけて待つてゐる、而も時々兩側の石造木造煉瓦造りの檜比する大厦高樓がどつと倒れて來る、電線が、うどんの鉢をひつくり返したやうに降つて來る、餘燼から來る熱度と燃え殘りが吹きつける風で驅け拔けるにも息苦しい中を燒け落ちた電線のもつれと道路の龜裂と到る所黑々として横はる死體とを踏けつゝやつと横濱

公園に逃げ籠いた、さしもの廣い公園も半裸體や裸の裏れな避難者で一パイに埋つてゐる、然しこゝへ逃げて來た人は身だけを救ふことが出來たのであの猛火が公園一體を包圍した時には洪水そのまゝのやうに公園内の廣場を滿たした水道大鐵管の破裂による濁水に首を浸して辛ふして蒸し殺しにされることをまぬがれたと見たところどれが男か女か判斷のつかぬ人ばかりで中には手拭やら帽かけやらで間に合せの繃帶をした重傷者らしいもの、或は吹きまくる火の粉が眼に入つてたうとう失眼したらしい小兒を抱く母と姉々が唯茫然として眞に此世ながらの生き地獄である、一方横濱驛から岩壁までの間に自動車、荷馬車、自轉車、電車等が燒げてたゞ鐵の骨だけが殘つてゐるのが幾百疊あるかも知れない、また鐵鎖近くのさる會社らしい建物の入口の石段には逃げ遲れた女事務員らしい姿の若い女が殆ど眞裸のまゝになつて悶死し果てゝゐる、駄でも應でもかうした死の町を拔けて予は目的の岩壁上屋迄來た、その邊には主を失つた犬やタテ髮も尻尾も燒いてなくなつた駄馬が濛々たる煙の中を狂ひ騰け廻つてゐた此の時餓死に面してゐる避難者を救助しやうとする波止場人夫が決死隊を組織して、半ば海へのめり込まうとしてゐる五軒上屋へ入つて桑港あたりから來たらしい立派な瓶に入つた飲料やら果物類の箱を破つてはどん〳〵持ち出し公園の方へ走つてゐた、怜度予の立つてゐる右手、軌道一つ越えたすぐ向ふ側の大上屋とその後方の赤煉瓦造りの大倉庫が前夜來火が入つてゐたためか機然四方の窓や扉の間隙から

物凄い黑煙が赤い舌のやうな火焰を交ぜて吹き出し、それが呼吸を壓迫するやうな勢ひで吹きつけて來た、前は海、後は將に火の海に化さんとしてゐる倉庫と上屋とがあるのみ、進むとも退くことも出來ない、もう死あるのみだ、此の上はたゞ裸となり海中へ飛び込み本船目がけて泳ぎつくまでだと觀念した時、天予を殺さず其處へ一隻のサンパンが通るのが見つかつたので聲をかぎりに呼び止めると、船頭は「右へ廻つて行け、そこへいま船をつけるから」と手眞似で知らせたので、右へ廻るとさつきの猛烈な濃い黑煙と火焰が益々烈しくなつて來て呼吸苦しさつたらない、暫らくするとサンパンが來たのでそれへ飛び乘つた、そして沖に碇泊してゐる日本郵船丹後丸の船側へつけて貰つた、

（その三）　灰の都と化した横濱市　（第四日の横濱）

港内は危險で入れない、ふので港外一哩沖に碇泊した商船シカゴ丸からランチで山下橋に上陸した。ランチが岸に近づくと黑山のやうな群衆が押寄せて犇めき合ふ、碇泊中の商船へ避難しやうとする人たちだ。第一震から甲二日おいた四日、朝來明のことである。岸壁は勿論崩れて足一歩横濱の土を踏めば物凄い鳴動と陷沒とで無裝の身やつを運ぶことすら困難である。山下橋附近の突堤岸壁はそれでも建物がなかつたゝめ火を避けて海に逃れることのできなかつた人たちで一杯である、地上に蓆や布を敷いて寢てゐられるのはまだ好い方で多くは地べたにそのまゝ龜裂と龜裂の間に倒れ浴びて極度の疲勞困

に死んだものゝやうに眠つてゐる。第三區のランチ突堤から谷戸橋を渡り海岸通りへ出ると、あの石造や煉瓦造の立並んだ面影は全く夢のやうに消えてゐる限り崩壊した石や煉瓦の焼野原である。僅に記念館の塔と、中央郵便局の外壁が濛々と立ち昇る餘焔に燻んで遥かに屹立してゐるのが一層荒涼たる思ひを唆る。電線や崩れた建物の石片煉瓦片が幅一尺以上の龜裂を縦横に生じた道路に充滿して足も踏込めない。と見ると全身黒焦となり内臓を露出した死體がすぐ目の前に横はる、面を背けて進めば數間を離れずして又眼に入る。ぶす〳〵と立ち昇る焼跡の煙は堪らなく鼻を衝く、火葬場の臭氣である。突嗟の激震で家屋に壓しつぶされ火に焼かれた數萬の人を慘虐な自然が葬る臭氣だ——。

萬國橋から東洋一を誇る岩壁を見渡すとこれ亦見る影もなく崩壊し大部分は海中に陥没して附近一帯は焼けた艀船の形骸や海岸通りの人たちが咄嗟の間にこゝまで持ち出しながら投棄した家財が漂ふてゐる崩れた岩壁の上に立つて海上を見渡すと防波突堤は殆ど海中に陥没し入口の燈臺が歪んで半海中に入り泛んだものゝやうに見える、漂流する溺死體——それは火焔に追はれて岩壁附近へ出た人が進退谷まつて海水に飛びこんだものでその數が幾百千であつたかを知らない——はいくつともなく數へられる、港外一哩沖でシカゴ丸の上から見た婦人が赤ん坊を抱いたまゝの死體など涙なしには眺められない、悲慘と言ふ言葉は此情景を表すにはあまりに貧弱である。税關も門柱の基礎を殘して全部倒壊焼失し裁判所も木造所長以下四十名法服のまゝ生埋となつて積み重なつた煉瓦以外に何ものも殘つてゐない。

の廣場と公園とは文字通りに累々たる死體でパンドルを握つたまゝの運轉手、支那馬車を御してゐたまま死んだ男、縣廳から逃げ後れたらしい人々の死體が頭をみな道路にむけて黒焦となつてゐる有樣は到底二目と見られない。縣廳、生絲檢査所、商業會議所、郵便局、水道局を始め本町通りに擬比した洋風建築は、遠く辨天橋に至るまで全部崩壊焼失して一睹遮るものもない。目抜きの伊勢佐木町には數十坪の沼が出來附近一帯横濱の歓樂境は一變して濁水の漲る泥沼となり終つたが吉田橋附近の市内電車線路に焼け殘つた電車が數百の白骨を内部に散亂したまゝ殘つてゐたのはこの附近の混亂がいかに凄絶を極めたかを窺はせる。

京濱間交通の基點櫻木町驛の建物は跡かたもなくプラットフオームは陥没して遠く高架線を走るレールは飴のやうにうねり焼けた省線の電車の鐵骨が數十輛行儀よく並んでゐるのは皮肉である。櫻木町一二三丁目に面した高架線のコンクリートには焼けた木片で避難者の場所や、行方不明の家族を尋ねる悲痛な文字が書き散らされ、この附近は交通の衝路にあたつてゐるため生き殘つた人たちで大雜閙を極めてゐる。横濱全市を通じて殘つた唯一の建物である中央職業紹介所が全く無事に建つて縣廳、市役所は或の本部に充られてゐる。この邊りから伊勢山、掃部山を望むと焼けた樹木で無殘な山肌が露はし戸部

町一帯の罹難民が無數に焼死したと云はれる一日夜の凄愴な光景を憶ばせる。吾々の持つ言葉の凡てを以てしても、この横濱市の慘狀を叙することはできない。凡ては想像を超越し現實の出來事とは如何にしても信じられない。要するに横濱全市は文字通りに全滅し死傷者は約廿萬を下らないであらうと信じられる。

（その四）全滅した横濱の慘害（八日狀況）

大震災後の横濱市は秩序稍回復したが焼死者の死體は八日に至るも殆收容されず、爲に川、街上に子供を背負つて溺死せるもの焼死せるものなど殆ど枚擧に遑むない殊に最も悲慘を極めたのは富士瓦斯紡績會社、寶樂座、電話局、縣廳、市役所、郵便局等の大建築物の下敷となつたもので壓死者は全體を通して約五千人に上り殊に山下町山の手方面に於ける外人の死傷者は未だ街上に横はり外人は佛國總領事を始め全滅の有樣である在留外人の中には教會の中で祈禱してゐた儘死んだものが約七十名もある、又家を失ひ家族を失つて發狂したものも各所で認められるが手を下すことが出來ぬ、官語不通のため食を得るに途なく死體となつて横はるもの數知れず又外人中には到底助からぬと知つて自殺したものも見受けられ酸鼻を極めてゐる、八日に於ける横濱市附近の慘狀は左の如し

一、横濱市民中死者約二萬、負傷者約十萬で負傷は日下の處横濱港外に碇泊せる東洋汽船コレヤ丸並に大阪商船丹後丸外三十隻の内地船及び外國商船、軍艦山城以下四隻に收容し手當中であるが手當中に死亡せるもの一千二百名を下らず

一、横濱市内に於ける集團的に焼死せる箇所は富士瓦斯紡績會社、電話局、正金銀行、郵便局、市役所縣廳、裁判所其他大會社工場幸に倒　並に焼失を免がれたる部分は新山下町、市川中町の一部、海岸町一部、中村の一部、引明寺の一部、久保山、西戸部の一部、等に過ぎず横濱市の開拓者である宮崎町の平沼專藏氏の宅は幸に災害を免れたので同氏宅を開放し罹難民を收容してゐる

一、縣市當局の避難者に對する配給は六日第一回を行つたが大人一人につき日に五合（外米）小人一人につき三合の割合である

一、横濱市街を通じて家屋の倒壞並に焼失せるもの約七萬一千あり、焼失を免がれたるは約九千五百戸位に過ぎず殆んど全滅に近く市内に於て焼失倒壞を免がれたる主なる建築物はグランドホテル、横濱海軍航空隊兵營檢査所、神奈川警察署、東神奈川驛、神奈川農工銀行、三菱川崎倉庫、山の手町英國海軍病院山下町獨和銀行、臺灣銀行支店、縣廳の一部

第二節　湘南の災害

大地は裂れたり

湘南に於ける災害につき或新聞社の調査報告せる所次の通りである

帝都續接地方の震災

▲保土ケ谷　戸數五千、倒壞家屋四千、町民約七千人、火災の厄を免れたるため町民に死者なし、富士瓦斯紡績、日本麥酒製壞工場の二箇所より發火せしも消し止む、絹撚會社倒壞、富士瓦斯紡績職工死者約四百人、日本麥酒職工死者十三名、絹撚工場職工死者十一名

▲戸　塚　戸數九百十八、倒壞家屋三百五十、殘り全部半壞、人口四千五百、死者二十七、火災なし

▲小坂村（大船を含む）戸數六百三十五、全潰四百五十、半潰八十、死者十八、重輕傷者二十三名、火災なし

▲鎌　倉　戸數四千三百十、全燒全潰二百七十六、半燒半潰一千九十九、流失七十七、流水五十、人口一萬八千八百四十七、死者三百五十四、重傷者一千四百八十六、行方不明者百、火災海嘯あり

▲江ノ島　倒潰なし

▲腰越、藤澤　倒壞せるも火災なし

▲茅ケ崎　戸數三千二百、全潰約二千、半潰一千、海岸の別莊全部倒壞、死者二十、重傷者三百、輕傷約一千

▲平　塚　戸數四千四百、倒壞約四千、人口二萬三千、死亡者二百五十、重傷二百、相模紡績倒壞、死者百六十一、海軍火藥製造所爆滅九棟燒失、藺乾燥場燒失、町内に火災なし

▲須賀、馬入、大野方面　死亡者百三十七名

▲大　磯　戸數三千六百、倒壞家屋約一千五百、別莊に完全のものなし、火災なし、人口約一萬、死者町民三十二名、旅客十二名（汽車顚覆のため、）

▲秦野、厚木　火災起り殆んど全滅

▲國府津　戸數七百五十　全壞　百五十、死者二十六、行方不明一

▲酒　匂　戸數九百、九割倒壞

▲小田原　戸數五千百十一、全部倒壞、燒失三千四百、御用邸閑院宮御別邸倒壞、人口二萬二千九百七十一、死者二百七十、重傷者五百二十

▲箱根塔ノ澤　戸數六十一、全潰十、半潰三十一、人口三百七十九、死者四、行方不明五、重傷一

▲箱根湯本　戸數三百七十四、全潰二十八、半潰八十四、人口二千九十、死者十、行方不明六、重傷十

▲小涌谷　戸數五十、全潰數及半潰九、旅館別莊共に修理をせねば使用に堪へず

▲蘆ノ湖湯　戸數九、全壞一、死者三他は全部半壞

▲宮ノ下　戸數三百八十三、全壞一百四十、半壞百四十、人口二千二百二十六、死者六十四（外國人二）重傷五、御用邸一部半壞

▲本箱根　戸數五十八、全壞七半壞五割、富士ホテル、觀光亭共に全壞

▲大涌谷　被害程度尠し

▲箱根町　戸數九十八、內新築家屋及寺院二箇所を殘す外全部倒壞、死傷外人四、旅客二、行方不明二、箱根關所の石垣地滑りで崩壞、箱根御用邸安全

（附り）全滅した鎌倉——松方公危く免がる——

地震の後に大海嘯

大地は壞れたり

鎌倉一の鳥居前別邸に滯在中の松方公爵は地震と知るや二階はしご段のわきに身をひそめた時に家屋崩

識したが幸ひに大した怪我もなく一時間後に救ひ出され、鶴ケ谷川上別邸に避難し岸博士が臨念の手當をした、同邸では同孫三郎氏と女中一名が壓死した、鎌倉で焼失した大きな建物は由緒深い圓覺寺、建長寺その他大小寺院、鶴ケ岡八幡の社樂殿、仁王門、大塔宮（本殿は残る）をはじめとし小學校、銀行、郵局、一大小別荘はほとんど全部まるつぶれ、または半つぶれとなり無事なのは鉄筋コンクリート造りの所謂館のみといつてよろしいが、名物の長谷大佛は自若としてのこつてゐる、三日までに鎌倉警察で檢死した數は三百餘であるが、全部の死者は一千名にのぼる見込みである、鎌倉警察署にては青年團、在郷軍人會の救助をかり罹災者の護につとめ御用邸を開放病人子供を收容し横須賀から廓援に來た水雷學校の海兵で周圍を護衛してゐるが他の罹災者は、半つぶれとなつてゐる鎌倉郡を中心とし鐵道線路上に小屋掛けしてゐる警察よりは炊出し援助につとめてゐるが糧食缺乏の恐れあり、横須賀鎮守府に供給を願つてゐるが十日ごろ到着の筈である。

第三節

潰滅死滅した箱根!!

——人も家も山諸共に——

國府津は食糧の不足に苦しめられて居て、町役場では全部全滅警察を斷絶し「全部焼失した我々は何を食す可からず」と布告を發し、暴民は蜂り飯を喰ふ者は暴徒を加へることさえある、飲料水無く、食ふべき蜂り飯も無い、此悲しき布告を耳にして小田原町に入る小田原は全町焼失した、海岸の鹽水を免れたが鹽霧と同時に吾妻座、第一小學校、幸町の三箇所から出火して見る〳〵中に各町に飛火して僅に一部の町丘地、紙宿寺町、蓮町、十三町三丁目を殘して全部を焼拂ひてしまつた、小田原小學校の生徒三百名小田原紡織會社の男女工數百名を始め、死傷者の數は數へることが出來ない、ステーションは主屋を殘すほか全壊し、小田原國府津間の堤防は全部決潰し居る、焼跡に何物をか求める人、泣き叫ぶ子の安否を尋ねる母親の間を通り抜けて箱根道に差しかゝると向ふから血だらけの男が杖に取りすがつて來る、熱海線根府川驛から列車諸共海中に墜落して重傷を負つたと聞いて驚いた「……私は何處を何うして海から出て來たのか判らない、たゞ他の人達は列車が海中に墜落しさうになつた際にあはてゝ出入口に朝突したことだけを覺えて居る、自分は多分窓から抜け出たのでせう」と、語る夫れでは御無事とも云ない握手をして左右に別れる。

箱根に行く湯本道は山崩れのために大部分通行出來ない、畑を通つたり川を渡渉したりして三日の夕暮にヤツと湯本の入口に到着した、「これから夜道はとても命懸けです」と土地の人に云はれ其夜は

壊した家の軒下に寝た、綿のやうに疲れきつて居ても微震がある度毎に飛び起る、朝ビスケット十數個を朝食にとつて湯本に入る、疎住樓の傾いた軒下をくゞつて湯坂峠に差しかゝると道は益々險しくなつて繩を傳はり岩角をよぢ草の根をつかんで峠の頂上に出る見渡す限り山崩れ、人家の傾くもの顚倒して居るもの半ば埋もれて居るものばかりである、道は昔の人々が通行した道だ水溜りの泥水を掬つて渴を醫す。

鷹巣山から强羅を見下すと比較的災害を受けて居ないが宮の下は甚だしいとのこと、折柄奈良屋から避難して來た女中の一群に聞いて見ると、奈良屋は半潰したが滯在客は全部無事、富士屋ホテルは半倒潰し片側の箱根細工販賣店等は全部谷底に墜落してしまつた、底倉の舊屋は倒壞し山崩れが避ける爲め、兩側より八千代橋に避難した旅客も土地の人々も橋諸共深い谷底に墜ち大部分は即死した、宮の下の鄕誠之助男別莊も倒壞した箱根で比較的被害の尠かつたのは强羅の外に小涌谷、仙石平等であるが交通杜絶して居ることゝて食物は後二、三日間を剩すのみとなり子供らは飢に泣き叫んで居る蘆の湯の紀國屋は倒壞し箱根町が箱根ホテルは湖中に半ば墜落し旅客の外人客四名は即死した離宮の崖は崩れて居るが建物は依然青い森の中に見えて居る、豐橋聯隊の電信線は小田原方面の聯絡を保つため軍用電線を架設し、靜岡聯隊の一部が糧食を携行して小田原方面の救援に赴いた、狹い道は小田原方面の安否を氣づかつて救援に行く人、負傷者を背負つて田舍に逃げる人、國許を差してゆく人、疲れ果てゝ路傍に倒れて居る人等で充ち滿ち

ちて居る、山中村以西では災害の跡を見受けなかつた。

第四節　駿相國境慘害!!

——貨車粉碎死屍累々たる沿道の光景——

被害の最も大きな駿河相模の國境富士山麓附近の現場を見る爲め二日午前九時自動車をかり沼津驛から東海道線に沿うて進む三島驛附近までは多少の倒壞家屋を見るに過ぎなかつたが同驛を越すにつれて道路は龜裂を生じ自動車の通行さへ容易でなく家屋は全部傾斜　倒壞したものも多く村民は道路の一方や畑地等に全部避難してゐる、裾野驛の北東函根山の嶺々通つて蘆の湖から東京電燈深良發電所に通ずる引水鐵管は缺損し奔流する水は全山に溢れ山崩れは隨所に發見される進むと約六里御殿場驛の南方凡そ一哩、釜戸の踏切附近から道路は大龜裂を生じ橋梁全部墜落して前進するとが出來ぬ、止むなく車を捨て線路傳ひに前進すると又ユラ〳〵と搖れるのを感ずる線路はグニヤ〳〵に曲り半哩の所に汐留驛を發した第四百九貨物列車が五十三輛の貨車を牽いて盛立往生せるに出會した轉んでゐる機關手の話では遠行中震災を受け停車した時はすでに中部八輛の貨車は脫線顚覆してゐたさうである凡そ二間後方の田の中から線路にかけ八輛の貨車は顚覆し殆と形骸を認めない迄に粉碎され貨物は散亂し更に二十餘間を隔てゝ後方に六輛の貨

車が取殘されて居る御殿場驛構内にも五十二輛を曳いた貨物列車が顚覆したまゝ傾はつてゐる、御殿場驛駿河驛間に架設された鮎澤川の百五尺の橋のピーヤは橋脚倒壞し南岸は河底に陷落し線路は全く切斷されてゐる其附近レールは屈曲し地面は陷落し慘狀を極む駿河驛の建物は壁根瓦が振ひ落されたゞけであるが午後四時に至るも震動歇まず青年團在鄉軍人出動し三島重砲兵隊より救援班出張し危險を冒して死體の取出しを行つてゐるが危難のため死した富士紡女工の死體累々として酸鼻の極を呈してゐる、死者の數は五百名とも云はれ一千名とも云はれてゐるその他煉瓦造り工場などは全部倒壞を見たが一般市中の日本建家屋は屋根瓦を振ひ落され多少傾斜を見た位で大被害を免れた、富士瓦斯紡の寄宿舍も傾き山崩れ道路の龜裂などは處所にあり全然崩れ落ちたのさへ見受けられる、御殿場驛以北は濃々たる黑煙天を蔽ひ地方民は甲州八ケ嶽か噴火したものだと稱し震動が納まらないのを再び大震の襲來を豫想し色々な流言蜚語行はれ人心恟々たる姿であるかくて駿河驛に着いたのは午後四時であつた倒山北機關庫の工夫の話によると山北驛建物は全部倒壞し機關庫は崩壞し該庫の機關車十輛全部脫線顚覆し給水タンクも破壞し慘狀を極め山北駿河間八ケ所の隧道は全部崩壞し全部埋まつたものもあり山北に於ける死者は四十名であると午後一時半頃より更に數回の震動起り人心恟々たる有樣であつた。

神奈川縣下被害

―縣知事報告概要―

▲横須賀市は全戸數約一萬一千八百戸の内倒壞せざるもの百五十戸(但半壞狀態)に過ぎず、その外四十戸は震災と同時に四箇所から發火燒失し、四日までに發見した燒死體約四百五十で尙續々發見しつゝあり燒失家屋の主なるものは海軍病院、海軍機關學校、海兵團郵便局等で軍港は全滅である

横須賀の慘害

鎭守府司令長官の報告

横須賀深田出火の爲め海軍病院全燒旭町方面の火のため機關學校全部海兵團新兵舍燒失市街はなほ燃つつあり元町通り九分通倒壞他も略同樣、軍需部下士官兵集會所、水交社等も大破使用に堪へず死傷者工廠其他海軍部内にて百五十名以上の見込なるも發掘困難通信不能等のため調査未完軍油「タンク」火災のため港内艦船には避難を命ぜり工廠は倒壞破損崖崩れ陷沒等甚しく當分就業の見込み立たず海軍病院燒失の結果横須賀には藥品醫療機械等の治療品及患者用毛布等無之なれり

▲都筑郡被害稍微にて死者十五名重傷者十三名、全壞家屋百三十二戸

▲久良岐郡横濱の南部に位し被害激烈にして死者百一名重輕傷者七百二十五名全壞家屋千二百十三戸半壞家屋二千二百九十九戸

▲鎌倉郡被害甚大にして不明なるも鎌倉、戸塚、腰越等の各町村は全滅の狀態である殊に鎌倉、腰越、興津は數箇所に火災起り死傷者算なく實數知る能はず

▲高座郡被害甚大死者五六百名、重傷者四五千名、倒壞三百五十戸半壞三百五十戸

大地は壞れたり

△横賀船渠は倒壊流失町は動産の損壊で殆んど全滅の狀態　隨り被害極度は引續き調査中
△中部は平塚町を始め各所に火災起り平塚火藥　の爆發に依り死者最も多く大震、平塚、二宮方面の倒壊
紙漉機械工場の倒壊に依り百名の死傷あり、各官衙病院の倒壊に依り死者二十名内外、上り急行列車は
大震で顚覆し死者三十四名あり詳細調査中
△酒匂郡川崎町を中心とする工場地帶は其倒壊も一層甚大で共判明せる部分だけ紡績工場死者百名、
重軽傷者二百名を算し其に防府製糖、東京電氣其他各工場の被害大、各町村の倒壊家屋は約七割以上
△震源地郡役所管轄大火災各地に起り全半潰家屋無數
△足柄下郡役所管轄大小田原町は全滅死傷算なし五日午後九時警備工兵第十五大隊より司令部に送した情報に
よれば相州足柄下郡では死者三千九百名を發見したが死傷者は無慮二萬七千名に達するだろうと同郡内
の食糧は今後五六日を繼續し得る程しかない狀態にある尚逗子葉山はされた閑院宮寛子女王殿下の從者の
女三名は溺死、四名は負傷した、又花園子爵夫人久邇宮殿下御姉君は各城野附近の民家で行方不明さな
られた

第五節　富士山麓の慘害（靜岡縣の一部）

鐵道線路として被害甚だしいのは御殿場、駿河間である、鐵橋は墜落し隧道は崩壊しレールは土深く埋沒死
者がその上になつたり線路の上部が谷へ跳飛され線路と畑が水平となつてその間が僅に普通の凡そ三倍と
なつてゐる所がある、如何に强震とは云へ永年鐵道工事に從事してゐる人もこの有樣には驚いてゐた、又
これまで人間の通行が出來なかつた足柄、伯山の嶮難箇所を避難民が續々嶮を越えて難を避けるので遂に
は人の通り得る道が此難所に出來て了つた煉瓦建の工場が倒壞した爲め死者多數を出した小山の富士紡は
その後兵隊や生き殘つた職工の手で三日夜から四日にかけ死體の掘り出しや假小屋の急造負傷者の收容な
ど大騒ぎ片付いたが粗末ながら新しい棺桶に可憐な女工達が壓し潰された顏、切斷された兩足、血の滴る死
體～黑色　工場着　俄投げ込むやうに入れては積み重ねられるのも幾日となく打ち捨てられた人々より幸
福なのである長さ四尺、幅三尺位のコンクリートで固めた煉瓦を取り除く作業を見ると四箇所ある細い出
口に將棋倒しの如く折り重なつてゐるものがあり又は我先にと押し合つた揚句機と機との間にはさまつた
り足を突き込んでゐるもの等の多いのも酸鼻の極である女工町と云はれた小山町も今や廃の町と化した、」
日の經つにつれ女工等の呻聲は呪ひの聲ソノものである。
やがて予て小田に到り再び夜の町を彷徨ふて見ると到る所醫藥材料はつき食物は薄っぎ一日一人握り飯一
個と云ふ悲慘な有樣である豪雨は降り强震は尙續く暗黑の小山町は尙も不安と焦燥が續くのであつた。

大地は裂てたり、

靜岡縣下の被害

—郡司令部發表—

戒嚴司令部の調査（靜岡憲兵隊の報告に基くもの）被害せし靜岡縣下の損害は次の通である。

地名	家屋倒壞	死者
三島	五	二
熱海	五五〇	約五〇
伊東	一六〇〇	約六〇
小山	二八〇〇	約五〇〇
御殿場	二三〇〇	一

第六節　房總に於ける被害

——倒壞家屋四萬に達す——關東戒嚴司令部發表

五日關東戒嚴司令部發表によれば房總半島方面は南方に至るに從ひ被害甚だしく、其概況左の如し（但し海嘯の襲來は受けず）

地名	死者	傷者	倒壞家屋
館山及北條	二、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、二五〇
木更津	二〇五	三、〇〇〇	二五、〇〇〇

銚子九十九里濱より南朝夷沈は大なる被害なし

—船形町の慘害—　千葉縣下における被害は東京灣に面せる海岸地最も甚だしく安房郡西海岸では全壞家屋一萬戸死者約一千、館山町及び船形町には火災あり船形の大部分は烏有に歸し鷹の島と沖の島との間に新に隆起した箇所があり安房郡各方面の罹災民に對しては那古町にある縣水産試驗場の試驗船房丸外二隻を三日夕千葉海岸に廻航した。

—安房郡の海嘯—　千葉縣において被害最も甚だしいのは安房郡であるが同郡富崎村には海嘯襲來し五十餘戸押流された、陸上並に海上の交通杜絶のため消息は一切不明である。

最後に千葉市に於ける慘狀であるが、最初第一報として入つた「千葉縣下では、千葉市慘狀甚だしく、家屋倒潰無數、火災を起し殆ど全滅に近い模樣」と、云ふ極く漠然たる報道以外に、帝都にゐた著者の耳には何等入る所が無かつた。

併し、其後に至つて、龜戸、千葉間の汽車開通引つゞき京成電車が押上、千葉間の開通を見せた事等よりしてその災禍のさまで甚だしからざりしことを推せらるゝに至つた。今茲に價すべき詳報なきを以て暫らくそのまゝとする。